

土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

浜 松

5万分の1

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「浜松」

目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	4
2.3	地域の特性	5
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	7
3.1	地形概説	7
3.2	地形細説	9
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	13
3.4	地形と災害及び保全との関係	16
4	土地利用の変遷の概要	18
4.1	過去の土地利用状況の概要	18
4.2	土地利用変遷の概要	23
5	調査地域の災害履歴概要	25
5.1	災害履歴概説	25
5.2	災害履歴詳説	27
6	調査成果図の見方・使い方	39
6.1	地形分類図	39
6.2	土地利用分類図	42
6.3	災害履歴図	42
6.4	成果図面の使い方	43
7	参考文献等	45

資料 既存資料におけるボーリング柱状図
 災害年表

調査成果図(別紙) 人工地形及び自然地形分類図
 土地利用分類図（第1期、第2期）
 災害履歴図（水害・土砂災害、地震災害、地盤沈下）

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「浜松」図幅の調査成果は、中部圏の土地分類基本調査（土地履歴調査）の2年目の成果として、平成24年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

1 調査の概要

1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

(1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

(2) 本調査による調査成果

① 土地状況変遷情報

i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあつては改変前の自然地形を復元し分類している。

ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

iii. 土地利用分類図（2時期分）

過去に作成された5万分の1地形図を利用して、明治期（現在から概ね120年前）と昭和40年代（同概ね40年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

② 災害履歴情報

i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集したものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

1.3 調査実施体制

(1) 地区調査委員会 (敬称略)

委員長

海津 正倫 奈良大学文学部 教授 (名古屋大学名誉教授)

委員

(学識経験者)

藤本 潔 南山大学総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授

(関係県・政令市)

絹村 敏美 静岡県交通基盤部農地計画課 課長

立花 充 三重県地域連携部水資源・地域プロジェクト課 課長

中山 貴裕 静岡市総務局危機管理部防災対策課 課長

曾我 廣秀 浜松市産業部農林業振興課 課長

(2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省国土政策局国土情報課

② 受託機関

地形分類調査・土地利用履歴分類調査

国際航業株式会社

災害履歴調査

昇寿チャート株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

2 調査地域の概要

2.1 地域の位置

「浜松」の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「浜松」の全域（南延伸部を含む）、北緯 $34^{\circ} 39' \sim 50'$ 、東経 $137^{\circ} 30' \sim 45'$ （座標は日本測地系[※]）、静岡県西部の浜松市中心部を含む区域である。

図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

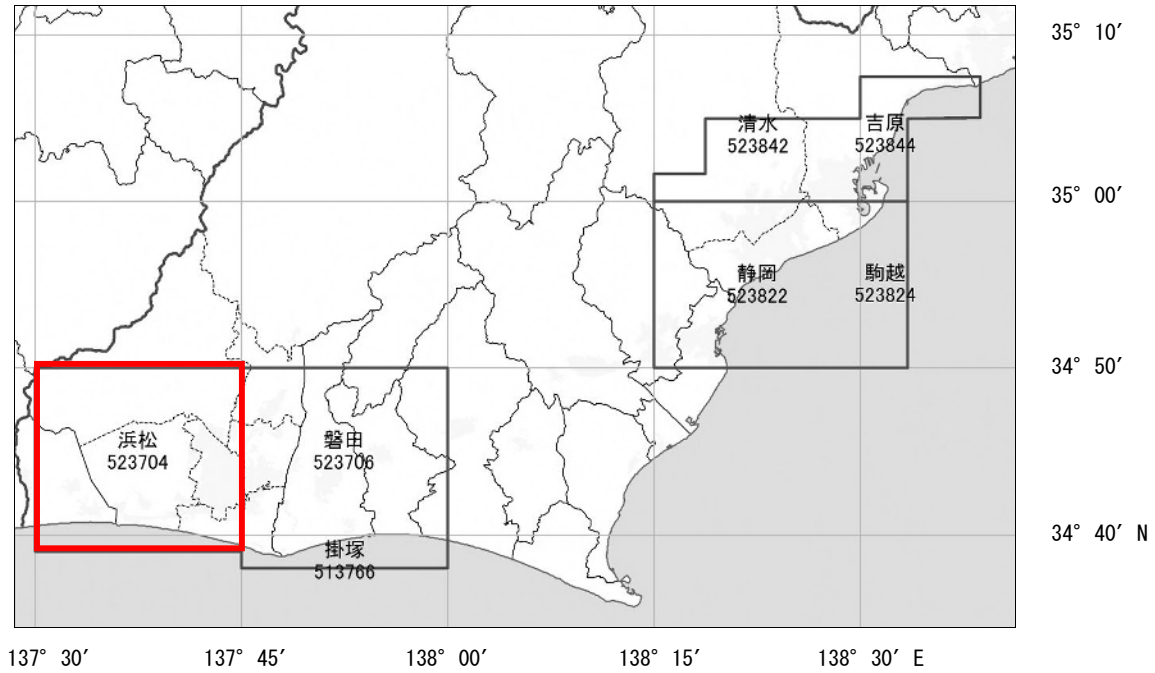


図 2-1 調査位置図

[※]世界測地系(日本測地系 2000)では、 $34^{\circ} 39' 11.9'' \sim 34^{\circ} 50' 11.9''$ N、 $137^{\circ} 29' 49.2'' \sim 137^{\circ} 44' 49.1''$ E の範囲。

2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、静岡県内の2市（浜松市、湖西市）である（図 2-2、表 2-1）。

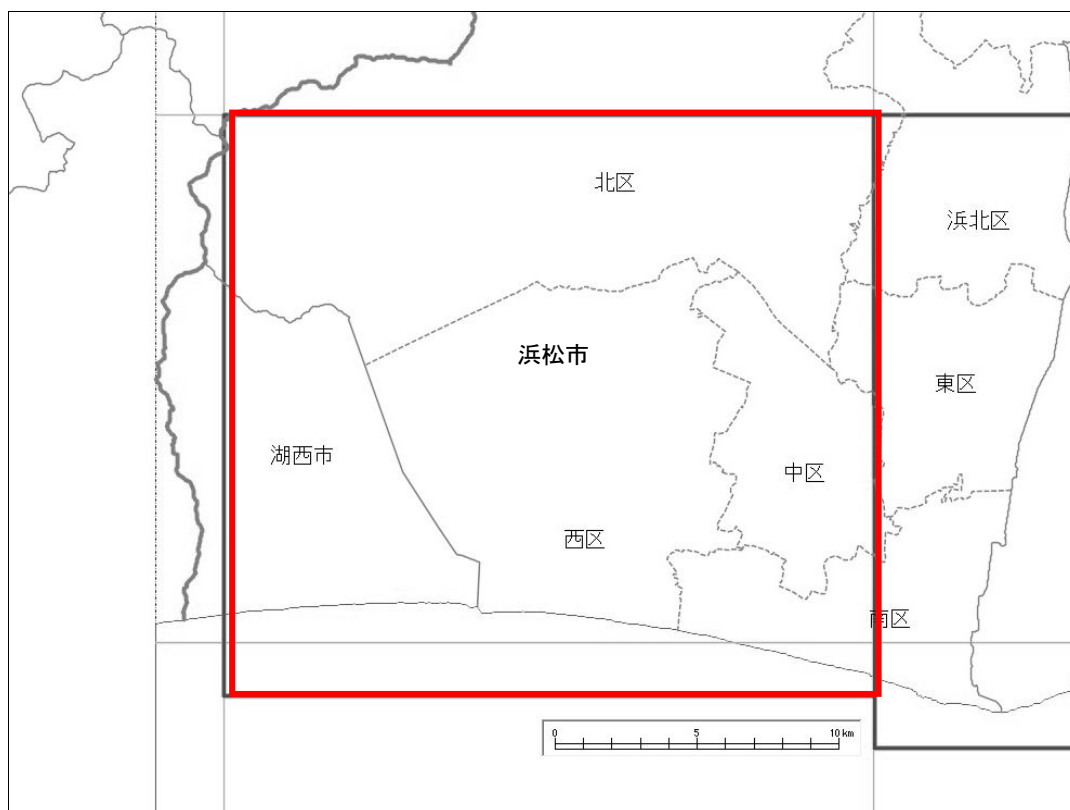


図 2-2 関係市町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
計	40,797ha	164,469ha	342,992 世帯	877,298 人
浜松市	34,069	155,804	320,085	815,614
湖西市	6,728	8,665	22,907	61,684

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2. 行政面積は国土地理院「平成 23 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 23 年 10 月 1 日現在）による。

3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果による。

2.3 地域の特性

(1) 沿革

本図幅は、全域がかつての遠江国に属し、明治4（1871）年の廃藩置県により、浜松県となった。その後、明治9（1876）年に旧駿河国、伊豆国からなる静岡県と合併し、現在の静岡県となった。

本図幅の中心部に位置する浜松市は、戦国時代には徳川家康が居城として浜松城を構え、遠江西部の経営にあっていた重要拠点であった。江戸時代に入ると、譜代大名が数多く入れ替わり藩主となり、歴代藩主の中から幕府の要職に就く人物が多く輩出されたことから「出世城」との異名もあった。また、本図幅内には、東海道の宿場として浜松宿、舞阪宿、新居宿、白須賀宿の4宿が整備されており、このうち舞阪宿と新居宿の間は、浜名湖と遠州灘がつながる開口部にあたるため、「今切の渡し」と呼ばれる渡し舟で結ばれていた。

明治期に入ると、浜松宿を中心に市町村合併が進み、現在では本図幅内では浜松市と湖西市の2市に統合されている。このうち浜松市は人口80万人を超える静岡県最大の都市として、平成19（2007）年には政令指定都市となった。

本図幅内では、JR東海道新幹線、JR東海道本線、国道1号が遠州灘沿いに、東名自動車道が浜名湖の北側を通るルートで整備され、交通の要衝としても重要な位置を占めている。

(2) 気候

浜松の気候を1981～2010年の浜松特別地域気象観測所の平年値(表2-2)からみると、年降水量は1,809.1mmで、月降水量は12月、1月に50mm/月台と少ないが、梅雨期の6月と秋霖期の9月には多く、それぞれ240mm/月を超えている。年平均気温は16.3℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は2.5℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は31.1℃となり、太平洋岸の温暖な気候となっており、冬季も比較的暖かく、夏季は暑い。

平均風速は各月とも大きく、1、2月は4m/sを超え大変強く、最も弱い6～9月でも2.8m/sと強い風が吹いている。最多風向は、西北西の月が6ヶ月と最も多いが、それ以外の月では反対方向の東寄りの風が卓越している月もある。また、年間日照時間は2,207.9時間で、梅雨期の6月に少なくなるものの、8月には220時間/月を超え、12～5月も180時間/月を超え、比較的多い。

表 2-2 浜松の気候表 (1981~2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1990 ~2010	1981 ~2010
資料年数	30	30	30	30	30	21	30
1月	57.0	5.9	10.1	2.5	4.2	西北西	196.5
2月	78.3	6.5	11.1	2.7	4.2	西北西	184.2
3月	149.4	9.7	14.3	5.6	4.0	西北西	191.0
4月	167.5	14.7	19.3	10.4	3.6	西北西	195.6
5月	190.5	18.7	23.0	14.9	3.2	北東	195.8
6月	241.3	22.0	25.8	19.0	2.8	西南西	148.3
7月	190.0	25.7	29.4	23.0	2.8	西南西	177.5
8月	150.8	27.0	31.1	24.0	2.8	東	222.6
9月	248.9	24.1	28.2	21.0	2.8	北東	161.0
10月	164.5	18.8	23.1	15.3	2.9	北東	165.9
11月	118.8	13.5	17.9	9.8	3.3	西北西	170.0
12月	52.3	8.4	12.7	4.8	3.9	西北西	199.5
年	1,809.1	16.3	20.5	12.8	3.4	西北西	2,207.9

「日本気候表 (気象庁, 2011)」による浜松特別地域気象観測所の平年値。

統計期間は 1981~2010 年の 30 年間。但し最多風向は、1990~2010 年の 21 年間。

(3) 地形及び地質の概要

本図幅の範囲は、静岡県西端に位置し、図幅東側に三方原台地、中央から西にかけて浜名湖がそれぞれ広い面積を占め、それを取り巻くように山地、丘陵地、低地が分布している。

山地は、図幅北西部から東北端へかけて中小起伏山地が分布し、山麓部はそのまま台地や谷底低地、浜名湖に接する箇所が多い。浜名湖の西側には開析の進んだ丘陵状の台地が分布し、南側は比高 50m ほどの海食崖をもって遠州灘に面している。また、図幅東部に広がる三方原台地は比較的平坦な単一の地形面からなっている。台地の標高は東北端で 115m、南部で 25m 程度であるが、本図幅内では 40~80m 程度の面が多い。低地としては、浜名湖に注ぐ中小の河川沿いに小規模な谷底低地、海岸低地が分布するほか、遠州灘に面して砂州・砂堆が東西方向に連続しその一部には砂丘を載せている。

地質的にみると、図幅北部の山地は、古生層のチャート、砂岩、頁岩、石灰岩、斑れい岩などの比較的強固な岩石からなっている。浜名湖西側の丘陵状の台地では、未固結の洪積層からなり、砂層と細粒礫層が大部分を占める。また、浜名湖東側の三方原台地では、上部は礫層、下部は内湾成の泥層からなり、礫層、泥層とも未固結である。低地の地質は、浜名湖周辺の低地では一般に泥砂礫互層からなるが、中小河川下流部では泥質の軟弱な地層となっている。遠州灘沿岸の砂州・砂堆には砂質堆積物が発達するが、その後背地には泥質の湿地帯も分布している。(5 万分の 1 土地分類基本調査「浜松」説明書による)。

3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既往資料や空中写真判読、精密標高データなどに基づき自然地形分類図（図 3-1）及び人工地形分類図（図 3-5）を作成した。

自然地形分類図については、現在、改変済みの範囲についても、終戦直後の空中写真や明治期の旧版地形図などから元々の地形を復元して図化している。また、人工地形については低地での宅地開発等による盛土地、丘陵地などでの大規模改変地（人工平坦地）や人工平坦地での元々の谷の位置、宅地開発等による切土地などを新旧の空中写真や地形図の比較から抽出・図化している。

3.1 地形概説

(1) 地形分布の概要

本図幅の南端は遠州灘の海域となっていて、図幅の中～西部には浜名湖が位置している。浜名湖の東側は広く三方原の台地となっており、西側は湖西台地、北側は引佐山地となっている。浜名湖周辺には浜名湖に流入する河川周辺の低地があり、浜名湖の南側から天竜川の河口にかけての海岸沿いに続く砂丘や砂州は遠州海岸砂丘地に区分される（図 3-3）。

本図幅の北側の引佐山地は稜線高度が 200～400m ほどの山地で、中生代の堆積岩や付加体の地層や蛇紋岩などからなる比較的起伏が大きな山地となっている。三方原台地は天竜川の扇状地が隆起して段丘化した台地で、北側では段丘面の高度が 100m を越え、南端部では 30m 前後となる。東側は天竜川に侵食された比較的直線的な段丘崖が続き、北西側は段丘を開析する中小河川の侵食崖となっていて、南側は縄文海進時の海食崖となっている。台地上には平坦な地形面が比較的よく残っており、南側は浜松の市街地の一部となっている。湖西台地は浜名湖の南西側の台地で、図幅の西端付近は段丘面が残っているが、浜名湖の周辺では開析が進み、段丘面はわずかに残るだけで丘陵状を呈する範囲が広い。浜名湖周辺の各河川沿いの低地はどれも小規模な低地で、比較的大きな都田川の低地も幅は広いところでも 1.5km 程度で、浜名湖への流入点付近の三角州の形成も顕著ではない。遠州海岸砂丘地は幅は広いところで 3 km ほどに達するが、連続してみられる部分では幅 1 km ほどとなり、背後は浜名湖沿いの低地や天竜川の氾濫原低地などとなっている。

人工地形としては浜松市街地周辺の低地での盛土地や、台地での住宅地や工場などの大規模改変地（人工平坦地（宅地等））、果樹や茶などの栽培のための大規模改変地やゴルフ場（人工平坦地（農地等））がみられる。浜名湖周辺には湖面などの埋立地が広くみられる。



凡 例

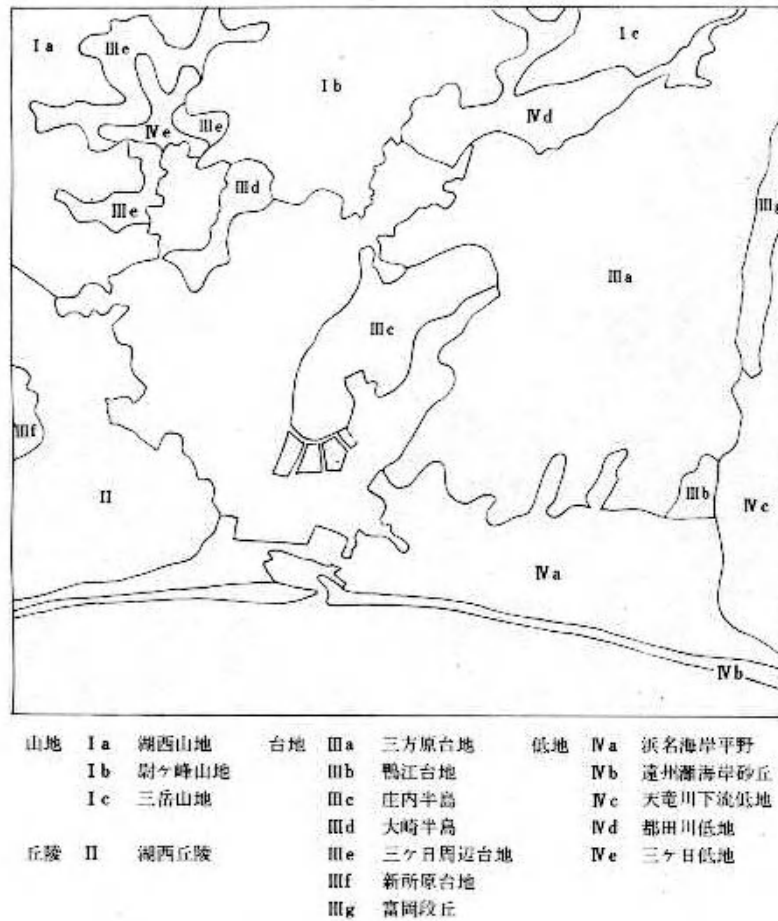
自然地形分類 Natural landform

- | | |
|--|--|
| <p>山地 Mountains</p> <ul style="list-style-type: none"> 山地斜面等 Mountain slopes 麓斜面及び崖錐 Colluvial slope or Talus 土石流堆積地 Depositional landform formed by debris flow <p>台地 Terraces and upland</p> <ul style="list-style-type: none"> 砂礫台地(更新世段丘) Gravel terrace 砂礫台地(完新世段丘) Gravel terrace(Alluvial terrace) <p>水部 Water</p> <ul style="list-style-type: none"> 現水部 Recent water surface 旧水部 Former water surface | <p>低地 Lowland</p> <ul style="list-style-type: none"> 緩扇状地 Gentle alluvial fan 扇状地 Alluvial fan 谷底低地 Valley bottom 氾濫原低地 Flood plain (back marsh) 自然堤防 Natural levee 旧河道 Abandoned channel 湿地 Wetland 三角洲・海岸低地 Delta or Coastal lowland 砂州・砂堆(礫州・礫堆) Sand bar 砂丘 Sand dune 天井川及び天井川沿いの微高地 Raised bed river 河原・河川敷 Dry river bed 浜 Beach |
|--|--|

図 3-1 浜松地域の自然地形分類図

3.2 地形細説

本図幅における山地や丘陵地、低地などの地形地域区分は、20万分の1土地分類調査や5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）（図 3-2）、その他の文献（町田ほか編，2006）などを参考に、土地履歴調査として、対象地域全域で統一の区分及び呼称を採用した（図 3-3）。



資料：静岡県(1972)

図 3-2 1/5 万土地分類基本調査における地形地域区分

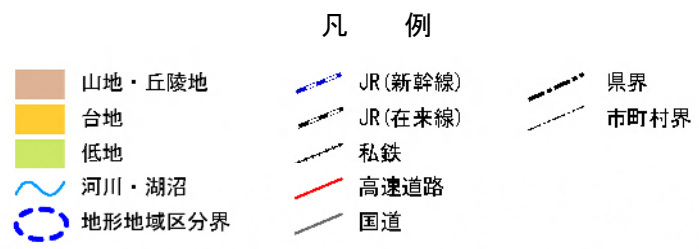


図 3-3 本図幅における地形地域区分

(土地履歴調査において設定した区分及び呼称)

(1) 山地

引佐山地

本図幅の北側に広がる山地で、稜線高度が 200～400m ほどの山地で、中生代の堆積岩や付加体の地層や蛇紋岩などからなる比較的起伏が大きな山地となっている。

(2) 台地

本地域の台地は主として三方原台地と湖西台地からなる。

三方原台地

三方原台地は天竜川の西側に広がる東西約 16km、南北約 17km の更新世段丘で最終間氷期最盛期(ステージ 5e;約 13 万年前)以降に形成された河成段丘とされる。東端部には高さが異なる 3 面の段丘がみられ、最も高位で広く分布する三方原面(ステージ 5e)のほか、富岡面(ステージ 5c;約 10 万年前)、姥ガ谷面(ステージ 5a;約 8 万年前)が分布している(小池・町田編,2001)。三方原面は北側では段丘面の高度が 100m を越え、南端部では 30m 前後となる。東側は天竜川に侵食された比較的直線的な段丘崖が続き、北西側は段丘を開析する中小河川の侵食崖となっていて、南側は縄文海進時の海食崖となっている。台地上には平坦な地形面が比較的よく残っており、南側は浜松の市街地の一部になっている。

湖西台地

湖西台地は浜名湖の南西側の台地で、図幅の西端付近は段丘面が残っているが、浜名湖の周辺では開析が進み、段丘面はわずかに残るだけで丘陵状を呈する範囲が広い。

(3) 低地

本地域の低地は大きく分けると浜名湖周辺低地と浜松平野、遠州海岸砂丘地に分けられる。

浜名湖周辺低地

浜名湖周辺の各河川沿いの低地はどれも小規模な低地で、比較的大きな都田川の低地も幅は広いところでも 1.5km 程度で、浜名湖への流入点付近の三角州の形成も顕著ではない。浜名湖南岸の浜名川は古い時期の浜名湖と遠州灘を結ぶ水路であったとされ、当時は浜名川を西流して遠州灘に流下していたとされる(図 3-4,写真 3-1)。

浜松平野

浜松平野は天竜川沿いの扇状地や氾濫原低地などからなり、天竜川を挟んだ東西の幅は北端で約 6 km、南側では 10km 以上に達し、広い低地を形成している。低地には天竜川の網状流の痕跡の旧河道や自然堤防が広範囲にみられ、北部の緩扇状地では幅 50m 前後の数多くの網状の細流の跡がみられ、中～南部の氾濫原低地では幅 100～200m ほどの旧河道がより大きく回り込むようになり、蛇行するようになる。緩扇状地と氾濫原低地をとおした勾配は 1.7‰(1.7/1000 \div 0.10°)で、緩扇状地の区間は 2.2‰(2.2/1000 \div 0.13°)、氾濫原低地の区間では 1.1‰(1.1/1000 \div 0.06°)となっている。

遠州海岸砂丘地

遠州海岸砂丘地は幅は広いところで 3km ほどに達するが、連続してみられる部分では幅 1 km ほどとなり、背後は浜名湖沿いの低地や天竜川の氾濫原低地などとなっている。



資料：藤原ほか(2010)

図 3-4 旧浜名川の推定河口位置



写真 3-1 浜名川の低地(手前の農地)と砂州(奥の集落)

3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

本図幅は第二次大戦後大きく成長した自動車関連産業が盛んな地域であり、浜松市街地やその周辺では氾濫原低地や台地などを中心に宅地や工業用地などが広がっている。近年は山地や台地斜面も開発されており、工業団地や大規模改変によって平坦化された農地、ゴルフ場などが整備されている(図 3-5)。

本図幅の広範囲を占める三方原台地や湖西台地は谷底低地と台地面との比高差が大きく、元々の地形を大きく切り盛りして平坦地を作り出して住宅地や工場用地を確保している箇所が多くみられる。静岡県内の大規模なニュータウン整備は高度成長期の昭和 40 年代にから始まっていて(表 3-2)、本地域では 1990 年代以降も盛んに行われていて、都田地区、佐鳴湖西岸地区、半田地区、和地地区(桜台)、西都地区などのニュータウン開発事業があげられる。三方原台地での大規模開発は台地面とその周辺の斜面を平坦化してより広い用地を確保しており、三方原台地東側の段丘崖付近の開発としては半田地区や浜北新都市地区があげられ、浜松市街地西側の佐鳴湖周辺の開発としては佐鳴湖西岸地区、西都地区のほか、佐鳴台付近も元の地形を大きく変えて開発されている。三方原台地の北～西部には都田地区、和地地区、瞳ヶ丘団地、桜ヶ丘団地などの大規模開発がみられる。工業用地としても都田テクノランドや細江テックランド、和地地区(桜台)、浜松技術工業団地などの大規模改変地がみられる。湖西台地では住宅地より工場敷地や農地としての大規模改変地が多くみられ、南部にはスズキ自動車などの大規模な工場がみられ、北部の入出や新所周辺には大規模な農業用の平坦化地がみられる。大規模な切り盛り造成地では、地震の際に盛土部分が変形し、建物に被害が発生することがあり、他地域の事例では平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震や平成 7(1995)年の兵庫県南部地震などで各地に大きな被害が生じたことが知られている。

扇状地や氾濫原低地、海岸平野などでは、元々水田などに利用されていた箇所に盛土して、工場用地や宅地等に用いられる箇所がみられ、浜松市街西側の三方原台地南側の低地や都田川沿いの金指付近には元々水田であった低地に大規模な工場や工業団地が立地している。

浜名湖の沿岸には南側を中心に埋立地が広がっており、湖水面を埋め立てたもののほか、一度、養鰻池として利用されていた箇所がその後、埋め立てられた箇所もみられる。

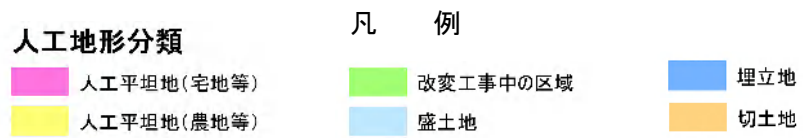
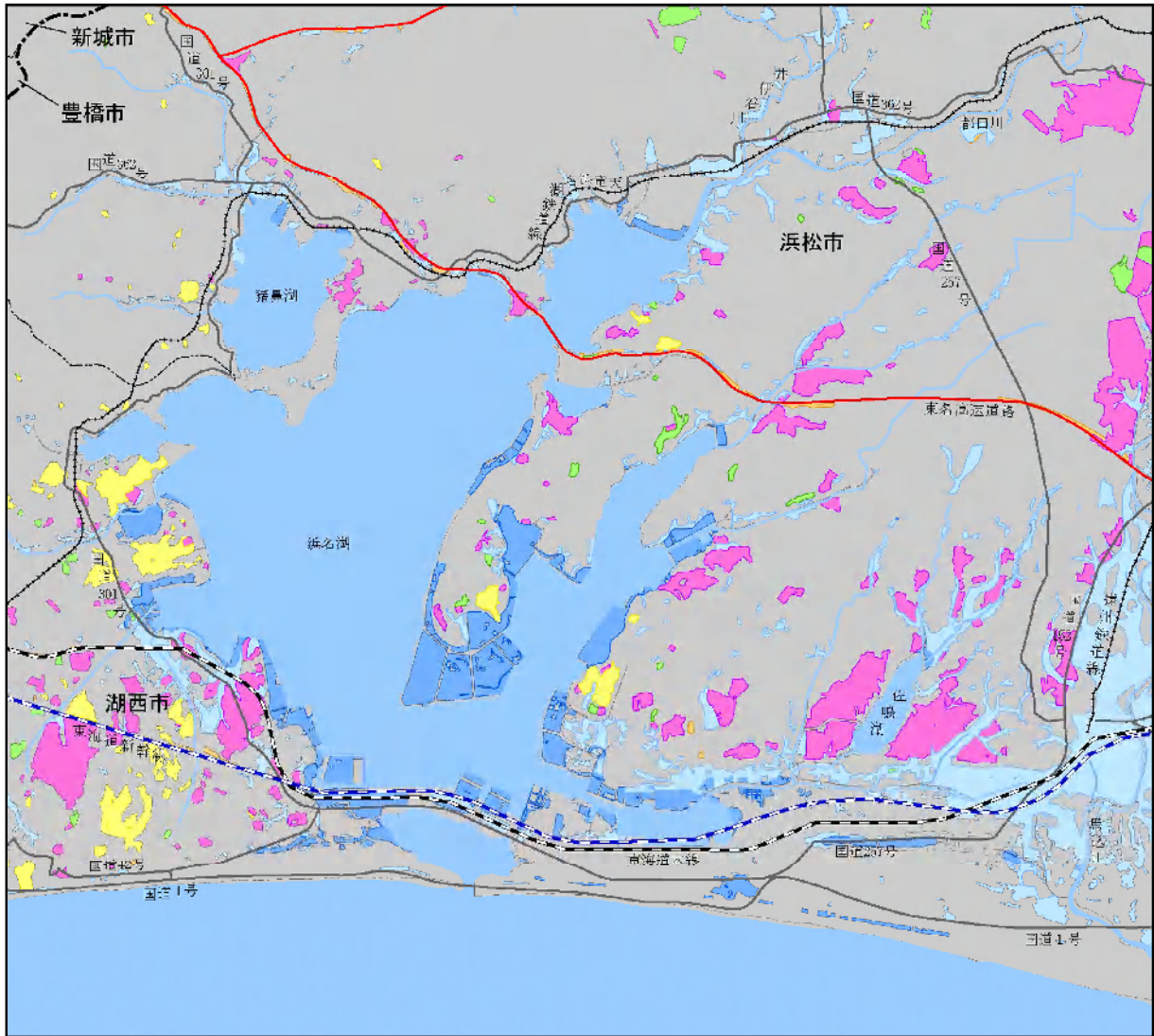


図 3-5 浜松地域の人工地形分類図

表 3-3 静岡県における年度別の主要宅地開発状況

市	事業開始年						
	～1954	1955～1964	1965～1974	1975～1984	1985～1994	1995～2004	2005～
裾野市				千福ニュータウン地区(83ha)			
三島市			加茂地区地区(41.2ha)		佐野見晴台地区(45ha) 三島ビューティータウン地区(45ha)		
富士市			依田原新田地区(89.6ha) 富士見台地区(75ha)	富士中部地区(90ha)			
静岡市			池田地区(41.9ha)				
焼津市			石津地区(53ha)	小川第二地区(61.6ha)	焼津市南部地区(166.4ha)		
藤枝市				藤枝地区(ふじえた駿河台118ha)	清里住宅団地地区(30.9ha)		
菊川市					南部第二地区(40.8ha)		
掛川市					長谷地区(63.9ha) 東名掛川IC周辺地区(61.8ha)		
袋井市				堀越地区(44.7ha)			
磐田市				安久路第二地区(47.3ha)			
浜松市					都田地区(243.1ha) 佐鳴湖西岸地区(159.7ha) 半田地区(62.5ha)	浜北新都市地区 (きらりタウン浜北161.7ha) 和地地区(96.3ha) 西都地区(75.3ha) 浜松市船明地区(44ha)	

資料：「全国のニュータウンリスト」(平成 22 年度作成),国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ(<http://tochi.mlit.go.jp/>)

3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地震における低地部の建物被害（軟弱地盤地での建物被害、液状化被害など）、及び人工平坦地における地盤災害（地震動による造成地の地盤変形等）、津波による低地部の浸水・流失被害、大雨の際の浸水被害、土砂災害（旧河道での浸水被害、麓屑面及び崖錐でのがけ崩れ、土石流堆積地での土石流・土砂流出など）をあげることができる。特に山地・丘陵地の人工平坦地は、盛土箇所での地盤災害と背後の山地斜面からの土砂災害の両方で注意が必要となる。

(1) 地震災害

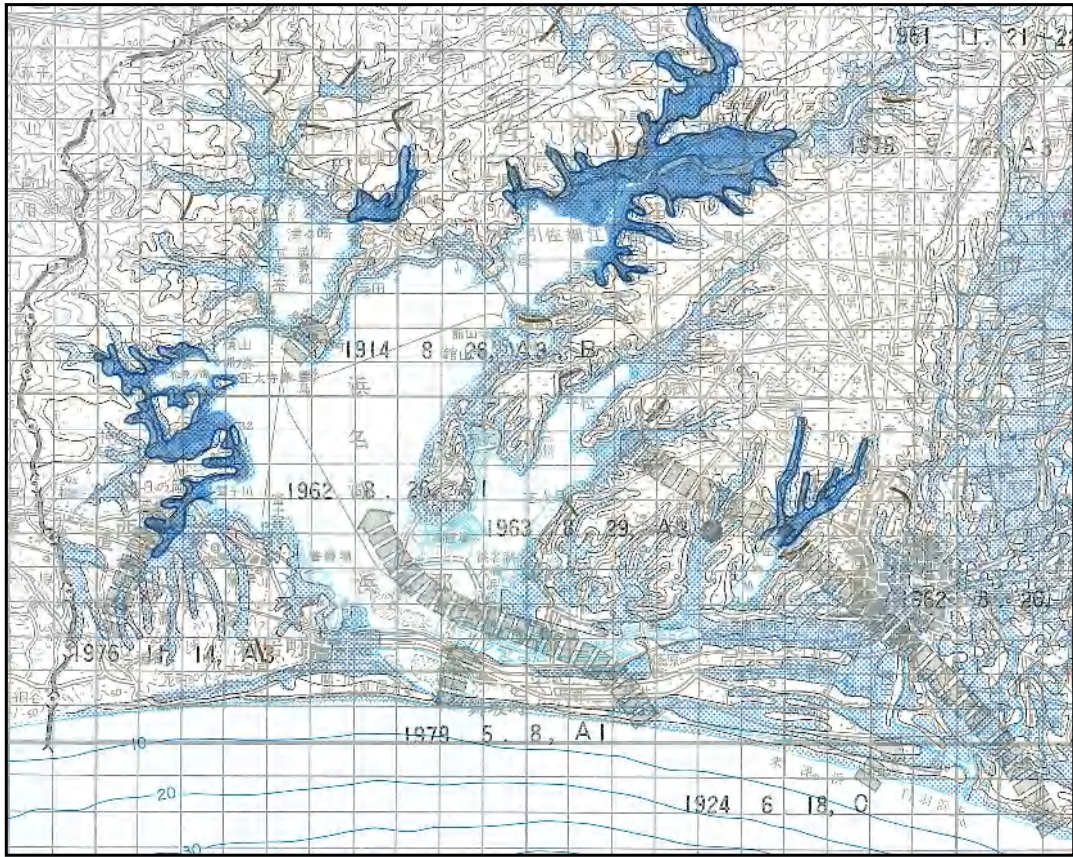
本図幅を含む東海地方は、たびたび海溝型の大規模な地震災害に見舞われ、江戸期の慶長地震(1605年：M7.9)、宝永地震(1707年：M8.4)、安政東海地震(1854年：M8.4)は遠州灘周辺を震源とする地震であり、県内に大きな被害を生じた。本図幅でも宝永地震では浜松で潰家71戸、半潰家29戸、大破損家52戸があった。半田村でも潰家51戸。そのほかの家は大破した。地盤の沈下、地割れがあり、また砂・小石が水とともに噴き出した所もある。安政東海地震では浜松で城の門1つ角矢倉1つが落ちた。寺院や瓦の家は残らず倒れた。入野村で32戸皆潰れ、その他の過半は大破し、死者が1人あった。伊場・西鴨江・志都呂では潰家はなかったが、山崎村では家がつぶれ、下じきになるものがあつたとされる（静岡県地震防災センターHP）。

その後も昭和19年の東南海地震などの際には広域にわたって大きな被害が発生し、浜松市中央で全壊198戸、半壊406戸、曳島地区で半壊10戸、白脇地区で全壊23戸、半壊33戸、富塚地区で全壊7戸、半壊18戸などの被害が出た。また、海溝型の地震と比べると被災範囲が限られる直下型と思われる地震も発生しており、1686(貞享3)年には浜名湖付近を震源とする地震があり、新居の関所、番所、町屋などに被害があり、死者もあつたとされる(宇佐美,2003)。

(2) 降雨災害

本図幅付近の大まかな地形は南側が遠州灘、北側が比較的標高がある山地となっており、南側から湿った空気が流れ込んだ際に上昇気流が発生し、雨が降りやすい地形となっている。1974(昭和49)年7月の七夕豪雨(台風8号による豪雨)の際には、赤石山脈に連なる山地の南縁部にあたる、天竜ー静岡ー富士を結ぶ地域を中心に記録的な大雨となり、都田川や都筑大谷川、笹子川などの浜名湖流入河川や佐鳴湖の後背河川において浸水被害が発生している(図3-6)。その後も1982(昭和57)年などに浸水被害を生じている。

山地・丘陵地では斜面の下部に斜面から崩れ落ちた土砂が堆積した麓屑面・崖錐が分布し、異常降雨時などにはがけ崩れの危険がある地域となっている。また、溪流や水が集まる谷地形の下部には土石流によって運ばれた土砂が堆積して、小規模な扇状地(沖積錐)や勾配のある谷底低地が形成されており(これらをあわせて「土石流堆積地」とした)、異常降雨時には土石流が発生したり、溪流から土砂が流出する危険がある地域となっている。



洪水による浸水記録
Flood record

- 昭和49年7月7日 七夕台風による浸水域
July 7, 1974 Flood damage area by Tanabata typhoon
- 昭和33年9月26日 狩野川台風による浸水域
September 26, 1958 Flood damage area by Kanogawa typhoon

資料：国土庁・静岡県(1984)

図 3-6 狩野川台風及び七夕豪雨による浸水域

4 土地利用の変遷の概要

4.1 過去の土地利用状況の概要

(1) 明治 23 (1890) 年頃 (現在から概ね 120 年前) の土地利用

本図幅では、明治 23 (1890) 年に全域にわたって 5 万分の 1 地形図が作成されており、また、2 万 5 千分の 1 地形図に関しては大正 6 年 (1917 年) に測図されている。このため、本図幅においては、明治期の土地利用分類図 (第 1 期) として、5 万分の 1 地形図を基礎資料にして地形図の読図による土地利用分類を行い、5 万分の 1 地形図で読図が難しい範囲については、2 万 5 千分の 1 地形図を補足的に用いて土地利用分類を行った。作成した明治 23 (1890) 年頃の土地利用分類図を図 4-1 に示す。



※行政界・鉄道・道路などは現在の情報

図 4-1 本図幅における約 120 年前 (明治 23 (1896) 年頃) の土地利用

①山地、丘陵地における土地利用

本図幅の北～北西側に広がる引佐山地の土地利用をみると、広く森林が広がるが、山地のところどころにまとまった面積の荒地がみられ、一部の山林が荒廃していたことが伺われる(図 4-2)。山麓の緩斜面や谷あいには集落が立地して、山地を開析する谷は水田として利用されている。



図 4-2 明治 23 (1896) 年頃の三ヶ日付近の地形図

②台地における土地利用

本図幅には浜名湖の東側に三方原台地、浜名湖の西側には湖西台地が分布し、明治期には三方原の台地の大半は森林や荒地となっており、浜松から気賀に通じる街道沿いには開拓による茶畑がみられる(図 4-3)。湖西台地は台地上には旧東海道の宿場であった白須賀の集落がみられ、その周辺は畑となっている。どちらの台地も台地周辺の斜面は森林や荒地となっている。

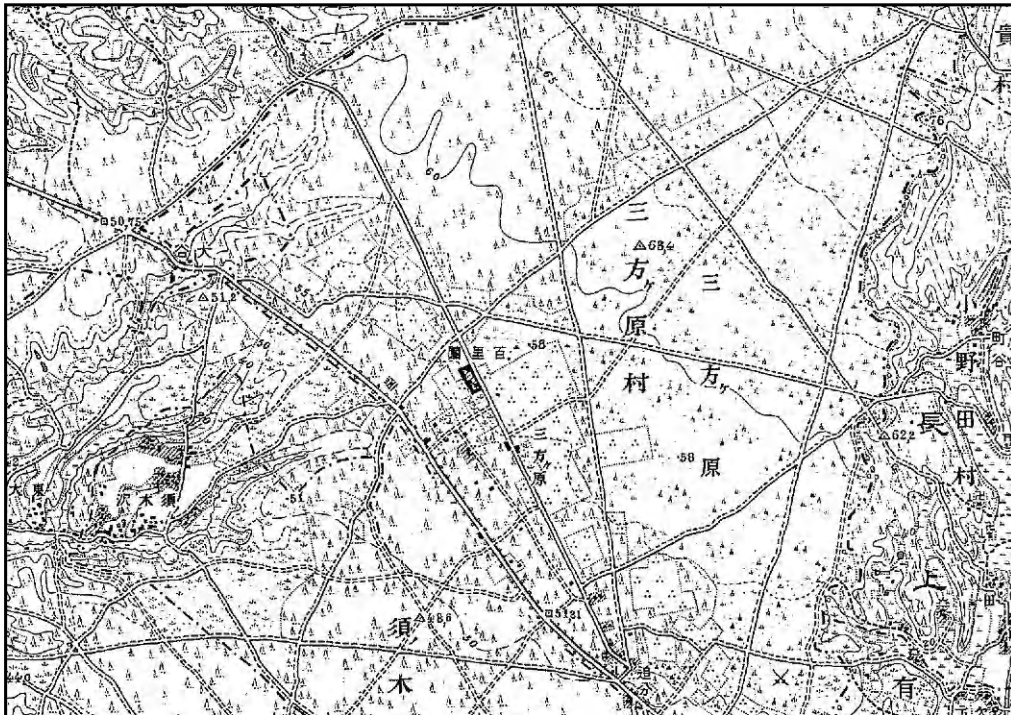


図 4-3 明治 23 (1896) 年頃の三方原の地形図

③低地における土地利用

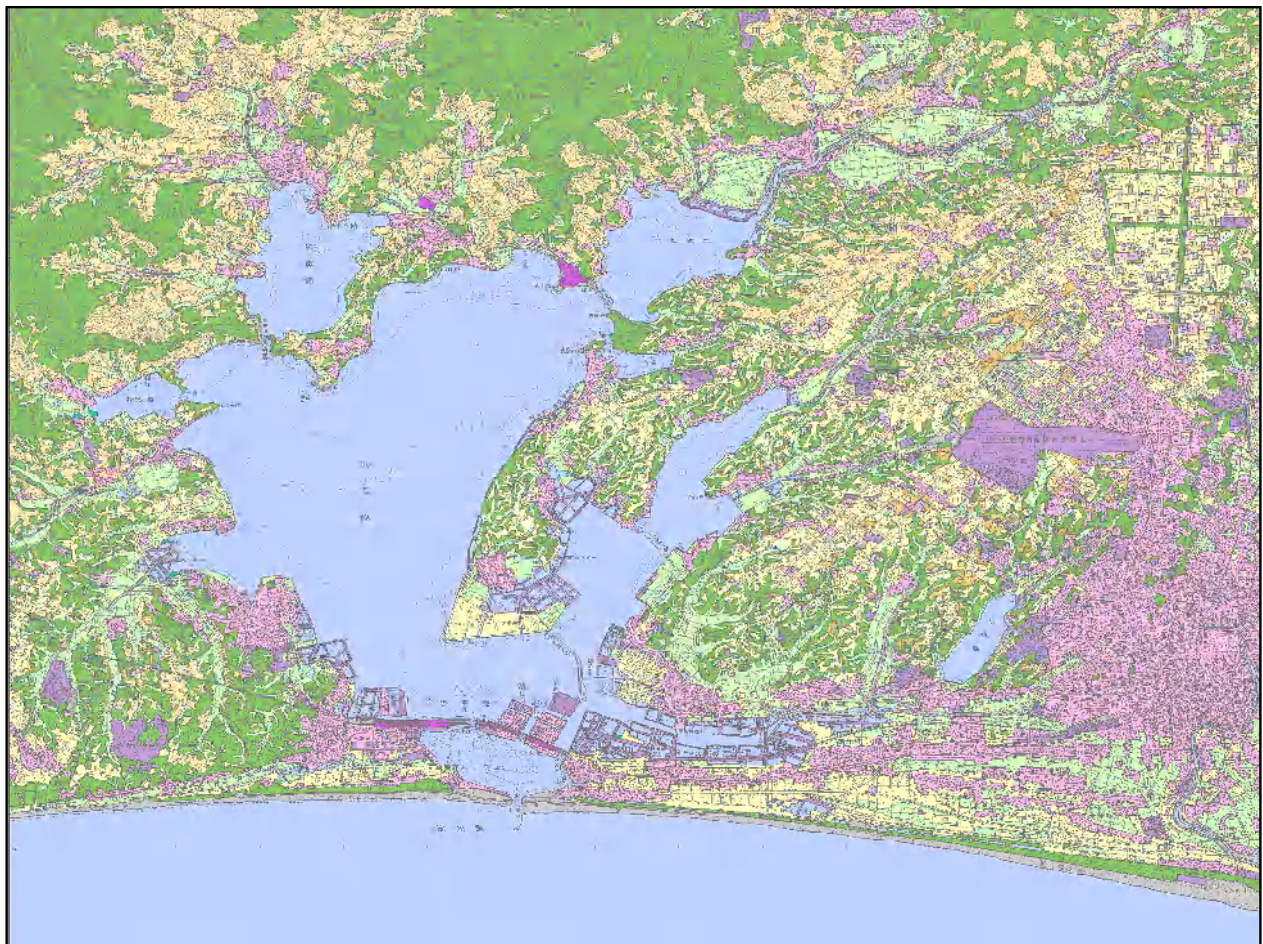
本図幅には天竜川沿いの浜松平野や浜名湖周辺の低地、海岸付近の遠州海岸砂丘地があり、明治期には水田として広く利用されているが、海岸付近の遠州海岸砂丘地や天竜川沿いの浜松平野には畑も広くみられる。集落は低地と周辺の山地や台地の斜面の間に立地していて、旧東海道の宿場であった浜松、舞坂、新居には市街地や比較的大きな集落がみられ(図 4-4)、東海道の脇街道であった姫街道沿いの気賀、三ヶ日にも比較的大きな集落がみられる。浜名湖湖岸も集落が立地しており、館山寺や村節町、宇布見、鷺津、新所、入出等の集落がみられる。海岸付近の遠州海岸砂丘地では砂州の高まりに沿って集落が発達し、集落の周辺は畑が広がり、堤間低地は池沼や水田として利用され、海岸沿いには場所によっては幅が1 km 近くなる海浜の砂礫地がみられる(図 4-4)。東海道線が開通しているが、浜松、舞坂、鷺津の各駅の周辺には市街地の形成はみられない。



図 4-4 明治 23(1896)年頃の浜松周辺の地形図

(2) 昭和 45 (1970) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、空中写真測量により改測が行われた 2 万 5 千分の 1 地形図を編集して作成された 5 万分の 1 地形図を基礎資料として、地形図の読図による土地利用分類を行った。本図幅では昭和 45 (1970) 年に 2 万 5 千分の 1 地形図の改測が行われ、それに基づき 5 万分の 1 地形図が作成されている。5 万分の 1 地形図で読図が難しい範囲については、2 万 5 千分の 1 地形図を補足的に用いて土地利用分類を行った。作成した昭和 45 (1970) 年頃の土地利用分類図を図 4-5 に示す。

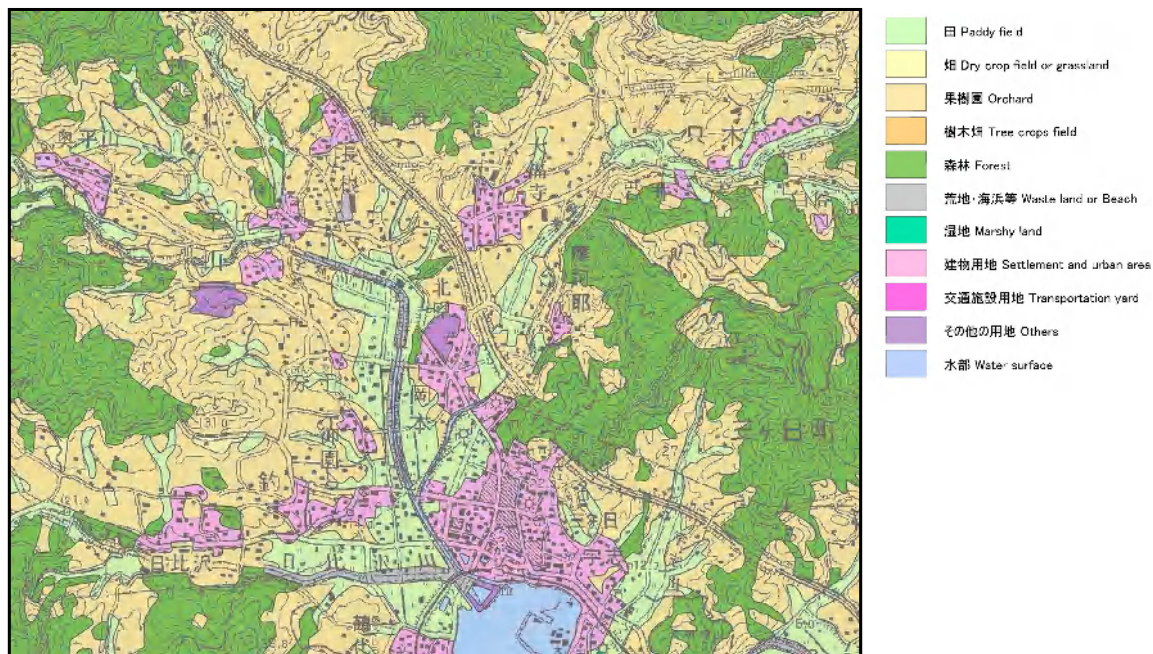


※行政界・鉄道・道路などは現在の情報

図 4-5 本図幅における約 40 年前 (昭和 45 (1970) 年頃) の土地利用

①山地、丘陵地における土地利用

山地の土地利用をみると森林が広範囲に広がり、明治期に荒地がみられた範囲にも森林が広くみられる。山地斜面には果樹園が増加していて、三ヶ日周辺では明治期以降ミカン栽培が継続し、大正期以降は生産技術が確立・普及して発展したとされる(三ヶ日町農業協同組合ホームページ, 図 4-6)。また、山地の一部には石灰石の採掘地がみられる。



注：基図は最新の地形図

図 4-6 昭和 45 (1970) 年頃の三ヶ日周辺の土地利用

②台地における土地利用

明治期には森林や荒地が広がっていた三方原の台地には、第二次大戦後の大規模開拓によって畑や果樹園、茶畑が広がり、南東側は拡大する浜松市街地の外縁部に位置し、工業用地、宅地等として利用されおり、本田技研や日本楽器(現在のヤマハ)の工場や小中学校、高校、大学、病院等がみられる。また、台地の中央には第二次世界大戦前の陸軍航空基地を発祥とする航空自衛隊浜松基地があり、その北側には東名高速道路が通過している。

③低地における土地利用

浜松市中心部のほか、東海道本線、国道 1 号沿線を中心に市街地化が進みつつあり、高塚や舞坂、新居、鷺津周辺に市街地や鈴木自動車や河合楽器などの大規模な工場がみられ、北部の地域でも気賀や三ヶ日周辺に市街地がみられる。低地の多くは市街地のほかに、水田や畑として利用されているが、浜名湖の周辺には養鰻池が数多く整備され、海岸付近の堤間低地にも養鰻池がみられる。浜名湖には弁天島周辺や村櫛町付近には埋立地が整備され、弁天島周辺は宅地等、村櫛町付近は水田や畑、養鰻池として利用されている。

4.2 土地利用変遷の概要

(1) 土地利用面積の推移

現在から概ね130年前及び40年前の2時期の土地利用分類図と、国土数値情報として提供されている2006年の土地利用細分メッシュデータに基づき、本図幅における田、畑(畑・その他農用地)、森林等(森林・荒地・水面)、宅地等(建物・その他の用地)の4つの主要な土地利用区分毎の面積集計を比較することによって土地利用面積の推移を確認した。

農地をみると1890(明治23)年ごろには、田は浜松平野や浜名湖周辺低地などに広く分布し、畑は浜松低地の自然堤防や遠州灘沿岸の砂州・砂堆などに分布し、三方原には茶畑を中心とした樹木畑が局所的にまとまって分布している。1970(昭和45)年には浜松周辺の市街化が進み、田は減少傾向にあるが、畑は三方原の開拓が進み面積を増やしている。茶畑を中心とした樹木畑やみかん畑を中心とした果樹園は1890(明治23)年ごろには樹木畑が三方原の台地上の一部など限られた範囲に分布し、果樹園はほぼみられない状態であったが、1970(昭和45)年には三方原や浜名湖の北部沿岸の山地・丘陵地で農地の開発が進み、茶畑を中心とした樹木畑は三方原の中～南部に散見され、果樹園は三方原北部から気賀、三ヶ日にかけての地域に広くみられる。2006(平成18)年には田は低地における市街化の進展により減少し、畑は浜松市街地の三方原台地上への拡大により減少している。

森林等は1890(明治23)年ごろには引佐山地の山地斜面のほか、三方原台地や湖西台地にも広く分布している。また、この当時は山地や丘陵地には荒地も多くみられ、三方原にも広大な荒地がみられる。これらの森林等は第二次大戦後の開拓などにより、1970(昭和45)年には果樹園や茶畑、普通畑などとなり大きく減少し、2006年には山地・丘陵地への工場団地などの開発により若干面積が減少している。

一方、宅地等は基本的に増加傾向にあり、特に浜松周辺では1890(明治23)年ごろから1970(昭和45)年にかけて増加しており、1970(昭和45)年以降は低地や台地の広範囲に宅地化が進んでいる。

(2) 地形分類別土地利用面積の推移

明治期、昭和40年代、現在の3時期の土地利用面積を自然地形分類毎に整理して地形分類別の土地利用面積の推移を整理した。

全体的に田、森林等はどの地形要素においても減少傾向にあるが、田は氾濫低地等において1970(昭和45)年以降の減少が目立ち、森林等は山地や丘陵地、台地において1890(明治23)年から1970(昭和45)年にかけて第2次世界大戦後の開拓などにより大きく減少したが、2006(平成18)年には比較的变化が少なくなっている。

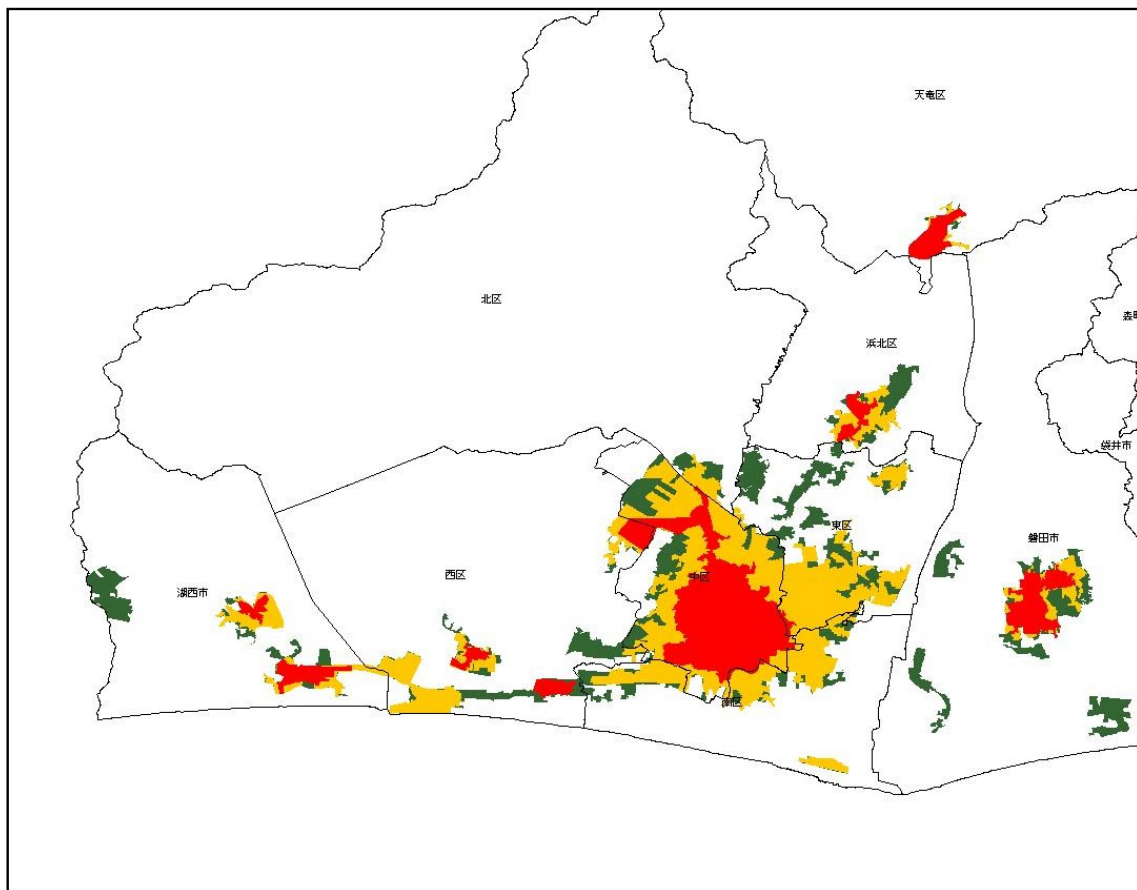
果樹園を含む畑等は1970(昭和45)年には、戦後の開拓により、山地や丘陵地の斜面、台地上において増加しているが、2006(平成18)年には台地上の市街化などにより面積を減じている。

一方、増加傾向にある宅地等は、高度成長期に低地への市街地拡大がみられ、その後、低地のほか、台地においても増加がみられる。

(3) 人口集中地区の変遷

国勢調査では、1960（昭和 35）年以降 5 年ごとに「人口集中地区」（DID 区域）が設定されている。本図幅を含む静岡県中部の 1960（昭和 35）年、1980（昭和 55）年、2005（平成 17）年の 3 時期の人口集中地区を図 4-7 に示す。

1960（昭和 35）年では人口集中地区は浜松市街地や高塚、新居、鷲津などにみられ、1980（昭和 55）年には既往の市街地の周辺部を中心に拡大し、舞阪などにもみられるようになる。2005（平成 17）年には既存の人口集中地区の周囲での拡大が進んでいる。



資料：国土数値情報（人口集中地区）

図 4-7 本図幅周辺における人口集中地区の推移（1960 年・1980 年・2005 年）

5 調査地域の災害履歴概要

5.1 災害履歴概説

(1) 地震

静岡県に被害を及ぼす地震には、主に相模、駿河、南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震と陸域の浅い場所で発生する地震がある（地震調査研究推進本部 2013）。

本図幅と深い関わりのある巨大地震としては、1498年明応の地震（M8.2～8.4）、1707年宝永地震（M8.4）、1854年安政東海地震（M8.4）、1944年東南海地震（M7.9）などがあげられる。明応の地震は南海トラフ沿いの巨大地震とみられ、津波による全体の被害は、倒壊流失家屋約8,500、溺死者数約51,000人と推定されている（飯田, 1979）。わが国最大級の地震のひとつと称される宝永地震では、全体で少なくとも死者20,000人、家屋の潰れ60,000、家屋の流失20,000、安政東海地震では、全体で死者2,000～3,000人、家屋の潰れ・焼失が約30,000と言われている（理科年表, 2012）。東南海地震については、次の詳説にて述べる。いずれも地震の揺れ・津波・火災・山崩れ等によって甚大な被害が生じた。1946年南海地震（M8.0）では津波による家屋浸水等があった。

1944年の東南海地震では駿河湾は震源域とならず、1854年の安政東海地震以来その付近のひずみは蓄積されたままであると考えられている。よって、駿河トラフ周辺を震源域としたM8程度の「東海地震」の発生が懸念されており、静岡県では全市町村が「東海地震」の地震防災対策強化地域に指定されている。東南海・南海地震についてもおよそ100～150年の周期で発生しており（図5-1）、本図幅にかかる全市町が、著しい地震災害が生じるおそれがあるとして「東南海・南海地震防災対策推進地域」に指定されている。

静岡市から浜名湖付近にいたる広い範囲には、深さ20～30kmの定常的な地震活動が点在している。静岡市付近では、1935年や1965年の静岡地震（それぞれM6.4、M6.1）など犠牲者が生じるような地震が発生しており、いずれも震源の深さ10～20kmの直下型地震で中部地域に被害が集中した。なお、本図幅近辺にはないが、県内の主要な活断層として神縄・国府津－松田断層帯、北伊豆断層帯、富士川河口断層帯などがあげられる。

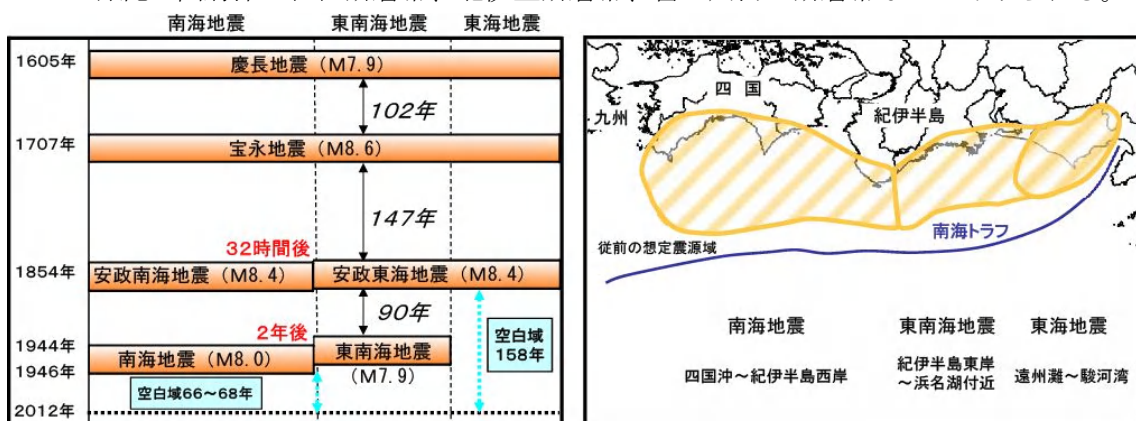


図5-1 過去に発生したプレート境界型地震

（中央防災会議 2010）

(2) 津波災害

本図幅の範囲で主な津波災害としては、明応7（1498）年明応地震、慶長9（1605）年の慶長地震、宝永4（1707）年宝永地震、嘉永7（1854）年の安政東海地震、昭和19（1944）

年東南海地震による津波がある。

明応7(1498)年明応地震による津波の高さは、白須賀で5~6m、旧新居町、旧舞阪町で6~8m、旧三ヶ日町で3~4mであった。慶長9(1605)年の慶長地震による津波の高さは、旧新居町で5~8m、旧舞阪町で5~6mであった。宝永4(1707)年宝永地震による津波の高さは、白須賀で5~6m、旧新居町で3m程度、旧舞阪町で3~5m、旧細江町で5~6mと推定されている。嘉永7(1854)年の安政東海地震による津波の高さは、白須賀で6m程度、旧新居町大倉戸で6m、舞阪で5.6mであった(静岡県地震防災センター)。昭和19(1944)年東南海地震による津波の高さは、白須賀と舞阪で1mとされている(飯田汲事, 1977)。

安政東海地震時の津波浸水域を、静岡県地震防災センターが当時の文献を基に津波の到達点を算出し、浸水域を再現した報告書として取りまとめている。

(3) 風水害

本図幅の範囲で主な風水害は、昭和49(1974)年7月の台風8号(七夕台風)による洪水がある。集中豪雨により各地に大きな被害が発生した。静岡県全域の被害は、死者・行方不明者36人、全壊・流失家屋104戸、半壊家屋117戸、床上浸水22,151棟(静岡県地震防災センター)。

(4) 地盤沈下

本図幅内には、静岡県による西遠の観測地域が含まれるが、現状では目立った地盤沈下は見られない。

5.2 災害履歴詳説

(1) 地震

①作図資料

本図幅の範囲で、記録が正確な明治以降に、多大な被害をもたらした地震としては、昭和 19（1944）年の東南海地震がある。この地震について、被害の記録として建物被害率を図化した。宝永 4（1707）年の宝永地震、嘉永 7（1854）年の安政東海地震については、浜松地区にも大きな被害をもたらしたが、住家被害の資料が少ないため住家被害率の図化は出来なかった。

液状化発生地点及び地震によるひび割れ（地割れ）地点は、地震別に発生地点を図化した。

表 5-1 地震に関する災害履歴図作成の概要

建物被害率	出典	（東南海地震） 大庭正八. 1944 年 12 月 7 日東南海地震に見られた遠江地方の家屋被害分布と地盤との関係. 東京大学地震研究所彙報. 第 35 冊第 1 号. 1957, p. 240-292
	図化方法	1944 年東南海地震による部落別被害家屋統計に記載されている、市町村（当時）別の戸数、住家被害数（全潰、半潰別）より被害率を集計し地図上に示した。旧市町村名は、旧版地図より特定した。
液状化発生地点	出典	若松加寿江. 日本の液状化履歴マップ 745-2008. 東京大学出版会, 2011, 製品シリアル番号:JLM0973 より下記地震を転載。
	図化方法	文献に整理された液状化の発生地点を、地震別、精度別に図化した。
地割れ地点	出典	静岡県地震対策課. 静岡県地震対策基礎調査報告書. 1978, p. 42-44
	図化方法	文献に記載されている地点を地図上に示した。

②東南海地震

i. 地震の震源・規模

昭和 19(1944)年 12 月 7 日に発生した東南海地震の規模は地震の規模はマグニチュード 7.9 で、震源域は三重県から愛知県沖とされる。南海トラフに沿った地域で、プレートの沈み込みで発生した低角逆断層地震であり、断層は紀伊半島の先端から御前崎まで伸びている。

ii. 被害の概要

被害の概要を表 5-2 に示す。

被害は、静岡、愛知、三重各県に多い。住家被害率が最も大きかったのは静岡県であり、特に太田川流域の被害は著しかった。

表 5-2 東南海地震による府県別被害

府県名	死者、行方不明者 (人)	負傷者 (人)	住家全壊 (戸)	住家半壊 (戸)	非住家全壊 (棟)	非住家半壊 (棟)
愛知県	438	1, 148	6, 411	19, 408	10, 121	15, 890
静岡県	295	843	6, 970	9, 522	4, 862	5, 553
三重県	406	607	3, 776	4, 537	1, 417	2, 228
岐阜県	16	38	406	541	459	388
奈良県	3	17	89	177	244	224
滋賀県			7	76	28	38
和歌山県	51	74	121	604	46	63
大阪府	14	135	199	1, 629	124	63
山梨県			13	11	14	3
石川県			3	11	6	8
福井県			1	2	2	3
兵庫県		2	3		23	9
長野県			12	47	1	2
計	1, 223	2, 864	17, 611	36, 565	17, 347	24, 473

(飯田汲事, 1977 による)

iii. 建物被害率

大庭正八, 1944 年 12 月 7 日東南海地震に見られた遠江地方の家屋被害分布と地盤との関係に記載されている、市町村(当時)別の戸数、住家被害数(全潰数、半潰数)(表 5-3)より全潰率(全潰数/全戸数)、半潰率(半潰数/全戸数)を計算して地図上に示した(図 5-3)。

災害履歴図には、災害発生当時の市町村名を表示している。図中で、市町村名のみを記載した市町村は、資料中に被害報告の記載はないものの、実際には被害が生じていた可能性がある。なお、災害履歴図に表示した市区町村界は、災害発生時期に近い年代の状況を既存資料により参考表示したものであり、災害発生当時の市区町村とは一致しない場合がある。

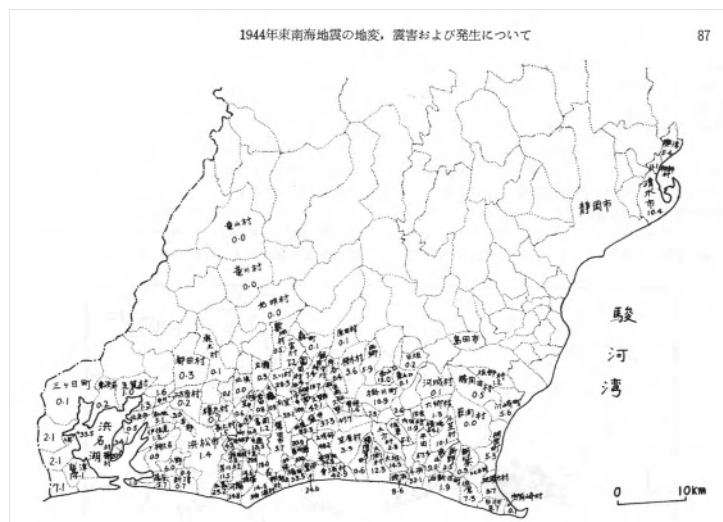


図 5-2 静岡県における住家被害率分布図 (飯田汲事, 1976)

表 3-3 東南海地震による家屋被害 (大庭正八, 1956)

番号	郡市町村	部落	地盤	戸数	住家被害		非住家被害		住家被害率		備考
					全潰	半潰	全潰	半潰	全潰率 b/a×100	全半潰率 (b+c)/a×100	
99-1	南庄内村	和庄内	D,Ch	156	2	3		4	1.3	3.2	
				98		4		7	4.1		
				101		5		3	5.0		
				357	2	12		14	0.6	3.9	
100-1	北庄内村	明町	D,Ch	139	40	21	3	2	28.6	37.4	(村郷村) 被害は明治以後の湖面埋立の部分で、 特に北側に多い。西側で死男女各1人。 地震の時東部埋立地で赤褐色の泥水を 吹く。
				247	31	22	7	4	12.6	21.5	
				176	11	15	2	5	6.3	14.8	
				562	82	58	12	11	14.6	24.5	
101-1	伊佐見村	左	D,Ch	385	1			1	0.3	0.3	非住家全潰 1 棟は青年学校。
				213	2				0.9	0.9	
				146							
				180							
				77							
				45							
1,046	3			1	0.3	0.3					
102-1	雄踏町	雄踏	Sc	178	1	2	1	1	0.6	1.7	(雄踏町) 通称「ゆうとう町」 赤旗川埋立跡 1 棟(中村)、 神社の水屋埋立 1 棟(須家)、 山崎住家半潰 2 棟は殆ど全潰。 家財は砂丘地周辺の湖面埋立地に多い。 養魚池の見張小屋は各所で殆ど全潰。
				55	1	2	1	1	1.8	5.5	
				249	2	3	2	2	0.8	20.1	
				162	2	3	1	1	1.2	3.1	
				453	4	5	3	3	0.8	2.0	
				531	4	5	2	2	0.9	1.7	
				278	1	2	2	2	0.4	1.1	
1,888	15	22	12	12	0.8	2.0					

286
大庭正八
[Vol. XXXV]

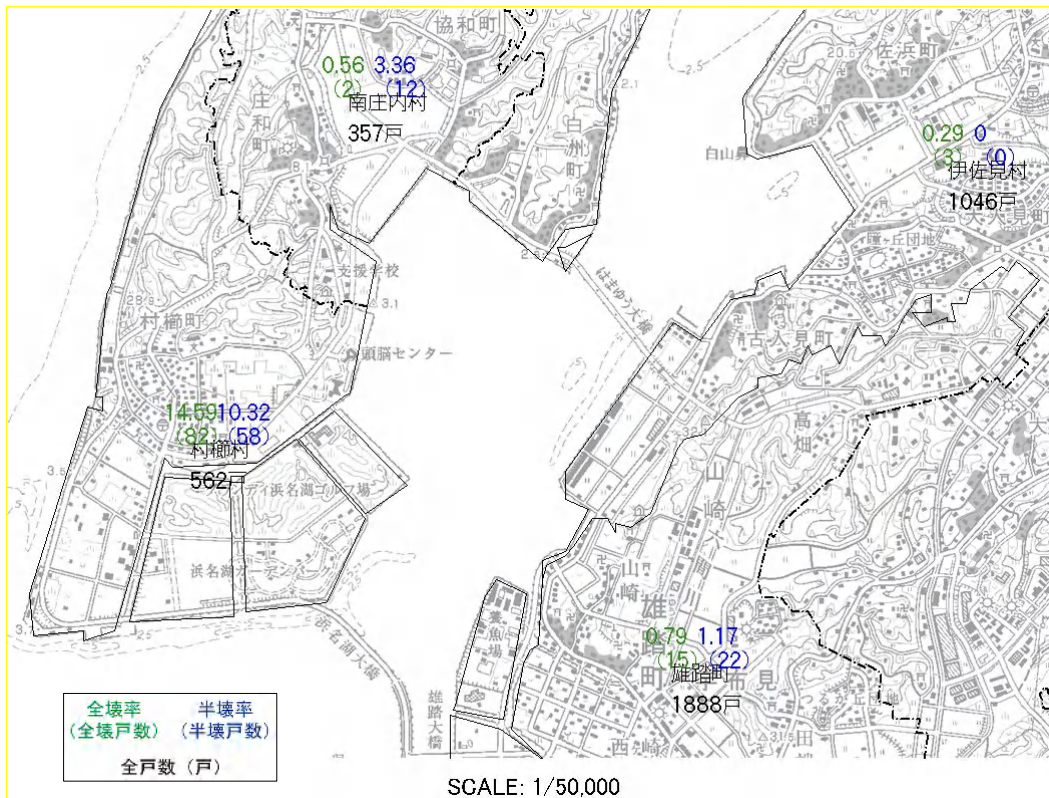


図 5-3 東南海地震による建物被害

③液状化発生地点

若松加寿江. 日本の液状化履歴マップ 745-2008 (図 5-4) より、液状化の発生地点を、地震別、精度別に図化した (図 5-5)。

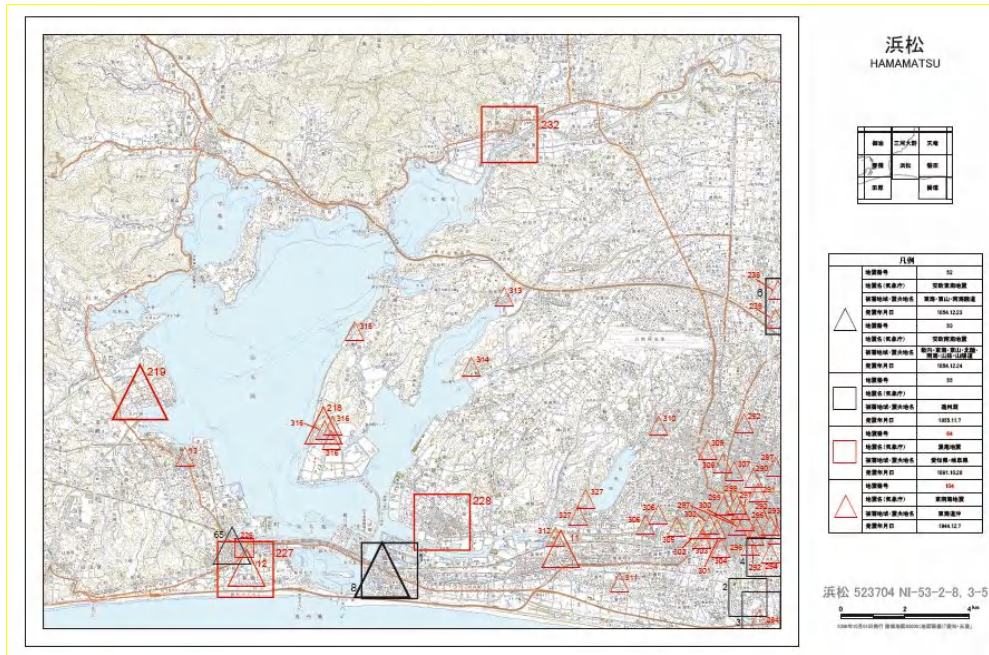


図 5-4 日本の液状化履歴マップ浜松 (若松加寿江, 2011)

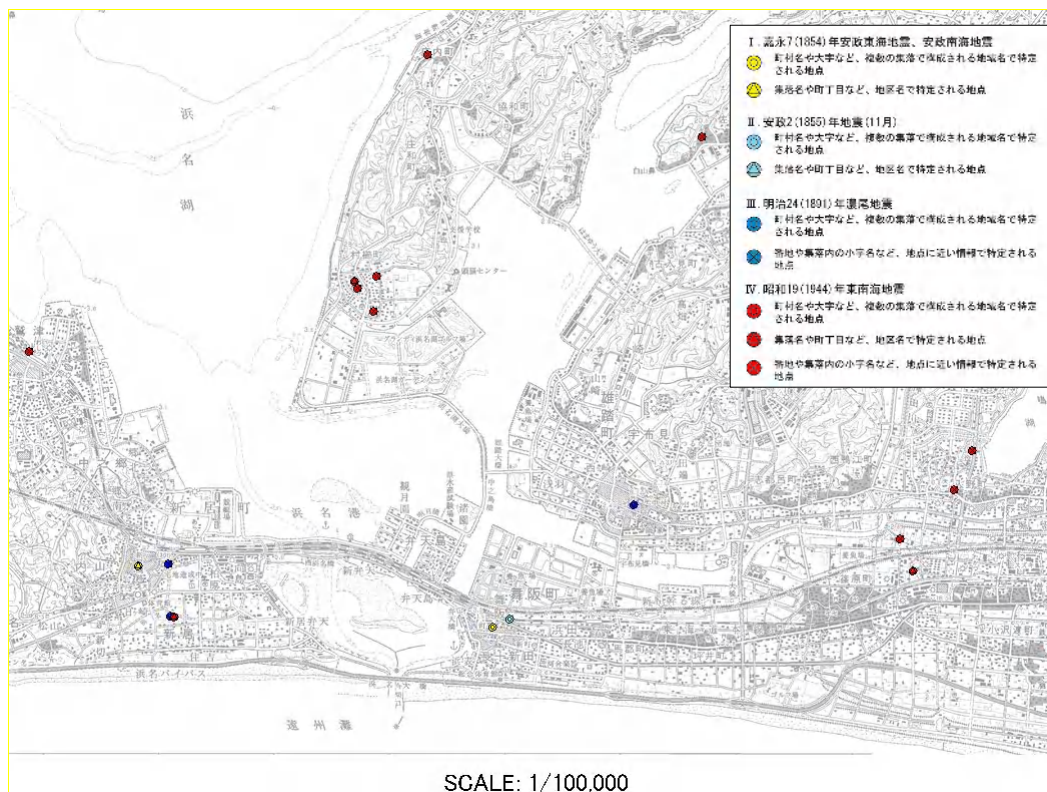


図 5-5 液状化発生地点

(2) 津波災害

① 作図資料

嘉永7(1854)年安政東海地震の津波の浸水域は、静岡県地震防災センター作成の、浸水域再現図データを使用した。

また、再現データを補足するために、当時の文献から安政東海地震と東南海地震の

津波到達地点情報を基に地図上に示した。

表 5-4 津波災害に関する災害履歴図作成の概要

津波の浸水域	出典	(安政東海地震) 静岡県地震防災センター. 第3次地震被害想定報告書. 2001 (GISデータ)
	図化方法	報告書データを地図上に移写した。
明治期の海岸線	出典	土地分類基本調査図 (土地履歴調査) 土地利用分類図 第1期
	図化方法	図面の海岸線を移写した。
沿岸での津波観測値	出典	(安政東海地震) 羽鳥徳太郎. 静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 東京大学地震研究所彙報. 1977, p. 431 (東南海地震) 飯田波事, 昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布. 愛知県防災会議, 1977, p. 540
	図化方法	文献に整理された到達地点図を地図上に移写した。

②嘉永7(1854)年安政東海地震津波浸水域

本図幅では、報告書として作成されたデータの海岸線を現在のものと一致させ、併せて、往時の海岸部地形を参照できるようにするため、土地利用分類図 第1期 (図5-7) より明治23 (1890) 年の海岸線を移写した (図5-6)。



図 5-6 安政東海地震による津波の浸水域

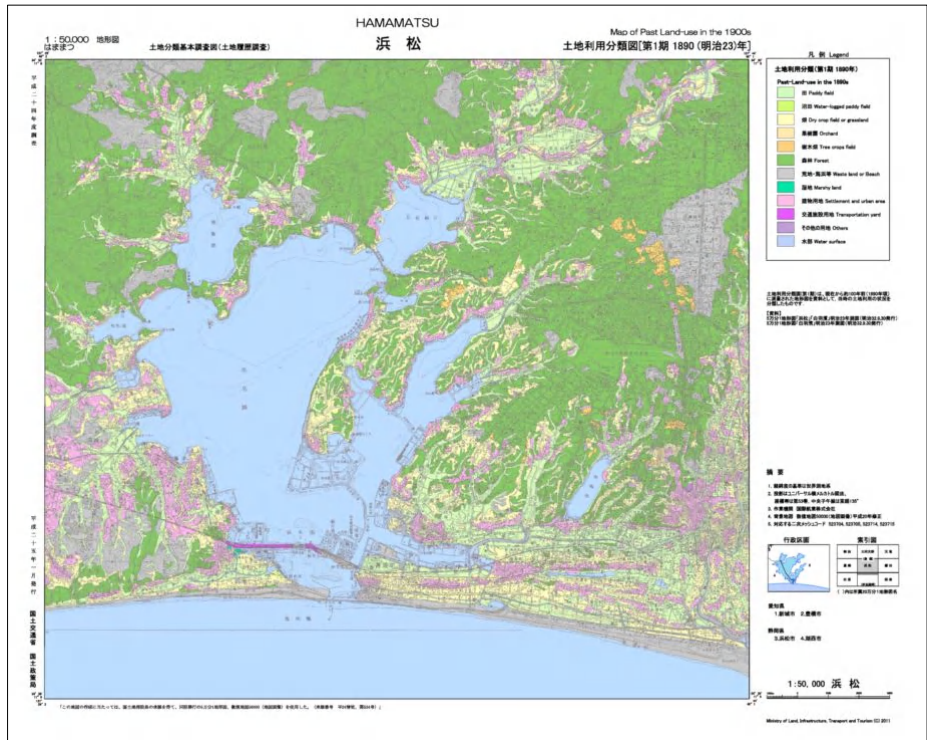


図 5-7 土地利用分類図 第 1 期

③嘉永 7(1854)年安政東海地震の津波観測値

津波浸水域データを補足するために、羽鳥徳太郎、静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査(図 5-8)より津波到達点の位置を入力した(図 5-9)。数値は T.P 上波高 (m)。数値に関しては、資料に記載のまま表記した。

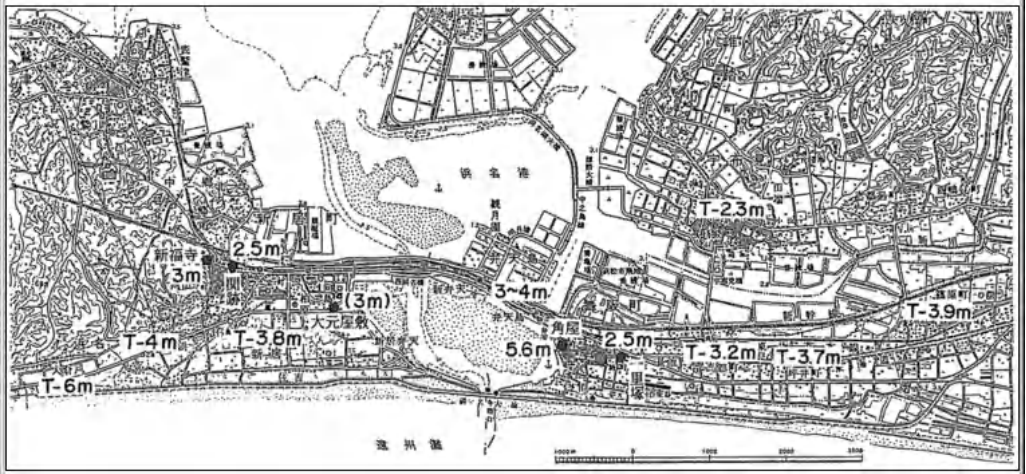


図 5-8 舞阪、新居付近の安政東海地震津波の高さ

(羽鳥徳太郎, 1977)



図 5-9 おもな地震による沿岸での津波の観測値

④昭和 19(1944)年東南海地震の津波観測値

津波浸水域データを補足するために、飯田汲事、昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布 (表 5-5) より津波到達地点を地図上に移写した。数値は T.P 上波高 (m)。数値に関しては、資料に記載のまま表記した。

表 5-5 東南海地震の津波の波高
(飯田汲次, 1977)

※印 検潮儀による。()は推定値

地名	津波の高さ(m)	定時(分)	地名	津波の高さ(m)	定時(分)
関東			木曾町	(0.5)	
市良	1.8※		桑名	0.5	120
東京	0.8※		四日市	0.5	
埼玉	0.4※		津	1.0	40
静岡県			松阪	1.2※	30
伊東	0.5※	35	伊勢大港	2	20
下田	2.5、4.5	30(引波)	鳥羽	1.5、0.58※	20
子浦	(1.5)	10(引波)	磯橋(浦村)	2	
藤良	(1.5)	10(引波)	的矢	3	
松崎	1.5		甲賀	8	
土肥	1		波切	8.5	
内浦	1.2※	14(引波)	船越	8.5	
野野川口	1.5~2.0	10(引波)	片田	8	
沼津	1		布島田	2.2	
田子ノ浦	(1)		和良(外浦)	5	
富士川口	1		越賀	4	
清水	2	10	明産	2.5	
惣津	(1.5)		和良(内浦)	3	
相良	2	(引波)	船越(内浦)	3	
御前崎	2~2.5	5、15(引波)	橋方	2	
舞田	1.5~2		浜島	3	
舞坂	1	(5)	美濃西	2.9	
白須賀	1		南雲	3.5	
愛知県			宿田首	(2.5)	
伊良湖	(1.5)	(15)	五ヶ所	8	
瀬江	0.5※	30(引波)	辺岡浦	3.5	
形原	0.5	40~50(引波)	豊浦(輪倉)	4	
吉浦	0.5※	60	柳瀬	5.5	5~6、20
衣ヶ浦	(0.7)		神明(吉津)	6.7	15
崎崎	0.9※	30	古和(島津)	6	15、20
内海	0.7		錦	6	10、15、16
名古屋	(0.5)		紀伊長島	4~7	15
三重県			名倉	4.5~8	20

(3) 風水害

①作図資料

本図幅の範囲での風水害による災害は、昭和 49(1974)年台風 8 号(七夕台風)による洪水、堤防決壊及び橋梁流出などである。静岡県全域に渡って被害をもたらしたが、主に静岡県警察本部監修の文献を基に浸水域を図化した。なお、洪水による浸水域は、浸水域が図面資料として残されているものについて図化した為、浜松地区に浸水被害をもたらした災害でも、浸水域が図化されていない場合があります。また、図化した七夕台風による浸水域も、全ての浸水域が図面資料として残されている訳では無く、浸水被害を網羅したものでは無いことに留意して下さい。

表 5-6 風水害に関する災害履歴図作成の概要

台風 8 号(七夕台風)による浸水域	出典	静岡県警察本部. 昭和 49 年 7 月 7 日～8 日台風 8 号及び梅雨前線による大雨に伴う災害警備の概況. 1974 , p33 津田川河川改修促進協議会. 繰り返すまい、七夕災害記録総集. 1977
	図化方法	文献に整理された浸水範囲を、地図上に移写した。

②昭和 49 (1974) 年台風 8 号(七夕台風)による浸水域、堤防決壊及び橋梁流出

i. 気象状況

7 月 1 日 沖の鳥島付近に発生。中心気圧 965 ミリバール、最大風速 35 メートルの大型台風が発達。

7 月 6 日 日本上陸後、四国、中国に集中豪雨が襲い死傷者多数出る。

7 月 7 日 梅雨前線を刺激し集中豪雨は静岡県西部から県下を縦断した。特に静岡市内では、8 日、AM2 : 50～3 : 50 の時間雨量 84.5mm を記録した。また、7 月 7 日午前 9 時から 8 日午前 9 時までの静岡市の 24 時間連続雨量は 508mm を記録し、これは静岡地方気象台観測史上最高記録となった。六百年に一度の大雨という。

ii. 災害規模

被害の概要を表 5-7 に示す。

この雨により静岡市内を流れる安倍川、巴川では各所で決壊・氾濫が発生するとともに崖崩れ・土砂崩れが発生し大規模な災害となった。

特にこの地域は、元々浅機沼を中心とする低湿地であり、更に巴川の流路勾配が 1/750～1/50,000 ということも重なり、広い範囲で浸水被害を起こす要因となった。

表 5-7 七夕台風による被害

死者・行方不明者 (人)	36	床上浸水 (棟)	22,151
負傷者 (人)	34	床下浸水 (棟)	42,940
全壊・流出家屋数 (戸)	104	道路・橋梁決壊 (個所)	590
半壊家屋数 (戸)	117	山崩れ (個所)	741

各数値は静岡県地震防災センターによる

iii. 浸水域、堤防決壊地点

浸水域は、静岡県警察本部. 昭和 49 年 7 月 7 日～8 日台風 8 号及び梅雨前線による大雨に伴う災害警備の概況、津田川河川改修促進協議会. 繰り返すまい、七夕災害記録総集より移写した (図 5-10)。

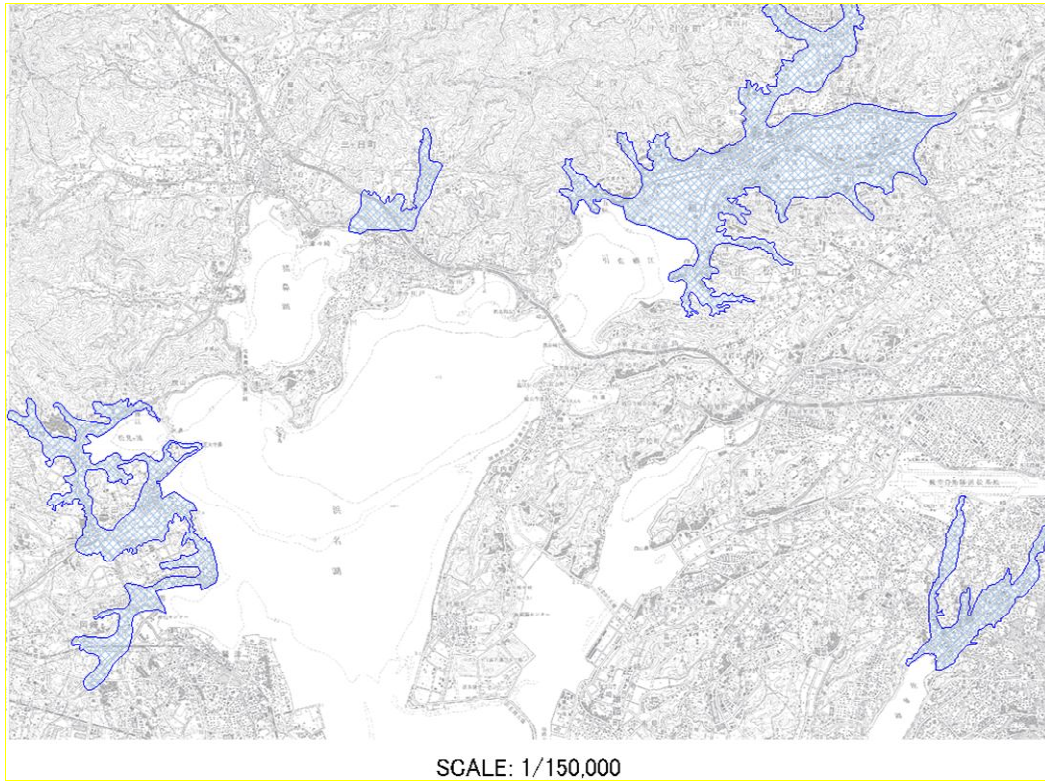


図 5-10 昭和 49 (1974) 年台風 8 号(七夕台風)による浸水域

(4) 地盤沈下

①作図資料

静岡県くらし・環境部環境局水利用課. 平成 19 年度西遠地域地盤沈下調査変動量図 (図 5-11) より、水準点・水準基標番号を地図上に示した (図 5-12)。また、静岡県くらし・環境部環境局水利用課. 静岡県地盤沈下調査結果西遠地域 (表 5-9) より、調査地点の集計期間、集計期間の累積沈下量、集計期間の最大沈下年、集計期間の最大沈下量をそれぞれ表示した。

集計期間中に移転・改埋があった水準点・水準基標は集計対象外とした。

調査期間詳細は以下のとおり。

<西遠地区>

昭和 54 年, 昭和 57 年, 昭和 59 年, 昭和 61 年, 平成 1 年, 平成 5 年, 平成 9 年, 平成 12 年, 平成 19 年

表 5-8 地盤沈下に関する災害履歴図作成の概要

地盤沈下調査地点	出典	静岡県くらし・環境部環境局水利用課. 静岡県地盤沈下調査結果西遠地域. 2007 静岡県くらし・環境部環境局水利用課. 平成 19 年度西遠地域地盤沈下調査変動量図
	図化方法	文献の地図に記載されている地点を地図上に示した。

表 5-9 静岡県地盤沈下調査結果西遠地域

地盤沈下調査結果 (西遠地域)

* 前回調査年からの変動量及び今回の年間変動量(H12～19平均)

水準点	所在地	前回調査年からの変動量(mm)																	今回年間変動量(mm)											
		54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ハ-1	浜松市中区北寺島町	0			0.9	0.7			-0.3		5.1				-0.8				2.6			-0.5								亡失
ハ-2	〃 南区米津町	0			2.2	0.4			-4.9		3.6				-2.5				4.5			-1.0								0.9
ハ-3	〃 南区新橋町	0			3.8	1.1			-1.2		2.4				欠測				6.0			0.8								-0.3
ハ-4	〃 南区篠原町	0			4.5	5.1			欠測		欠測																			-0.3
No.28	〃 南区三和町	0			0.1	-0.8			-1.6		欠測				欠測							6.8								0.5
No.30	〃 南区護国寺町	0			0.5	(-23.0)			-2.3		3.5				-3.4				-25.0			-10.1								-0.8
No.32	〃 南区安松町	0			-3.2	-5.6			-3.3		欠測				欠測				-10.5			-4.6								-3.8
No.38	〃 南区三島町	0			-0.2	-3.0			-3.6		2.9																			-
No.39	〃 南区福塚町	0			2.2	(-21.6)			-4.9		1.3				仮移設				1.3			-2.0								-1.8
No.41	〃 南区白羽町	0			1.1	-4.3			-6.9		0.9				-8.8				-0.1			-10.3								-1.7
No.48	〃 中区西伊場町	0			0.4	1.4			-3.9		-5.7				欠測				3.0			2.7								-1.5
No.50	〃 南区倉松町	0			3.3	1.0			1.1		-2.0				-0.1				2.4			-1.9								-
No.52	〃 西区入野町	0			6.1	2.9			欠測		欠測				欠測				8.1			5.6								-0.4
No.54	〃 西区篠原町	0			4.6	6.2			欠測		欠測				欠測				10.1			1.9								0.2
001-255	〃 中区天神町	0			0.0	0.4			欠測		欠測				欠測				5.5			0.8								0.5
001-257	〃 中区田町																					0.0								-0.3
001-258	〃 中区成子町																					0.0								-0.2
001-259	〃 中区森田町																					0.0								-0.3
001-260	〃 南区東若林町																					0.0								-0.2
148	〃 中区常盤町	0			2.1	2.1			欠測		欠測				欠測				4.7			1.9								-0.1
1373	〃 中区東伊場町				基準点	0.0			0.0		0.0				0.0				0.0			0.0								-
1374	〃 南区東若林町	0			-1.4	2.0			1.4		1.0				1.4				4.4			0.0								-1.1
1375	〃 南区増栄町	0			4.2	6.5			-0.3		2.3				1.3				6.6			1.5								-
1376	〃 西区篠原町	0			3.1	2.3			欠測		2.9				-1.2				5.5			1.5								0.2
001-265	〃 西区篠原町	0			3.3	5.1			欠測		欠測				欠測				11.3			1.8								0.4

※No.30、No.39は59年調査時、付近で下水道工事実施

No.38は上に層相があり、使用不能のため、平成5年に新移設
No.28は亡失のため、H12に仮設金属標を設置

地盤沈下調査結果 (西遠地域)

西遠

* 各地点ごとの新設時からの累計変動量(mm)

水準点	所在地	累加沈下量(mm)																												
		54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
ハ-1	浜松市中区北寺島町	0.0			0.9	1.6			1.3		6.4				5.6				8.2			7.7								亡失
ハ-2	〃 南区米津町	0.0			2.2	2.6			-2.3		1.3				-1.2				3.3			2.3								-4.1
ハ-3	〃 南区新橋町	0.0			3.8	4.9			3.7		6.1				8.5				14.5			15.1								13.3
ハ-4	〃 南区篠原町	0.0			4.5	9.6			24.8		33.0				59.4															4.9
ハ-5	〃 〃 580	0.0			4.2	5.8			2.4		9.7				11.2							15.3								18.1
No.28	〃 南区三和町	0.0			0.1	-0.7			-2.3		0.5				0.9							4.5								-5.5
No.30	〃 南区護国寺町	0.0			0.5	-22.5			-24.8		-21.3				-24.7				-49.7			-59.8								-86.7
No.32	〃 南区安松町	0.0			-3.2	-8.8			-12.1		-2.5				-4.5				-22.6			-27.2								移設
No.38	〃 南区三島町	0.0			-0.2	-3.2			-6.8		-3.9				0.0							1.3								-13.4
No.39	〃 南区福塚町	0.0			2.2	-19.4			-24.3		-23.0				-22.0				-22.8			-29.8								-41.7
No.40	〃 竜神寺町706	0.0			0.5	0.4			-1.9																					-
No.41	〃 南区白羽町	0.0			1.1	-3.2			-10.1		-9.2				-18.0							-18.1								-39.0
No.43	〃 西浅田2-1224	0.0			0.9	0.6			-3.1																					-
No.46	〃 中区西伊場町	0.0			2.2	5.6			4.9		7.1				6.1				9.3			9.3								亡失
No.48	〃 中区西伊場町	0.0			0.4	1.8			-2.1		-7.8				-14.0							-11.0								移設
No.49	〃 入野町8757-1	0.0			4.2	8.4			10.1																					-
No.50	〃 南区倉松町	0.0			3.3	4.3			5.4		3.4				3.3				5.7			3.8								0.7
No.52	〃 西区入野町	0.0			6.1	9.0			1.4		1.9				3.4							17.1								24.0
No.53	〃 志都島町5102-1	0.0			3.7	8.0																								-
No.54	〃 西区篠原町	0.0			4.6	10.8			1.7		2.3				4.2				20.9			22.8								26.1
001-255	〃 中区天神町	0.0			0.0	0.4			0.5		0.7				1.2				5.9			6.7								3.3
001-257	〃 中区田町																					0.0								-2.4
001-258	〃 中区成子町																					0.0								-1.2
001-259	〃 中区森田町																					0.0								-2.0
001-260	〃 南区東若林町																					0.0								-1.4
148	〃 中区常盤町	0.0			2.1	4.2			0.7		1.0				1.8				8.9			10.8								9.8
1373	〃 中区東伊場町				基準点	0.0			0.0		0.0				0.0				0.0			0.0								移設
1374	〃 南区東若林町	0.0			-1.4	0.6			2.0		3.0				4.4				8.8			8.8								-1.2
1375	〃 南区増栄町	0.0			4.2	10.7			10.4		12.7				14.0				20.6			22.1								基準点
1376	〃 西区篠原町	0.0			3.1	5.4			2.1		8.3				7.1				12.6			14.1								15.3
001-265	〃 西区篠原町	0.0			3.3	8.4			1.6		2.2				3.9				19.7			21.3								24.0

地盤沈下調査結果 (西遠地域)

*地盤高の経年変化(m)

水準点	所在地	地盤高の経年変化(m)																											
		54年12月	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ハ-2	〃 南区米津町	1.8278		1.8301	1.8305		1.8256		1.8292						1.8267					1.8312		1.8302							1.8238
ハ-3	〃 南区新藤町	2.4541		2.4579	2.4590		2.4578		2.4602						2.4628					2.4688		2.4682						2.4674	
ハ-4	〃 西区藤原町	2.1546		2.1591	2.1642															2.4518		2.4530						2.4585	
No.28	〃 南区三和町	4.7673		4.7674	4.7666		4.7650													4.7718								4.5593	
No.30	〃 南区蓮院寺町	3.8983		3.8998	3.8788		3.8745		3.8780						3.8746					3.8486		3.8385						3.8126	
No.32	〃 南区安松町	3.7156		3.7124	3.7068		3.7035													3.6930		3.6884						3.6702	
No.38	〃 南区三島町	3.8767		3.8765	3.8735		3.8699		3.8728																			3.1595	
No.39	〃 南区福塚町	1.9707		1.9728	1.9513		1.9464		1.9477						1.9487					1.9479		1.9408						1.9290	
No.41	〃 南区白羽町	2.1864		2.1875	2.1832		2.1763		2.1772						2.1684					2.1683		2.1580						2.1474	
No.48	〃 中区西伊場町	2.2833		2.2837	2.2851		2.2812		2.2755						2.2693					2.2723		2.2750						2.2751	
No.50	〃 南区倉松町	2.9860		2.9893	2.9803		2.9914		2.9884						2.9893					2.9917		2.9888						2.9887	
No.52	〃 西区入野町	2.2467		2.2528	2.2557															2.2838		2.2884						2.2707	
No.54	〃 西区藤原町	4.8991		4.9037	4.9099										4.9200					4.9200		4.9219						4.8252	
001-255	〃 中区天神町	5.0610		5.0610	5.0614															5.0666		5.0677						5.0643	
001-257	〃 中区田町																					4.7935						4.7911	
001-258	〃 中区成子町																					4.9487						4.8475	
001-259	〃 中区森田町																					2.1773						2.1753	
001-260	〃 南区東若林町																					3.2617						3.2603	
148	〃 中区常盤町	4.8428		4.8450	4.8471															4.8518		4.8537						4.8527	
1373	〃 中区東伊場町	2.6830		2.6830	2.6830		2.6830		2.6830						2.6830					2.6830		2.6830						2.5131	
1374	〃 南区東若林町	3.9533		3.9519	3.9539		3.9553		3.9563						3.9577					3.9621		3.9621						3.9609	
1375	〃 南区増美町	3.8674		3.8716	3.8781		3.8778		3.8801						3.8814					3.8880		3.8895						3.8895	
1376	〃 西区藤原町	4.4706		4.4737	4.4780				4.4789						4.4777					4.4832		4.4847						4.4859	
001-265	〃 西区藤原町	3.4827		3.4880	3.4911															3.5024		3.5040						3.5067	

※No.30、No.39は59年調査時、付近で下水道工事実施

No.38は上に層根があり、使用不能のため、平成5年に仮移設

No.28は亡失のため、H12に仮設金属標を設置

(静岡県くらし・環境部環境局水利用課, 2007)



図 5-11 地盤沈下調査変動量図 西遠地域
(静岡県くらし・環境部環境局水利用課, 2007)

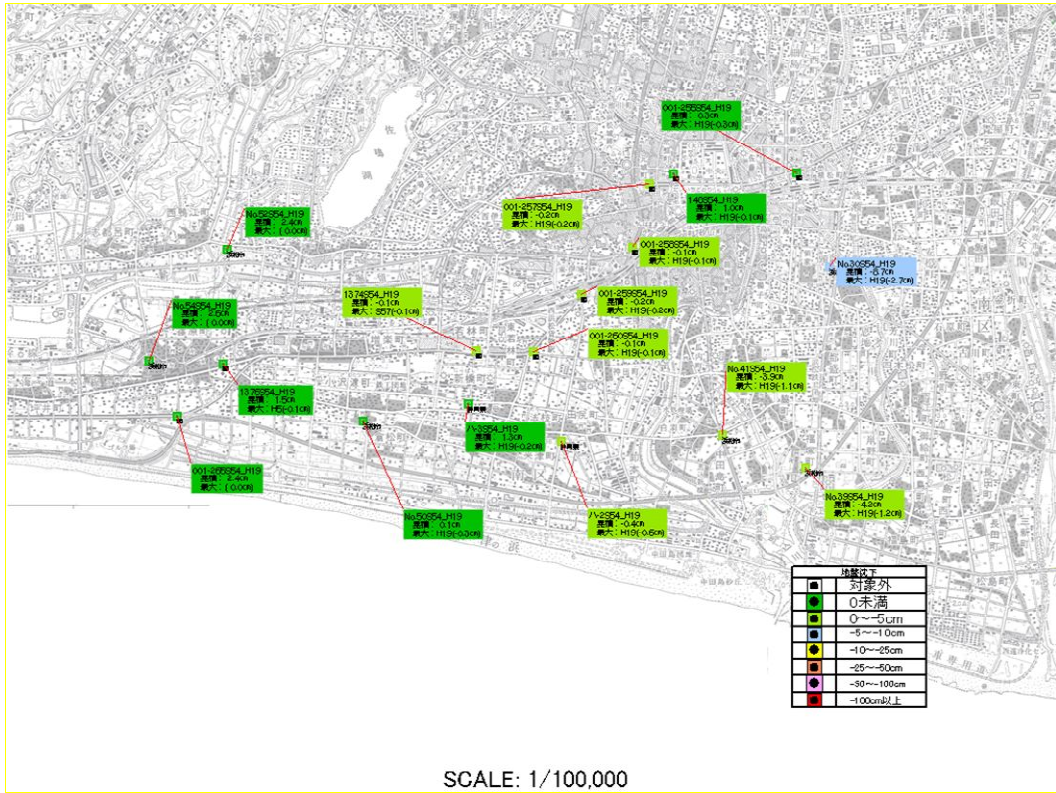


図 5-12 地盤沈下調査地点

6 調査成果図の見方・使い方

6.1 地形分類図

(1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓屑面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角州・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	三角州・海岸低地	河口における河川の堆積作用で形成された低平地。
	砂州・砂堆、礫州・礫堆	波、河流または潮流によって生じた砂または礫の堆積した微高地。
	砂丘	風によって生じた、砂からなる波状の堆積地形。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
	浜	汀線付近の砂や礫で覆われた平坦地（砂浜及び礫浜）をいい、人工改変地内の旧浜を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

(2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況（自然地形）がわからなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦化地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に0.5m以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てして造成された土地。
干拓地		水部や干潟、湿地等を堤防で締め切り、排水することによって陸化した土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

(3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的な可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害	
自然地形が分布する地域	山地	山地斜面	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	台地	砂礫台地（更新世段丘） （完新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することもある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することもある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることも有効である。	
		低地	緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。
	扇状地			
	谷底低地		低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
	氾濫原低地		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
	自然堤防		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。異常の洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
	旧河道		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することもある。	
	三角州・海岸低地		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。また、沿岸部では津波により浸水することもある。洪水時に湛水したり、高潮による浸水の可能性はある。	
	砂州・砂堆、礫州・礫堆		地震の揺れが増幅され、砂州と砂州の間の低地では液状化の可能性はある。沿岸部では津波の影響を受けることがある。比高の小さい砂州・砂堆では洪水や以上の高潮等で冠水することもあるが、排水は速やかである。	
	湿地		地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。	
砂丘	地震の揺れが増幅され、液状化の可能性はある。傾斜地や造成した土地では崩壊の可能性はある。比高の小さい砂丘では洪水等で冠水することもあるが、排水は速やかである。			
天井川及び天井川沿いの微高地	地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。			
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。	
		改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
	低地	盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することもあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
			旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
			旧河道、三角州・海岸低地、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。沿岸部では、津波の影響を受けることがある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫のほか、沿岸部では高潮による浸水の可能性はある。
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
		切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。	
		旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。	

6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 120 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 120 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごと分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1 cm が現地の 500 m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、

地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化等の地震災害の、大きく2つが考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形変化をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形変化が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。本図幅においては、地形的には地形変化が行われていない山麓部の小起伏地や低地部の氾濫原低地等もまだ多く残っており、これからも開発余地がある地域といえる。また、すでに人工変化が行われているような場所でも、建築物の更新や再開等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工変化を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓屑面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場

所では、計画場所の変更や土砂災害対策の実施等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政行政職員や防災関連費用の制約等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

7 参考文献等

本調査説明書の作成にあたっては以下の資料、文献等を参考とした。

(1) 地形調査及び土地利用分類調査

論文・書籍・報告書など(五十音順)

- 宇佐美龍夫(2003) 日本被害地震総覧：416－2001 . 605p.
経済企画庁(1971) 地形分類図. 20 万分の 1 土地分類調図「静岡県」,経済企画庁.
小池一之・町田洋編(2001) 日本の海成段丘アトラス. 105p.
国土庁土地局・静岡県地震対策課(1984) 土地保全図「静岡県」,国土庁.
国土地理院(1987) 土地条件調査報告書(遠州地区),133p.
静岡県(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「浜松」.
土 隆一(1968) 開析扇状地から知られる地殻変動－東海地方を例に－. 第四紀研究,7,4,225-234.
土 隆一(1984) 駿河湾周辺の新第三系・第四系の構造とネオテクトニクス. 第四紀研究,23,2,155-164.
藤原治・小野映介・矢田俊文・海津正倫・佐藤善輝・HEYVAERT Vanessa(2010) 1948年明応地震による遠州灘沿岸浜名川流域の地形変化－掘削調査による地質学的検討－. 歴史地震,25,1,29-38.
町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編(2006) 日本の地形 5 中部. 385p.

ホームページなど

- 国土情報検索サイト Kunijiban ホームページ
(<http://www.kunijiban.pwri.go.jp/jp/index.html>)
国土交通省土地総合情報ライブラリーホームページ「全国のニュータウンリスト(平成 22 年度作成)」
(<http://tochi.mlit.go.jp/>)
静岡県地震防災センターホームページ「静岡県市町村別災害史」
(<http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/shiraberu/index.html>)
静岡県統合基盤地理情報システム「静岡地質情報マップ」
(<http://www.gis.pref.shizuoka.jp/>)
静岡地方気象台ホームページ
(<http://www.jma-net.go.jp/shizuoka/>)

(2) 災害履歴調査

災害全般

- 静岡県 (1996), 自然災害誌. 静岡県史 別編 2, 静岡県, 808p.
静岡県 (1996), 「自然災害年表」. 静岡県史 別編 2 付録, 静岡県, 131p.
静岡県産業気象協会・静岡地方気象台 (1980), 静岡県異常気象災害誌. 静岡県産業気象協会, 559p.
静岡県地震防災センター (2011), 静岡県市町村別災害史. 静岡県地震防災センター.
静岡県地震防災センター 静岡県の防災年報 各年版.
静岡地方気象台 気象・地震概況年報 各年版.

静岡地方気象台 静岡県の地震概況 各年版.

関係県市の地域防災計画.

水害・土砂災害

気象庁(2013),気象統計情報,気象庁 <http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>,(参照 2012-10-16).

国立天文台(2012),理科年表.地学部,丸善,720-753.

防災科学技術研究所(2011),既往斜面災害データベース.

<http://lswel.ess.bosai.go.jp/disaster/index.html>, (参照 2013-1-21).

岩橋徹・木宮一邦(1972),静岡市石部大崩海岸道路の大崩壊の実態・要因および防災上の問題.

静岡大学地学研究報告, 3(1), p.13-29.

静岡県警察本部(1974),昭和49年7月7日~8日台風8号及び梅雨前線による大雨に伴う災害警備の概況.

建設省中部地方建設局浜松工事事務(1990),天竜川-治水と利水,中部建設協会浜松支所.

津田川河川改修促進協議会(1977),繰り返すまい、七夕災害記録総集.

巴川流域総合治水対策協議会(1981),巴川流域の浸水実績.

静岡県(2002),瀬戸川水系河川整備計画.

静岡県(2004),天竜川水系安間川河川整備計画.

静岡県(2002),天竜川水系一雲済川河川整備計画.

静岡県(2001),太田川水系河川整備計画.

国土交通省(2008),天竜川流域及び河川の概要.

静岡地方気象台(2011),平成23年台風第15号に関する静岡県気象速報.静岡地方気象台,19p.

地震・津波災害

齊田時太郎(1935),昭和10年7月11日静岡地震に就て.

宇佐美龍夫(2003),最新版日本被害地震総覧[416]-2001,東京大学出版会,605p.

大庭正八(1957),1944年12月7日東南海地震に見られた遠江地方の家屋被害分布と地盤の関係.

東京大学地震研究所彙報, 35(1), 東京大学地震研究所, p.201-295.

若松加寿江(2011),日本の液状化履歴マップ 745-2008,東京大学出版会

静岡県(1978),静岡県地震対策基礎調査報告書-第2次調査・静岡県地震史.

中部地方建設局浜松工事事務所(1990),天竜川 治水と利水,中部建設協会浜松支所.

東南海地震記録集編集委員会(1982),昭和19年東南海地震の記録,静岡県中遠振興センター.

静岡県地震防災センター(2001),第3次地震被害想定報告書.

渡辺偉夫(1998),日本被害津波総覧[第2版].東京大学出版会,236p.

羽鳥徳太郎(1977),静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査,東大地震研彙報

飯田没事(1977),昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布,愛知県防災会議,

静岡県(2011),3月15日静岡県東部の地震に関する被害情報(第5報).緊急危機管理情報,静岡県,2.

静岡県(2011),8月1日駿河湾を震源とする地震に関する被害状況(第3報).緊急危機管理情報,

静岡県,1.

地盤沈下

静岡県（2010）静岡県地盤沈下調査結果 静岡地域、静岡県くらし・環境部環境局水利用課。

静岡県（2010）平成 22 年度静岡地域地盤沈下調査変動量図、静岡県くらし・環境部環境局水利用課

静岡県（2006）静岡県地盤沈下調査結果大井川地域、平成 18 年度大井川地域地盤沈下調査変動量図
静岡県くらし・環境部環境局水利用課。

静岡県（2004）静岡県地盤沈下調査結果中遠地域、平成 16 年度中遠地域地盤沈下調査変動量図。
静岡県くらし・環境部環境局水利用課。

静岡県（2007）静岡県地盤沈下調査結果西遠地域、平成 19 年度西遠地域地盤沈下調査変動量図。
静岡県くらし・環境部環境局水利用課。

資料

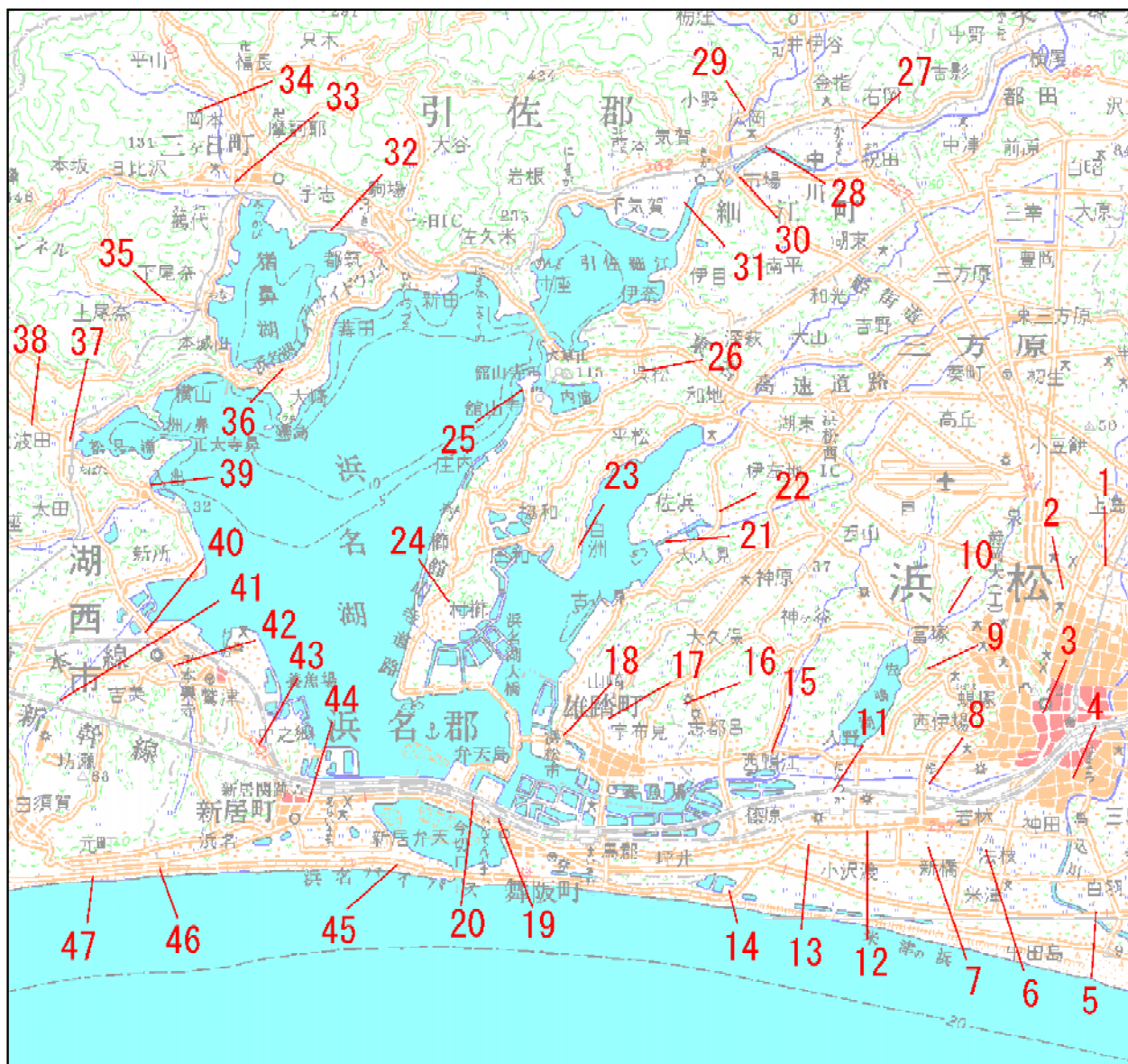
既存資料におけるボーリング柱状図

災害年表

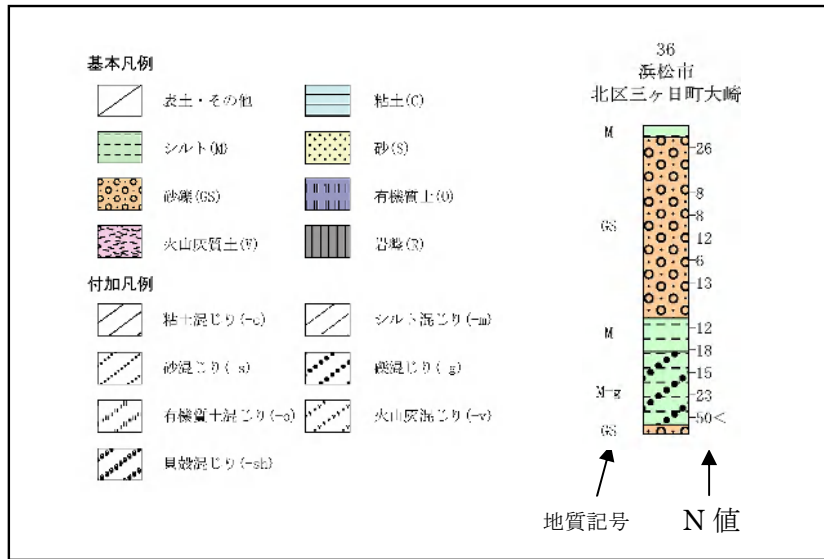
- 1.地震災害
- 2.風水害・土砂災害

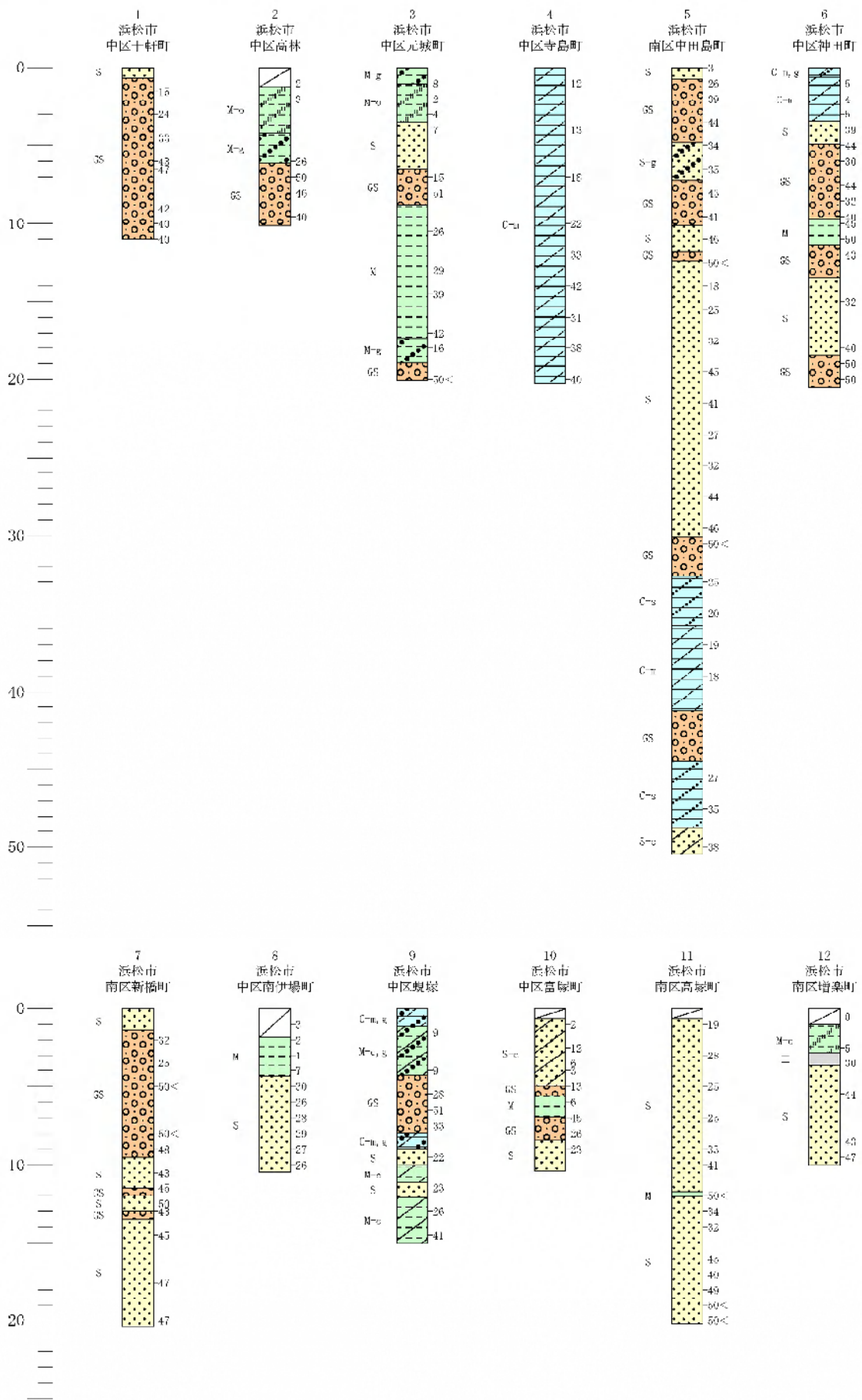
既存資料におけるボーリング柱状図

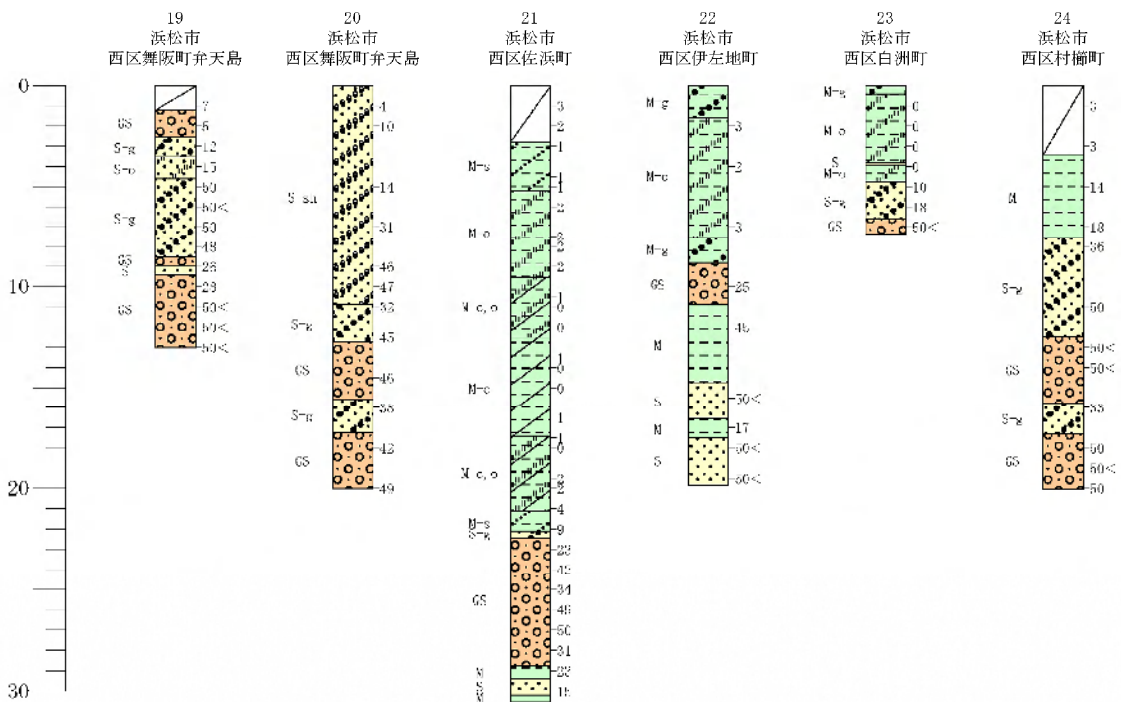
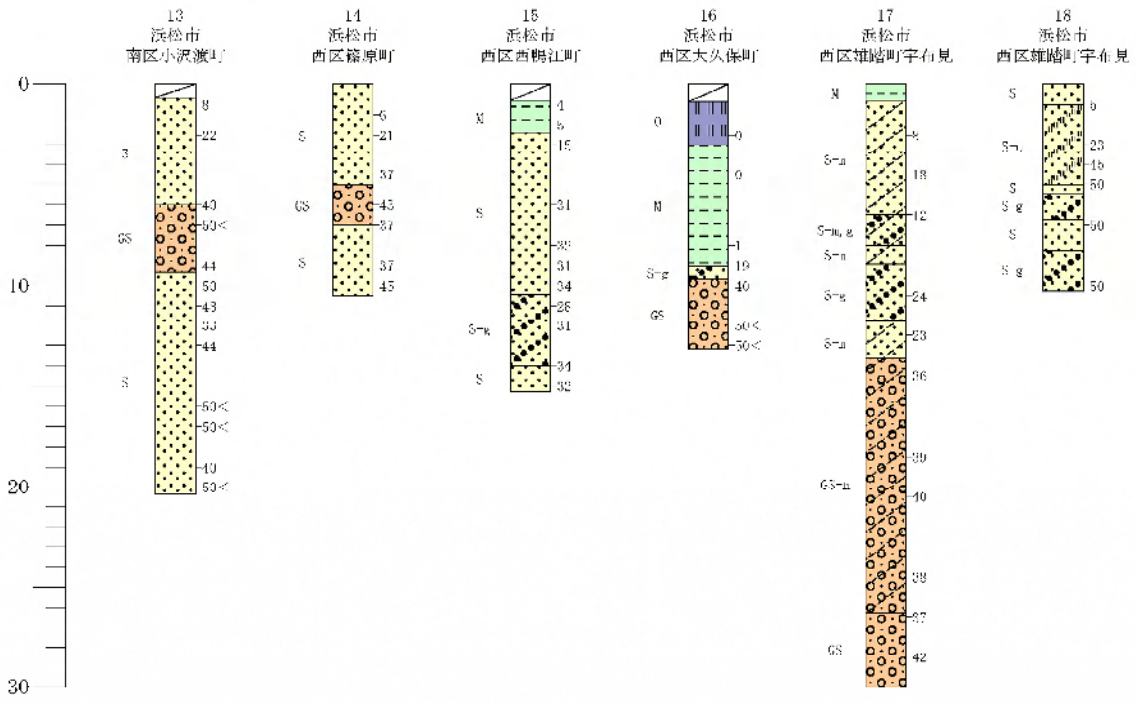
既存資料におけるボーリング調査地点位置図

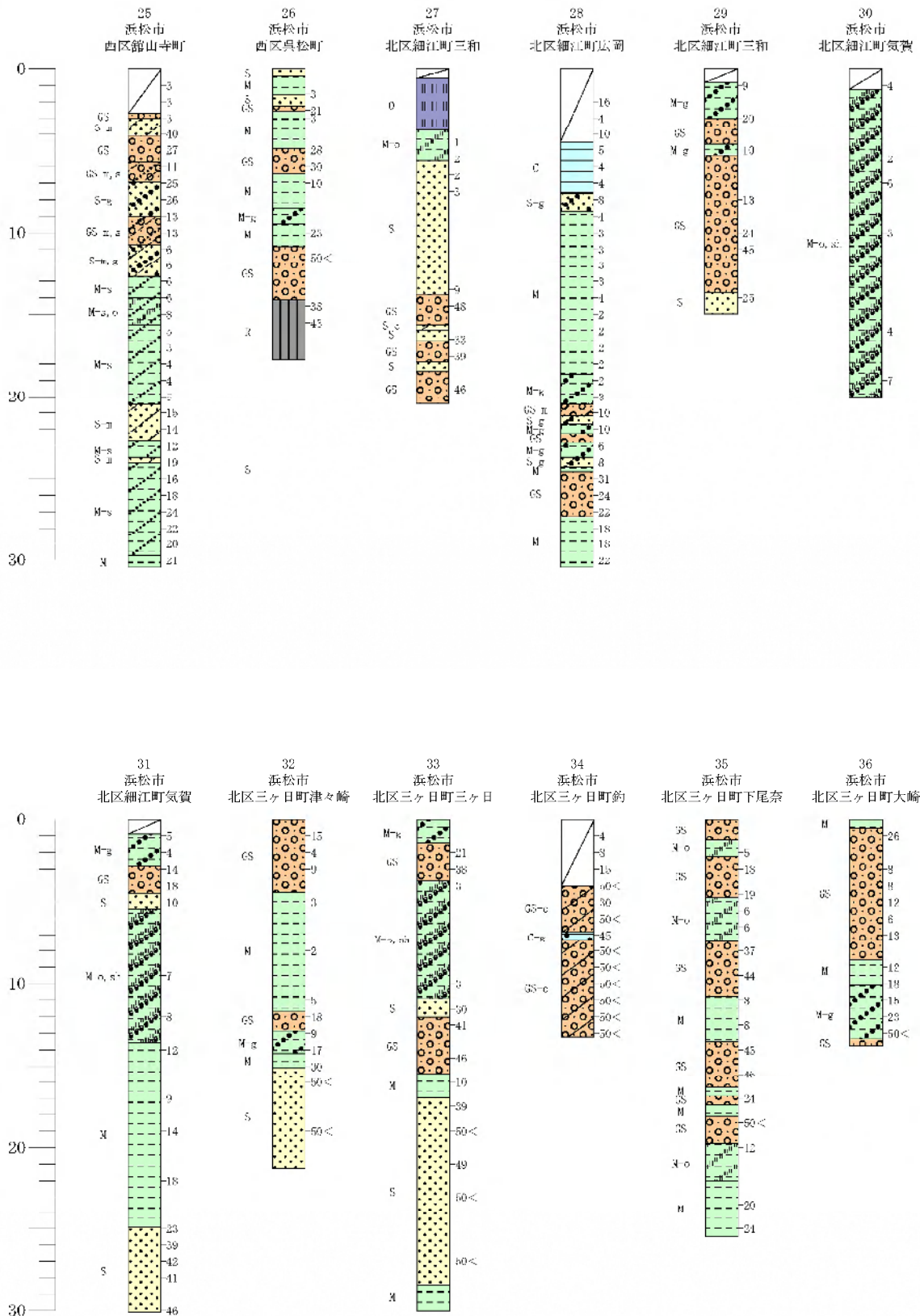


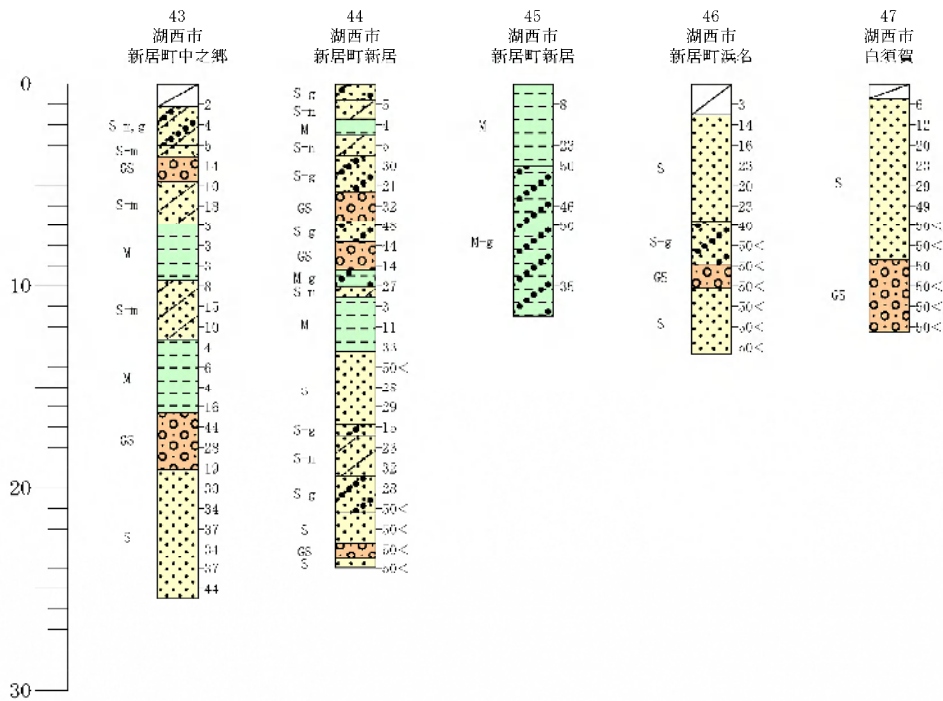
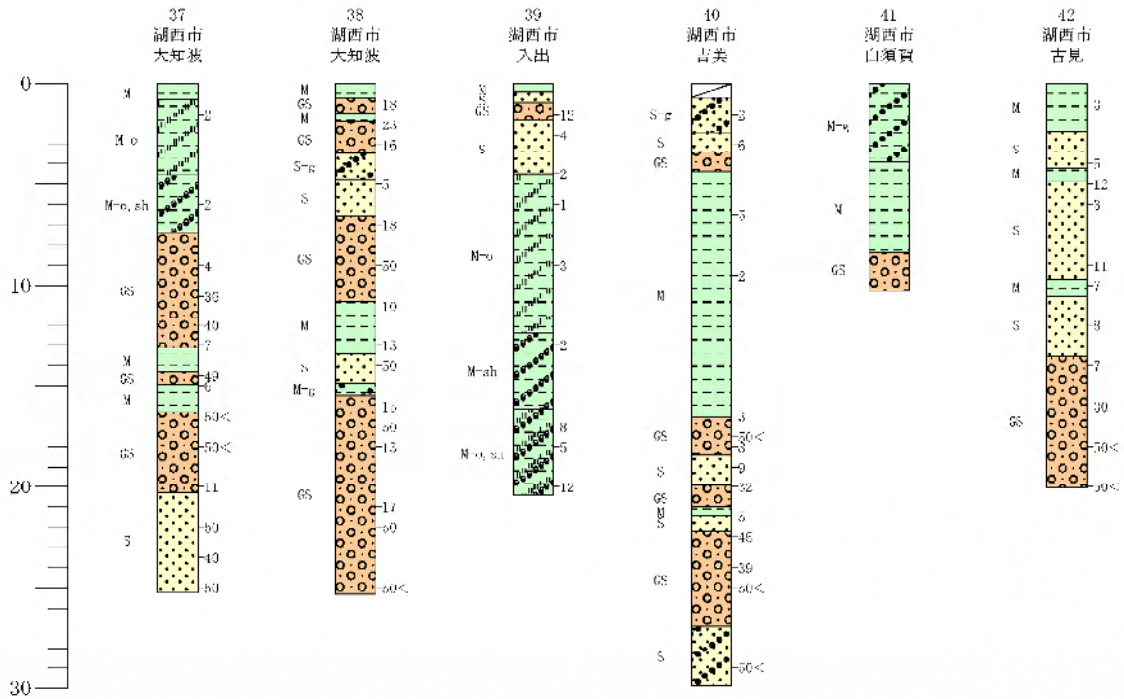
ボーリング柱状図凡例











災害年表(浜松・磐田地域)

災害年表 (1. 地震・津波災害) 浜松・磐田地域

西暦 (和暦)	震央位置(°)		規模 (M)	地域 (地震名称)	被害のあった地域					
	北緯	東経			浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市	
715年7月4日 (靈龜1)	35.1	137.8	6.5~7.5	遠江	湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
1096年12月17日 (永長1)	33.75~ 34.25	137~ 138	8.0~8.5	畿内・東海道	津波が伊勢・駿河を襲う。駿河で仏舎堂屋・百姓の流失400余。					
1498年9月20日 (明応7)	34.0	138.0	8.2~8.4	東海道全般 (明応地震)	震度は白須賀で推定5~6、白須賀宿はこの津波で流失した。現在の元町は津波で移転する前に集落のあった所である。津波の高さは5~6m。新居での震度は推定6、日蘭崎千戸、北山千戸、旧荒井同時に海になり、荒井は約100戸流失、浜名湖が津波で切れ海に通ずるようになった。今切れという。津波の高さは6~8m。(旧新居町)					
1589年3月21日 (天正17)	34.8	138.2	6.7	駿河・遠江	津波が紀伊から房総の海岸を襲い、多数の死者を出した。南海トラフ沿いの巨大地震とみられる。 駿河遠江両国の民家多く破損す。					
1605年2月3日 (慶長9)	33.5 33.0	138.5 134.9	7.9 7.9	東海・南海・西 海諸道 (慶長地震)	橋本で民家100戸のうち80戸流失し、人馬の死傷少なからずという。津波の高さは5~8m。(旧新居町)					
1686年10月3日 (貞享3)	34.7	137.6	7.0	遠江・三河	津波が大岩崎から九州までの太平洋岸に襲撃した。 新居の関所・番所・町家などが少々破損し、死者も生じた。(旧新居町)					
1707年10月28日 (宝永4)	33.2	135.9	8.6	五畿・七道 (宝永地震)	白須賀町では町並が殆らず潰れ道路は亀裂を生じ、馬の通行ができなくなった。また堤堰も崩れた。震度は白須賀で6~7。白須賀町では津波により潰家のうち過半が流失した。白須賀宿は津波に襲われたいくつかの宿の中でも被害がひどく、流出家屋45戸、潰家51戸、半潰37戸、漁船漁道具等までも残らず流失し、元町にあった宿場は全滅。白須賀の海岸で津波の高さは5~6m。新居の震度は6。関所は全壊し、一般の家屋も当時805戸のうち241戸流失、107戸破壊、溺					
					活松で潰家71戸、半潰家29戸、大破損家52戸があった。半田村でも潰家51戸。その他村では大破した。地盤の亦下、地割れがあり、また砂・小石が水とともに噴き出した所もある。震度は6~7。奥付・浜松・舞阪は半は潰れとわがれている。震度は6。舞阪宿では屋89ヶ所より大地震があった。津波が来襲した。そのため宿中の家が破損し死者も少出した。また、今切の渡しは堰がひろくなり、その後、外海から田になった。津波の高さは3~					
					午下刻に大地震があった。見付町の狂瀧通・町妻共潰家多数が生じ、潰ったものも大部分が潰れた。浜名湖口の地形は現在とかなり異なっていた。津波の高さは3m程度とされている。井通村では大井通津波が崩れ、井通村では大井通津波が崩れ、田畑や道路に地割れが生じた。震度は7。家屋7戸が生じたという。震度は6。旧豊田町) 当地には豊田という尾根がある。(旧豊田町)					
					袋井町御伝馬屋敷100戸のうち97戸が倒れた。そのため35人が死に、馬3匹も死んだ。街道の面制から家が倒れ、通行できなくなった。また近辺の百姓家も過半が倒れ、真勝者も出たが、死者はなかった。御堤村で崩れ、所々に地割れもできた。震度は7。長清村では、地所は裂けて溝となり、井戸や溝からは水が溢れ出した。西の流れ川はこのころ濁水のところ、にわかに水が湧き出して川いっぱいになった。石指えの家は皆同じ					
					須賀宿 須賀宿で大破し、二重櫓1面潰、櫓門2面所が大破した。侍屋敷：全壊14戸、破損124戸。足野家：全壊38戸、破損27戸。町家：全壊22戸、半壊76戸、死者5人、真勝者46人。民家：全壊1118戸、半壊1,557戸(ともに寺社を含む)。死者4人、負傷者11人。日坂宿でも家々が破損した。各地の震度は、掛川で6~7、日坂で6。横須賀城内外で堺、石垣、所々崩れた。(城下の被害)川原町：全壊1戸、半壊6戸、十					

西暦 (和暦)	震央位置(°)		規模 (M)	地域 (地震名称)	湖西市	浜北市	額田市	被害のあった地域		掛川市
	北緯	東経						袋井市	森町	
1854年12月23日 (安政1)	34.0	137.8	8.4	東海・東山・南海諸道 (安政東海地震)	死24人。匠かに橋本村・大倉戸村などで、流失41戸、浪家22戸。御役船も110隻中80隻が流失破壊した。津波の高さは3m程度。(旧新居町)	5m。(旧舞殿町) 気質の圓所御門かたむき、欄は残らず倒れ、石垣も破壊した。祝田村も強くゆれ、道路が通行できなくなつた所もあつた。震度は気質で5。気質では水深2,600石余の土地が津波で、長く崩が引かなかつた。津波の高さは推定で5~6m。(旧細江町)	見付宿で3分位潰れ、三本松でもかなりの家が潰れ、塙松で23戸、下前野、保大島近辺は残らず全壊した。また中泉では陣屋が潰れその他寺院を兼ねた東町で全壊18戸、半壊20戸、西町で全壊20戸、半壊29戸。(各地の震度)下前野・保大島:7、見付宿・三本松・塙松・中泉:6、6。福田の駒場近辺はことに全壊の家屋が多かつたといわれ、また下大原でも村中皆潰れてしまつた。地蔵堂・細蔵・土蔵ばかりが残つたといわれている。震度は福田・下大原とも7。古記録によると地震直後に津波がきざし、海岸での津波の高さは6m、太田川河口で3.5m。(旧福田町)	ように倒れ、倒れない家は村中で2~3戸しかなく、廊下立て柱の家は傾いても倒れなかつたといふ。震度は津波で6~7。高さ3m程度の津波が来襲した。(旧浅羽町)	軒町:全壊1戸、半壊3戸、新屋軒:半壊1戸、東本町:全壊5戸、中本町:全壊3戸、半壊7戸、西本町:半壊4戸、東田町:全壊1戸、西田町:半壊3戸、大工町:全壊1戸、半壊6戸、軍全工町:全壊1戸、東新町:全壊2戸、半壊9戸、西新町:全壊2戸、半壊4戸、石津町:全壊2戸、半壊4戸。また舟附天川河口部の入江が地震隆起によつて干上がり、残としての構筋を失つた。当地の震度は6~7。(旧大須賀町)	佐夜の中山の茶屋1軒も残らず潰れ、日坂宿では火、3軒潰れた。掛川宿では出火して火災となり、焼失59戸、浪家374戸、死者58人といわれている。また原川町は焼失24戸、浪家24戸、各和村は焼失4戸、浪家10戸、梅橋村・岡津村はほとんど全壊。(その他各村の浪家)領家村:12戸、細田村:56戸、次田村:19戸、高柳所村:1~2戸、長谷村:全5戸、新村:4戸、91戸、同北側:53戸、新村:4戸、下又村松原:7戸、上張村:5戸、仁藤村:小破1戸、道橋村:13戸、藤田村:48戸、馬橋村:全24戸、印内村:全10戸、成瀬村:全37戸、寛政村:14戸、團ヶ谷村:13戸、池下村:2戸、牛頭村:1戸、伊達村山鼻:28戸、本所村:4戸、伊達方村:2戸、地割れは領家村・高柳所村・長谷村南・大池村・團ヶ谷村・千羽村・伊達方村など各所に生じた。(各地の震度)佐夜・中山・原川町・梅橋村・岡津村・細田村・沢田村・大池村・大池村北・道橋村・増田村・馬橋村・印内村・成瀬村・宮脇村・山鼻:7、掛川宿・新村・團ヶ谷村:6~7、各和村・領家村・長谷村南・下又村上張村・池下村・本所村:6、日坂宿・高柳所村・牛頭村・伊達方村:5~6、仁藤村・倉貫:5、横須賀で二の丸の住居悉く潰れ、本丸・三の丸も破壊した。(各地の被害)河原町:全壊4戸、十六軒町:全壊1戸、半壊1戸、新屋町:全壊3戸、半壊2戸、西本町:全壊1戸、半壊1戸、真田町:全壊3戸、半壊2戸、全壊2戸、全壊10戸、軍全町:全壊2戸、半壊3戸、西新町:全壊5戸、半壊3戸、西新町:全壊5戸、半壊2戸、石津:

西暦 (和暦)	震央位置(°)		規模 (M)	地域 (地震名称)	被害のあった地域					
	北緯	東経			湖西市	浜松市	豊田市	袋井市	森町	掛川市
1855年11月7日 (安政2)	34.5	137.75	7.0~7.5	遠州灘	前年の安政東海地震の最大余震。遠州灘沿岸に高潮あり。舞阪~相良の沿岸地域で震度5以上になり、浜名湖口では隆起した。浜松で町方全潰7、本堂庫裡潰6箇所、山門潰2箇所、土蔵大破多く、長屋潰れ多し。死者2人。米津村では全潰27ともいふ。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。
1891年10月28日 (明治24)	35.6	136.6	8.0	岐阜県西部 (濃尾地震)	東海道防免附町より浜松市に到る間諸処に破壊あり、遠江で、家屋全壊32戸、半壊31戸、道路破損19箇所、橋梁損壊1箇所、堤防崩壊24箇所。 掛塚村地内天竜川改修護岸堤馬路に長さ約30間、腹附に約90間、幅6、7寸の割れ目を生じ、大淀りなどを破壊した。(旧電洋町)	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。	掛塚、下前野、袋井、掛川辺の被害がひどく、ほとんども全潰。
1944年12月7日 (昭和19)	33.6	136.2	7.9	紀伊半島沖 (東南海地震)	驚津駅西方1,500m地点から約2kmの東海道線の変位(高さ4.5~20m)に大沈下を起した。2km区間の数箇所が陥没し、北側へ土が40~50m、最大100m流れ出した。その他通井に噴水田に砂水を出するなど、地盤の液状化が目立った。震度は入出で6~7、驚津・白須賀で6、新所、知波田で5~6である。三重県沿岸で被害が大きかったが、静岡県沿岸は比較的軽微で、当地の津波の高さは1~2m。 新居付近では西方旧東海道に沿う海岸地帯に噴出した所があった。震度は5~6。(旧新居町) (人的・家屋被害) 驚津:死亡18~19人、負傷者63人、全壊68戸、半壊190戸、知波田:全壊2戸、半壊1戸、入出:全壊71戸、半壊192戸、新所:全壊1戸、半壊2戸、白須賀:全壊38戸、半壊21戸、新居:全壊25戸、半壊15戸。	袋井地域の被害は特に大きかった。 (家屋被害) 三川地区:全壊86戸、半壊50戸、今井地区:全壊322戸、半壊14戸(住家被害率は96.9%)、山梨地区:全壊124戸、半壊12戸、西地区:全壊642戸、半壊106戸、南地区:全壊67戸、半壊69戸、北地区:全壊182戸、半壊31戸、東地区:全壊146戸、半壊154戸、笠原:全壊8戸、大蔵では全半壊と度)友承・深見・今井・木田・徳光・横井・西別所・久能新田・堀越下・袋井本町・西田・松袋・野・上石野・法多・善見・5、真山・下真名・久津部・7、三川・山梨:6~7、上山梨・宇刈・高尾・下真名・6、見取・小路・大門・岡崎・相木:5~6、山田・西之谷・可睡・不入斗・下石野・小野田付近で鉄道築堤が低地盤の基礎の沈下によって崩壊。北側の田の中に砂をまぜた水が噴出した。久野西・笠原でも田畑から水を噴き出したところが多い。 (家屋被害) 東部地区:全壊89戸、半壊42戸、本町地区:全壊135戸、半壊76戸、西部地区:全壊34戸、半壊約40戸、北部地区:全壊73戸、半壊約40戸。 (各地の震度) 塚田・五十子・於保:6~7、豊兵衛・下太・南田:6。津波の高さは1.5m。また豊浜・福田などで田から砂や水が噴き出した。(旧稲田町) (家屋被害) 掛塚:全壊25戸、半壊8戸、中里・長田町・吉野・篠原:6、本町町・葉師町・材木町・新良町・本郷町・西島町・伊場・伊佐島・庄内・可美村:5~6、中郡町・豊内・可美村・恒武町・上石町町・大瀬町・小池町・市	袋井地域の被害は特に大きかった。 (家屋被害) 三川地区:全壊86戸、半壊50戸、今井地区:全壊322戸、半壊14戸(住家被害率は96.9%)、山梨地区:全壊124戸、半壊12戸、西地区:全壊642戸、半壊106戸、南地区:全壊67戸、半壊69戸、北地区:全壊182戸、半壊31戸、東地区:全壊146戸、半壊154戸、笠原:全壊8戸、大蔵では全半壊と度)友承・深見・今井・木田・徳光・横井・西別所・久能新田・堀越下・袋井本町・西田・松袋・野・上石野・法多・善見・5、真山・下真名・久津部・7、三川・山梨:6~7、上山梨・宇刈・高尾・下真名・6、見取・小路・大門・岡崎・相木:5~6、山田・西之谷・可睡・不入斗・下石野・小野田付近で鉄道築堤が低地盤の基礎の沈下によって崩壊。北側の田の中に砂をまぜた水が噴出した。久野西・笠原でも田畑から水を噴き出したところが多い。 (家屋被害) 東部地区:全壊89戸、半壊42戸、本町地区:全壊135戸、半壊76戸、西部地区:全壊34戸、半壊約40戸、北部地区:全壊73戸、半壊約40戸。 (各地の震度) 塚田・五十子・於保:6~7、豊兵衛・下太・南田:6。津波の高さは1.5m。また豊浜・福田などで田から砂や水が噴き出した。(旧稲田町) (家屋被害) 掛塚:全壊25戸、半壊8戸、中里・長田町・吉野・篠原:6、本町町・葉師町・材木町・新良町・本郷町・西島町・伊場・伊佐島・庄内・可美村:5~6、中郡町・豊内・可美村・恒武町・上石町町・大瀬町・小池町・市	袋井地域の被害は特に大きかった。 (家屋被害) 三川地区:全壊86戸、半壊50戸、今井地区:全壊322戸、半壊14戸(住家被害率は96.9%)、山梨地区:全壊124戸、半壊12戸、西地区:全壊642戸、半壊106戸、南地区:全壊67戸、半壊69戸、北地区:全壊182戸、半壊31戸、東地区:全壊146戸、半壊154戸、笠原:全壊8戸、大蔵では全半壊と度)友承・深見・今井・木田・徳光・横井・西別所・久能新田・堀越下・袋井本町・西田・松袋・野・上石野・法多・善見・5、真山・下真名・久津部・7、三川・山梨:6~7、上山梨・宇刈・高尾・下真名・6、見取・小路・大門・岡崎・相木:5~6、山田・西之谷・可睡・不入斗・下石野・小野田付近で鉄道築堤が低地盤の基礎の沈下によって崩壊。北側の田の中に砂をまぜた水が噴出した。久野西・笠原でも田畑から水を噴き出したところが多い。 (家屋被害) 東部地区:全壊89戸、半壊42戸、本町地区:全壊135戸、半壊76戸、西部地区:全壊34戸、半壊約40戸、北部地区:全壊73戸、半壊約40戸。 (各地の震度) 塚田・五十子・於保:6~7、豊兵衛・下太・南田:6。津波の高さは1.5m。また豊浜・福田などで田から砂や水が噴き出した。(旧稲田町) (家屋被害) 掛塚:全壊25戸、半壊8戸、中里・長田町・吉野・篠原:6、本町町・葉師町・材木町・新良町・本郷町・西島町・伊場・伊佐島・庄内・可美村:5~6、中郡町・豊内・可美村・恒武町・上石町町・大瀬町・小池町・市	袋井地域の被害は特に大きかった。 (家屋被害) 三川地区:全壊86戸、半壊50戸、今井地区:全壊322戸、半壊14戸(住家被害率は96.9%)、山梨地区:全壊124戸、半壊12戸、西地区:全壊642戸、半壊106戸、南地区:全壊67戸、半壊69戸、北地区:全壊182戸、半壊31戸、東地区:全壊146戸、半壊154戸、笠原:全壊8戸、大蔵では全半壊と度)友承・深見・今井・木田・徳光・横井・西別所・久能新田・堀越下・袋井本町・西田・松袋・野・上石野・法多・善見・5、真山・下真名・久津部・7、三川・山梨:6~7、上山梨・宇刈・高尾・下真名・6、見取・小路・大門・岡崎・相木:5~6、山田・西之谷・可睡・不入斗・下石野・小野田付近で鉄道築堤が低地盤の基礎の沈下によって崩壊。北側の田の中に砂をまぜた水が噴出した。久野西・笠原でも田畑から水を噴き出したところが多い。 (家屋被害) 東部地区:全壊89戸、半壊42戸、本町地区:全壊135戸、半壊76戸、西部地区:全壊34戸、半壊約40戸、北部地区:全壊73戸、半壊約40戸。 (各地の震度) 塚田・五十子・於保:6~7、豊兵衛・下太・南田:6。津波の高さは1.5m。また豊浜・福田などで田から砂や水が噴き出した。(旧稲田町) (家屋被害) 掛塚:全壊25戸、半壊8戸、中里・長田町・吉野・篠原:6、本町町・葉師町・材木町・新良町・本郷町・西島町・伊場・伊佐島・庄内・可美村:5~6、中郡町・豊内・可美村・恒武町・上石町町・大瀬町・小池町・市	袋井地域の被害は特に大きかった。 (家屋被害) 三川地区:全壊86戸、半壊50戸、今井地区:全壊322戸、半壊14戸(住家被害率は96.9%)、山梨地区:全壊124戸、半壊12戸、西地区:全壊642戸、半壊106戸、南地区:全壊67戸、半壊69戸、北地区:全壊182戸、半壊31戸、東地区:全壊146戸、半壊154戸、笠原:全壊8戸、大蔵では全半壊と度)友承・深見・今井・木田・徳光・横井・西別所・久能新田・堀越下・袋井本町・西田・松袋・野・上石野・法多・善見・5、真山・下真名・久津部・7、三川・山梨:6~7、上山梨・宇刈・高尾・下真名・6、見取・小路・大門・岡崎・相木:5~6、山田・西之谷・可睡・不入斗・下石野・小野田付近で鉄道築堤が低地盤の基礎の沈下によって崩壊。北側の田の中に砂をまぜた水が噴出した。久野西・笠原でも田畑から水を噴き出したところが多い。 (家屋被害) 東部地区:全壊89戸、半壊42戸、本町地区:全壊135戸、半壊76戸、西部地区:全壊34戸、半壊約40戸、北部地区:全壊73戸、半壊約40戸。 (各地の震度) 塚田・五十子・於保:6~7、豊兵衛・下太・南田:6。津波の高さは1.5m。また豊浜・福田などで田から砂や水が噴き出した。(旧稲田町) (家屋被害) 掛塚:全壊25戸、半壊8戸、中里・長田町・吉野・篠原:6、本町町・葉師町・材木町・新良町・本郷町・西島町・伊場・伊佐島・庄内・可美村:5~6、中郡町・豊内・可美村・恒武町・上石町町・大瀬町・小池町・市

西暦 (和暦)	震央位置(°)		規模 (M)	地域 (地震名称)	被害のあった地域					
	北緯	東経			湖西市	浜北市	豊田市	袋井市	森町	掛川市
1946年12月21日 (昭和21)	32.9	135.8	8.0	紀伊半島沖 (南海地震)		野町・天王町・上新屋町・将監町・大浦町・三方原・5. 亀五村で半壊5戸、龍池村で半壊1戸、小野口村で全壊1戸、北浜村では全半壊なしと記録された。震害は比較的軽微であった。震度は上善地・新野・宮口・本村・小松などで5。(旧浜北市) 中川で全壊5戸、半壊5戸、気賀で全壊6戸、半壊9戸。(旧細江町) 金指で207戸のうち全壊3戸、半壊1戸。震度は引佐で5~6。(旧引佐町) 1888戸のうち全壊15戸、半壊22戸の被害。震度は5~6。(旧雄踏町) 三ヶ日では柱の損傷2戸、屋根瓦剥離6戸程度で軽微。震度は4~5。(旧三ヶ日町) (人的・家屋被害)浜松中央：死者2人、負傷者1人、中の町：死者2人、和田：死者2人、負傷者1人、笠田：死者3人、芳川：死者3人、村橋：死者2人、可美：死者2~3人、全壊4戸、舞阪：全壊1戸、半壊16戸	どから水や砂を噴き出した。井戸の中に土砂を噴き上げて使えなくなったりしたところもある。(旧竜洋町) (家屋被害)北地区：全壊2戸、半壊7戸、西地区：全壊11戸、半壊18戸、南地区：全壊47戸、半壊90戸。(各地の震度)赤池・新平島・宮之一色・西之島・6. 池田・豊田：5~6。池田で田からの噴水現象がみられた。(旧豊田町) 南地区で半壊5戸があったが、家屋の倒壊はなかった。広瀬では道路が地割れし田から水が噴き出した。震度は松之木島・神増・上神増・下神増で5である。(旧豊岡村) (人的被害)向笠：死者2人、重傷者2人、軽傷者1人、田原：死者3人、重傷者3人、軽傷者2人、南御厨：死者4人、負傷者7人、福田：死者6人、負傷者24人、於保：死者2人、磐田：死者3人、重傷者2人、軽傷者7人。	土砂が噴出した。(旧湯羽町) (人的被害)宇列：死者2人、山梨：死者26人、久勢西：死者8人、重傷者8人、軽傷者8人、袋井：死者65人、負傷者101人、上浅羽：死者9人、負傷者3人、東浅羽：死者1人、三川：死者8人、今井：死者17人、田原：死者3人、重傷者3人、軽傷者1人。		
1960年5月23日 (昭和35)	39.5 (南緯)	74.5 (西経)	M _s 8.5 M _w 9.5	チリ沖 (チリ地震津波)		津波による負傷者2人、半壊1戸、浸水家屋290戸、船舶流失105隻の被害があった。(全県下) 被害は中部以西の日本各地にわたり、津波が静岡県より九州にいたる海岸に到達した。(高知・三重・徳島沿岸で4~6m)				
2001年4月3日 (平成13)	35.1	138.5	5.3	静岡県中部		豊浜で津波の高さ1.2m。(旧福田町)				
2004年9月5日 (平成16)	33.8	137.8	7.4	三重県南東沖		豊岡村で軽傷者1人				
2009年8月11日 (平成21)	34.8	138.5	6.5	駿河湾		負傷者2人 豊岡村で軽傷者1人 重傷者1人	軽傷者1人		軽傷者7人	
2011年3月11日 (平成23)	38.1	142.9	9.0	三陸沖 (東北地方太平洋沖地震)		舞阪で73cmの津波を観測。 三陸沖中部から茨城県沖までのプレート境界を震源域とする逆断層型巨大地震。被害の多くは巨大津波(観測機器は振り切れ、現地調査によれば最大35m以上)によるもの。				
2011年8月1日 (平成23)	34.4	138.3	6.2	駿河湾		重傷者1人			軽傷者2人	

災害年表（2. 風水害・土砂災害） 浜松・磐田地域

年号	和暦	西暦	西暦	西暦	西暦	西暦	被害のあった地域			
							浜松市	磐田市	袋井市	森町
明治	1	1868	7	8	豪雨	藤木村・面村・西木原村と西郷村の西新田が流失。掛塚村では死者20人、流失家屋73戸。西岸でも上小幡村で田畑の荒廃数百歩、流失家屋20余戸、中善地村では家屋流失10余戸。濁流が天神町まで溢れた。	磐田市	袋井市	森町	掛川市
明治	1	1868	9	9	洪水		袖浦村にて天竜川決壊、掛塚で50戸流失。			
明治	3	1870	9	3	大風	大風で新居・中之郷・内山潰家あり。340戸潰、大雨で田畑荒あり。				
明治	7	1874	8	10	暴風雨	県内暴風雨、死人出る。(全県下)				
明治	8	1875	8	30	落雷	新居町で落雷があり、死者1人、家破壊。				
明治	9	1876	7	15	洪水	天竜川西岸、篠田村、上藤田地内村裏・河輪村・弥助新田などで破堤。東岸でも池田・掛塚などで破堤、30戸流失。				
明治	9	1876	9	13~18	台風・暴風雨		天竜川沿岸の掛塚町・井通村において堤防が決壊、流失家屋30余戸、田畑の荒廃甚だしく、西之島辺りから池田村まで一円水が押し入ってしまった。			
明治	13	1880	10	4	大風雨		遠州最上郡で長屋潰れ死者1人。			
明治	16	1883	3	30	暴風		遠州豊田、暴風で屋根吹き飛ばされ怪我人、死者あり。			
明治	22	1889	9	11	暴風雨・洪水	天竜川の破堤により、中野町の家屋被害は流失4戸、浸水300戸。暴風による家屋被害は気賀町で全壊39戸、半壊22戸、引佐町で全壊10戸、半壊26戸。引佐町では農作物の被害も甚大であった。	天竜川の破堤により、家屋被害は掛塚村で全壊6戸、半壊11戸、豊浜村で流失3戸、於保村で倒壊数十戸、長野村で全壊8戸、半壊30戸。豊浜村では本田川に架かる全構梁が流失した。	幸浦村では本田川の破堤により、潰家2戸、半壊7戸。	周智郡下では死者1人、家屋流失8戸、全壊73戸、半壊153戸。	
明治	25	1892	9	4	台風	(家屋被害)引佐郡藤玉村：全壊91戸、半壊59戸、井伊谷村：全壊76戸、半壊78戸、金指町：半壊家屋多数。引佐、細江沿岸田地に海水入る。	磐田郡で死者6人、全壊1714戸、半壊1,508戸。		周智郡で死者2人、全壊141戸、半壊382戸。	
明治	30	1897	3	30	暴風		遠州豊田、暴風で屋根吹き飛ばされ怪我人、死者あり。			
明治	30	1897	9	6~9	台風		磐田郡で死者3人、負傷者4人、全壊158戸、床上浸水28戸、床下浸水179戸。			
明治	30	1897	9	29	暴風雨		天竜川大洪水、磐田郡で死者3人、負傷者4人、全壊2戸、床上浸水89戸、床下浸水120戸。			
明治	31	1898	6	5	洪水		本田川は御厨村と田原で、原野谷川は久野村で、瀬入川は蒲川村にて堤防決壊、敷地川堤防決壊2箇所。死者4人、床上浸水184戸。橋梁47箇所、船舶1隻が流失。			
明治	31	1898	9	6	台風	引佐郡井伊谷村で全壊13戸、半壊21戸、気賀町で全壊21戸、半壊16戸	天竜川水量14尺(4.24m)に達し、磐田郡下で死者4人、全壊651戸、半壊652戸、流失3戸、床上浸水184戸、床下浸水217戸。			周智郡下で全壊129戸、半壊79戸、流失1戸、床上浸水16戸、床下浸水122戸。
明治	33	1900	7	8	台風	6日から7日にかけて紀州方面より浜松付近に上陸、北上。浜松の最低気圧98.7mb。	磐田郡、周智郡にて家屋の浸水・倒壊等の被害。特に三川、歌地、西尾、眞付・中泉・山名・笠西・今井・向笠・広瀬などの町村で被害が最も多かった。磐田郡で全壊2戸、半壊5戸、流失2戸、床上浸水368戸、床下浸水684戸。			

和暦 年号	西暦			気象概要	被害のあった地域					
	年	月	日		湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
明治 33	1900	9	28	台風			磐田郡 で負傷者32人、全壊415戸、半壊528戸、床上浸水6戸、床下浸水24戸。 台風は28日紀伊半島両端をかすめ大玉島をへて浜松付近に上陸、金華山沖に去った。浜松で最大風速25.2m/sを観測。		周智郡で死者1人、全壊45戸、半壊82戸。	
明治 35	1902	3	1	竜巻					全壊 49戸、半壊14戸、死者5人、負傷者23人。(旧大須賀町) (12時10分ごろ磐田郡宇津村に竜巻が上陸、北東に進み大野・権須賀を通過。竜巻の幅18m 延袤5280m。)	
明治 36	1903	7	1~2	豪雨			天竜川流域 は豪雨の流失・堤防の決壊など大きな被害を挙げた。磐田郡で全壊2戸、半壊2戸、流失4戸、床上浸水388戸、床下浸水676戸、堤防決壊167箇所、山崩れ70箇所。		周智郡で死者1人、半壊1戸、浸水222戸、堤防決壊19箇所。	
明治 36	1903	7	8~11	豪雨		浜名郡中瀬村付近で天竜川堤防が180mにわたり破堤。浜名郡で全壊5戸、半壊3戸、流失2戸、床上浸水463戸、床下浸水771戸。		周智郡で全壊60戸、半壊46戸、流失47戸、浸水341戸の被害。		
明治 37	1904	7	9~12	台風、洪水		天竜川西岸中瀬村破堤 180間、床上浸水41戸、流失1戸、浸水80戸、山(け)け崩れ996箇所。		周智郡で負傷者1人、全壊6戸、半壊11戸、流失111戸、浸水613戸。		
明治 38	1905	7	18~20	台風		台風は9日夜瀬畔付近に上陸し、産権を経て能登沖に去った。8日から11日にかけて大雨が降った。総雨量:浜松(8~12日)272mm、気多(9~12日)767mm。		周智郡で全壊3戸、浸水188戸。その他道路・橋・堤防などに被害。		
明治 43	1910	8	7~10	台風		(人的被害)浜名郡:死者2人、負傷者3人、引佐郡:死者1人、負傷者1人。(家屋被害)浜名郡:全壊47戸、半壊44戸、引佐郡:全壊2戸、半壊1戸、流失1戸。(浸水被害)浜名郡:床上1,904戸、床下2,901戸、引佐郡:床上78戸、床下243戸。		周智郡で死者1人、負傷者2人、全壊12戸、半壊15戸、床上浸水155戸、床下浸水970戸。		
明治 44	1911	6~7	27~4	台風・高波		台風は四国南方海上に運じ、房総沖に去った。7日から10日にかけて雨が降り続いた。総雨量:静岡650mm、浜松670mm、日雨量:黒竹340mm、磐田郡沿岸で高波により岸、港、漁、波止場などが破壊され、全壊7戸、半壊6戸、床上浸水28戸、床下浸水227戸等。				
明治 44	1911	8	3~5	台風		浸水被害:中瀬で流失6戸、半壊23戸、浸水590戸。橋の流失12箇所、田畑の被害約400ha。浜松市域では馬込川、新川などの氾濫で床上1,528戸、床下798戸。		死者8人、負傷者6人、全壊22戸、半壊35戸、流失17戸、床上浸水787戸、床下浸水1,004戸。飯田村では太田川洪水のため、橋梁流失2箇所、山崩れ2箇所、田畑の被害甚大。一宮村でも堤防決壊31箇所、山崩れは数え切れないほど生じた。		
大正 1	1912	9	8	落雷					磐田郡で死者1人、負傷者16人、全壊9戸、半壊6戸、床上浸水26戸、床下浸水97戸。	磐田郡 全壊17戸、半壊20戸、床上浸水20戸、床下浸水6戸。
大正 1	1912	9	22~23	高潮・台風		浜名郡 湖では2m以上の高潮が起り、東岸の和地村・伊佐身村・雄踏村・北庄内村に多大な被害。				
大正 6	1917	9~10	30~1	台風・高波		(家屋被害)浜松市:全壊1戸、浜名郡:全壊21戸、半壊5戸、引佐郡:全壊6戸、半壊2戸。(浸水被害)浜松市:床上3戸、浜名郡:床上180戸、引佐郡:床上1戸、床下28戸。		磐田郡で全壊26戸、半壊6戸、床上浸水2戸、床下浸水69戸。	周智郡で全壊3戸、半壊3戸、床上浸水2戸、床下浸水19戸。	
大正 7	1918	11	2	豪雨		浜名郡で暴風による破損家屋10数戸。				掛川町全部浸水。
大正 10	1921	9	4~8	台風		各河川が増水、浸水家屋800戸。		中泉町で浸水家屋300余戸。	周智郡で浸水家屋42戸。	横須賀町・大淵村で浸水家屋600戸。
大正 11	1922	7	3~4	大雨		四国南方海上で発達した台風は、7日夜瀬畔付近から浜松付近に上陸。浜松の最低気圧は999.5mb。総雨量:浜松324mm、袋井422mm、大内338mm等。				
大正 14	1925	9	10~11	台風		天竜川 の橋が流失、床下浸水90戸。				
大正 15	1926	7	4	豪雨		浜名郡で突風により死者4人、住家2戸倒壊。落雷にて死者1人。小笠原東海上に現れた台風は、志摩半島をかすめて北陸に抜けた。西部や大井川上流域で豪雨。雨量は200mm以上に達し、二俣で日雨量351mmを観測。				

和暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦		西暦				
年号	年	月	日	気象概要		湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市													
大正	15	9	4	台風	(人的被害)引佐郡:死者1人、負傷者25人、浜名郡:負傷者35人、(家屋被害)浜名郡:全壊772戸、半壊403戸、引佐郡:全壊188戸、半壊268戸。(浸水被害)浜名郡:床上浸水4戸、浜松で最大風速25.6m/sを観測。浜松市:浜名郡で全壊6戸、引佐郡で半壊2戸。	総雨量 208mm、浸水家屋700余戸。	浜松・島田地方浸水家屋7400戸、その他堤防決壊、橋流失等。	西部で豪雨。(浸水被害)浜松署管内:床上283戸、気象署管内:床上7戸、床上47戸。	浜名郡で焼失3戸、浜松市で浸水家屋約1,500戸。	落雷により、磐田郡で焼失1戸。	西郡は被害が大きき家屋、樹木の倒壊、鉄道車両の転覆、電話番号の不通知、死傷者などを多く出した。磐田郡で死者4人、負傷者44人、全壊268戸、半壊278戸。	周智郡で死者1人、負傷者8人、全壊69戸、半壊134戸。	周智郡で死者1人、負傷者5人、全壊4戸、半壊10戸。	掛川署管内で浸水家屋30戸、橋流失6箇所。										
昭和	4	8	15~16	台風、大雨	台風は26日遠州灘に達し、浜松で1時間40mmの強雨を観測。																			
昭和	4	10	25~26	台風																				
昭和	6	10	7~8	豪雨	低気圧の通過により、浜松で1時間40mmの強雨を観測。																			
昭和	7	6	9	雷雨	浜名湖は高潮により田畑・養魚池の浸水、道路の欠損など多大な被害。(浸水被害)浜名郡:床上22戸、床上114戸、引佐郡:床上24戸、床上158戸。																			
昭和	7	7	1~2	大雨	雨量は中部・西部の山間部で多く、市内で床上浸水200戸、東海道天竜線は約10m流失。																			
昭和	7	9	5~6	雷雨	馬込川、新川の氾濫で床上浸水25戸、床上浸水793戸。																			
昭和	7	9	12~14	大雨	馬込川の氾濫で多大な被害があった。浜松署管内で半壊4戸、床上浸水646戸、床上浸水6,389戸、堤防100箇所等。																			
昭和	10	8	27~29	台風、高潮	低気圧の通過により、浜松で1時間40mmの強雨を観測。																			
昭和	10	9	31~3	大雨	浜松署管内で死者1人、半壊1戸、床上浸水148戸、床上浸水4,596戸、堤防24箇所等。梨・みかん・たばこをはじめ、水田冠水1,500haにも及び農作物の被害甚大。																			
昭和	11	9	26~28	大雨	本州南岸に前線が停滞し、31日から2日にかけて浜松・二俣等で雨量は200mmを超えた。																			
昭和	13	8	1~4	豪雨	浜松湖係所管内で死者2人、行方不明1人、床上浸水7戸、床上浸水253戸。																			
昭和	13	8	25~27	台風	浜松湖係所管内で死者8人、負傷6人、全壊1戸、床上浸水836戸、床上浸水5,336戸。九州西方から東進してきた低気圧により強い雨が降った。総雨量:浜松380mm、金谷494mm、静岡293mm、大河内415mm等。																			
昭和	16	7	11~12	豪雨	気象署管内で死者3人、全壊4戸、半壊5戸、床上浸水177戸、床上浸水878戸。強雨により井伊谷川の水位は気象で3mに達した。																			
昭和	16	11	28	大雨	新居管内で死者1人、負傷者1人、全壊1戸、半壊4戸、床上浸水1戸、床上浸水422戸。																			
昭和	19	8	6~7	台風	梅雨前線が本州南海上に停滞、低気圧が静岡県沿岸を通過し大雨となった。総雨量:浜松340mm、興津287mm等。																			
昭和	16	11	28	大雨	新居管内で床上浸水30戸、床上浸水140戸。																			
昭和	19	8	6~7	台風	浜松市で浸水家屋1,200戸。																			

和暦 年号	西暦 年	西暦 月	西暦 日	気象概要	被害のあった地域					
					湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
昭和	20	8	23~24	台風	台風は房総南部から能登半島を経て日本海を北上。県内の雨量:興津244mm、藤枝206mm等。 引佐郡は都田川・井伊谷川・釣橋川が増水。(浸水被害)鎮玉村:床上119戸、地下50戸、床上300戸。田原500haが浸水。	豪雨のため各地で出水。小笠・磐田地方で床上浸水1380戸、床上浸水3,000戸。	豪雨のため各地で出水。小笠・磐田地方で床上浸水1380戸、床上浸水3,000戸。			
昭和	20	10	4~5	台風(19号)	台風は房総半島の南海上を通過。総雨量:浜松(4~5日)245mm、静岡(3~5日)374mm、興津(3~5日)418mm等。 (人的被害)浜松市内:死者1人、浜名郡芳川村:行方不明34人(内23人死亡)。(家屋被害)浜松市内:倒壊1戸、(浸水被害)浜松市内:床上40戸、床上593戸、浜名郡芳川村:浸水500戸、同郡和田村:床上140戸。 安倍川・天竜川は明治34年以来の大増水で、鉄橋および木橋の通行は禁止された。浜名郡芳川村では天竜川堤防が約40m決壊。	床上浸水91戸、床上浸水123戸。				
昭和	24	6	18~22	台風(2号)	台風は遠州灘・房総半島の南海上を通過。総雨量:浜松(4~5日)245mm、静岡(3~5日)374mm、興津(3~5日)418mm等。 浜名郡知波田村で太田川・今川の堤防がそれぞれ2箇所決壊。	馬込川が浜名郡菊志村で決壊、浜松市内向宿、山下、浅田方面で浸水家屋数高。井伊谷川、都田川は気賀町地先で1.6m増水し、中川村地先では約30m浸水。	磐田郡長野村刑部地先でぼろ川の堤防約20mが決壊。			
昭和	25	5	3~5	大雨	山下町・竜禅寺町で浸水家屋100余戸。 浜名郡和田村で床上浸水10戸、引佐郡徳玉村瀬戸一色で橋が流失。	今ノ浦川の氾濫で水田100haが冠水、半壊家屋1戸。				
昭和	25	6	9~14	大雨	突風のため浜名郡新居町新居井天で住宅1戸が倒壊、落雷により浜名郡知波田村太田で死者1人。		敷地川で橋が流失、原野谷川・法多沢川で堤防決壊。袋井町では床上浸水50戸。			掛川町で床上浸水20戸。
昭和	27	4	18	落雷		磐田市貝塚で焼失1戸。				
昭和	28	6	23~24	大雨	台風(13号)・高潮:高波	浜松市元浜町で床上浸水47戸、床上浸水500戸。 全壊4戸、半壊35戸、床上浸水263戸、床上浸水216戸、新居井天で高潮のため10戸を残して全滅し、浸水は床上90cmに及んだ。(旧新居町) (家屋被害)入出村:全壊3戸、半壊23戸、(浸水被害)浜名郡知波田村:床上40戸、床上8戸、入出村:床上300戸、新所村:床上120戸、床上7戸、鷺津町:床上250戸、床上40戸。				
昭和	28	9	25~26	台風(13号)・高潮:高波	台風(13号)・高潮:高波	浜名郡治岸で高潮が発生。(浸水被害)気賀町:床上4戸、床上7戸、三ヶ日町:床上10戸、床上55戸。 (浸水被害)気賀町:床上4戸、床上84戸、三ヶ日町:床上15戸、床上80戸。				
昭和	29	8	18~19	台風(5号)・高潮	台風(5号)・高潮	磐田郡掛塚町南部で床上浸水30戸。				
昭和	29	9	17~18	台風(14号)・高波	台風(14号)・高波					

和暦 年号	西暦		気象概要	被害のあった地域					
	年	月 日		湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
昭和31	1956	9 1	豪雨	湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
				新川に沿った八幡町・助信町・山下町・西上池川町・中沢町・上池川町などで床上浸水555戸があり、名残町をはじめ床上浸水6,000～7,000戸の被害が生じた。前線の影響で浜松地方は曇りから2～3時間の間に豪雨が降り、1時間に55mm、総降水量は89mmに達した。					
昭和31	1956	9 26～27	台風(15号)		全壊2戸、半壊1戸、(浸水)床上20戸・床下1,275戸。宇利山川が氾濫し水橋が流失、堤防も2箇所決壊。浸水家屋は三ヶ日町で20戸、細江町で12戸。				
昭和32	1957	4 21～23	大雨		浜松市森町で22戸が床上浸水したほか、全市で150戸の床上浸水。				
昭和33	1958	7 20～23	台風(11号)						
昭和34	1959	8 26～27	豪雨		浜松市では半壊1戸、(浸水)床上2戸・床下373戸の被害があった。(浸水)床上70戸・床下920戸。(旧浜北市)	(人的被害)磐田市・負傷者1人、(家屋被害)磐田市：全壊1戸、(浸水被害)磐田市：床上3戸、床下30戸、豊岡村：床上150戸、床下600戸。	太田川上流の敷地川、一宮川が袋井市三川で氾濫、その他原野谷川などでも橋の流失があった。(浸水被害)袋井市：床上26戸、床下40戸、周智郡山梨町：床上10戸、床下215戸。	掛川市各和原川一帯で突風が起こり、全壊3戸、半壊12戸。全壊2戸、半壊5戸、流失24戸、(浸水)床上435戸・床下220戸。	
昭和34	1959	9 26	伊勢湾台風(15号)、高潮、高波	日本海中部の低気圧から南にのびた温暖前線が停滞し各地で局地的な豪雨となった。総雨量：三倉272mm、(家屋被害)磐田市：全壊113戸、半壊645戸、浜名郡下：全壊38戸、半壊129戸、(浸水被害)浜松市：床上54戸、浜名郡下：床上216戸、床下697戸。浜名湖沿岸で高波が押し寄せ、引佐郡細江町・三ヶ日町で80余戸が床上浸水。	浜名湖に高潮が起こり、浜名郡で全壊39戸、半壊129戸、(浸水)床上216戸、床下697戸。(旧新居町)湖西町では全壊21戸、半壊44戸、浸水171戸、入出地区は高潮被害。	26日18時30分頃伊半島南部に上陸、中心気圧は950mb。その後岐阜付近を通り、秋田沖へ去った。最大風速：浜松26.4m/s、静岡21.4m/s、日雨量：水窪215mm、山香235mm、大河内202mm等。	全壊4戸、半壊7戸。	県西部で被害が多かった。当地は森町三倉の本河川畔で全半壊家屋が多かった。また道路は周智トンネルなど各所で寸断、交通途絶した。	
昭和34	1959	10 7	台風(16号)		磐田郡南郷で床上浸水11戸、床下浸水40戸。				
昭和34	1959	10 28～29	雷雨		浜松市入野で住家約1,300戸が浸水。				
昭和35	1960	8 12～14	台風(12号)						太田川が氾濫し、死者1人、床上浸水80戸、流出4戸、橋流失8箇所。
昭和36	1961	4 15～16	大雨		床上浸水250戸、崖崩れ1箇所。				
昭和36	1961	6 23～29	豪雨		浜名郡浜北町で床上浸水36戸、床下浸水29戸。				
昭和36	1961	9 14～16	第2室戸台風、高潮		浜名湖に高潮発生。(浸水被害)三ヶ日町：床上浸水7戸、床下浸水45戸、細江町：床上浸水9戸、床下浸水4戸。				
昭和37	1962	8 26	台風(14号)、巻卷		負傷者18人、全壊27戸、半壊168戸。(26日志摩半島に上陸した台風にともなって各地に高潮が発生した。浜松市天竜川河口付近で発生したものは北西に進み、浜名郡真町伊佐地付近に至り、浜名郡磯原村坪井で発生したものは北西に進んで浜名湖上で消滅した。)浜松市内の低地では420戸が床				掛川市高御所で山が崩壊し、床上浸水7戸。

和暦		西暦			気象概要		被害のあった地域					
年号	年	月	日				湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
								下浸水。				
昭和	37	1962	9	4	豪雨						森管内で負傷者1人、全壊1戸、床上浸水4戸、床下浸水458戸。 (太田川上流大河内で4日2～3時の1時間雨量119mmの豪雨であった。太田川は急増水して、土砂崩れ、浸水により家屋に被害を生じた。)	
昭和	38	1963	5	15～17	大雨			浜松署管内で床上浸水1戸、床下浸水11戸。	磐田署管内で床上浸水10戸、床下浸水33戸、田畑冠水1.04ha。		森管内で床上浸水1戸、床下浸水61戸。	掛川署管内で死者1人、床下浸水27戸。
昭和	38	1963	6	2～5	台風				磐田郡竜洋町の天竜川で死者1人。			
昭和	38	1963	8	22	雷雨			浜松市名残町で1戸が床上浸水し、山下町・元浜町・天神町・旭町・松原町・海老塚町・砂山町など73,600戸が床下浸水。				
昭和	38	1963	8	28～29	台風			床下浸水106戸。				
昭和	38	1963	8	29	大雨・竜巻			浜松市佐藤町・向宿町・天神町・幸町などで床下浸水約350戸。				
昭和	39	1964	3	20	大雨			新川が溢れ、付近の真田町の105戸が床上浸水、他約20ヶ町にわたって1,775戸が床下浸水。				
昭和	39	1964	6	27～28	豪雨			床上浸水2戸、床下浸水191戸。				床下浸水30戸。
昭和	39	1964	9	22～25	台風(20号)			浜松中央署管内で死者1人。				
昭和	40	1965	6	15	豪雨			床上浸水1戸、床下浸水771戸。浜松で雷を伴った集中豪雨となり、家屋浸水、土砂崩れなどの被害が発生した。				
昭和	40	1965	7	4～5	大雨			浜松中央署管内で、床下浸水230戸。	磐田署管内で床上浸水43戸、床下浸水123戸。			
昭和	40	1965	9	15～18	台風(24号)・高波			新居町で床上浸水1戸、床下浸水136戸。	磐田署管内で負傷者1人、全壊3戸、半壊16戸。		森管内で負傷者1人、全壊1戸、床上浸水89戸、床下浸水203戸。	
昭和	41	1966	6	27～28	台風(4号)			(人的被害)浜松中央署管内:死者1人、(家屋被害)浜松中央署管内:全壊1戸、半壊1戸、(浸水被害)浜松中央署管内:床上20戸、床下3,408戸、浜松東署管内:床上2戸、床下224戸、細江町:床上2戸、床下90戸。(その他被害)浜松中央署管内:田畑冠水712ha、道路損壊8箇所、堤防決壊1箇所、山崩れ9箇所、浜松東署管内:田畑冠水299ha等。	床上浸水15戸、水田冠水8,000ha。		床上浸水14戸。	床下浸水20戸。
昭和	41	1966	10	12～13	豪雨			台風は28日石廊崎の南方200km付近の海上を通り、房総の東海上に抜けた。総雨量:静岡248mm、浜松256mm、袋井300mm、大河内299mm等。				
								新居署管内で死者1人、床上浸水25戸、床下浸水160戸。	(家屋被害)細江署管内:全壊1戸、半壊3戸、(浸水被害)浜松中央署管内:床上1戸、床下13戸、			

和暦 年号	年	西暦 月	日	気象概要	被害のあった地域					
					湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市
					細江署管内：床上300戸、床下919戸。その他細江署管内で田畑冠水1,080ha。					
昭和	42	1967	6	豪雨						
昭和	42	1967	10	台風(34号)	新居署管内で全壊2戸。				床下浸水 50戸。	床下浸水61戸。
昭和	43	1968	7	豪雨	新居署管内で床下浸水31戸。					
昭和	43	1968	8	台風(10号)	新居署管内で床上浸水2戸、床下浸水43戸。	新居署管内で床上浸水21戸、床下浸水129戸。			森署管内で半壊2戸、床上浸水28戸、床下浸水226戸。	掛川署管内で全壊3戸、半壊3戸、床上浸水9戸、床下浸水342戸。
					台風10号と台風11号に刺激された秋雨前線により大雨となった。総雨量：静岡422mm、浜松309.5mm、引佐378mm、水窪651mm等。					
昭和	44	1969	6	雷雨		土砂崩れにより、浜松市池川町地内で生家・公民館など3棟が半壊。また、磐田郡豊田村・福田町・浜松市神々谷町地内で計3棟が落雷により全壊、1棟は屋根焼く。				
昭和	44	1969	8	台風(7号)	新居署管内で床上浸水1戸、床下浸水11戸。	(浸水被害)浜松中央署管内：床上10戸、床下67戸、浜松東署管内：床上1戸、細江署管内：床下17戸。			森署管内で負傷者2人、半壊9戸、床上浸水127戸、床下浸水291戸。	
昭和	46	1971	8	台風(23号)・竜巻	新居署管内で床上浸水5戸、床下浸水89戸。	(家屋被害)浜松中央署管内：全壊1戸、半壊2戸、浜松東署管内：半壊2戸、(浸水被害)浜松中央署管内：床上260戸・床下1,311戸、浜松東署：床上8戸・床下334戸、(その他被害)浜松中央署管内：田畑冠水1,300ha、道路決壊6箇所、橋梁流失3箇所、堤防決壊7箇所、山崩れ1,128箇所、浜松東署：田畑冠水25ha、山崩れ2箇所等。 (浸水)床上89戸・床下634戸、田畑冠水1,485ha、道路決壊22箇所、山(崖)崩れ41箇所。(旧細江町) 31日3時30分ころ、浜松市高岡から上天神、油一色、新原本村にかけて、竜巻により民家など約30戸が全半壊。被害は幅50m、長さ5kmの範囲。	磐田署管内で半壊1戸、床上浸水10戸、床下浸水678戸。		森署管内で床上浸水15戸、床下浸水91戸。	掛川署管内で全壊1戸、半壊2戸、床上浸水12戸、床下浸水100戸。
					風による被害は少なかったが、南からの暖湿気流のため大雨が断続的に降った。総雨量：静岡298mm、浜松331mm、引佐407mm、三ヶ倉390mm等。					
昭和	47	1972	7	大雨					森署管内で床上浸水6戸、床下浸水243戸。	掛川署管内で負傷者1人、床上浸水4戸、床下浸水9戸。
昭和	47	1972	7	台風(6号)		浜松中央署管内で負傷者1人、床上浸水9戸、浜松東署管内で床下浸水34戸。	磐田署管内で床下浸水40戸。			掛川署管内で負傷者2人、全壊1戸、床下浸水31戸、山(崖)崩れ18箇所。
昭和	47	1972	7	台風(9号)		(家屋被害)浜松中央署管内：全壊2戸、半壊3戸、(浸水被害)浜松中央署管内：床上10戸、床下149戸、細江署管内：床下50戸。	磐田署管内で床下浸水20戸。			
昭和	47	1972	9	大雨	新居署管内で床上浸水1戸、床下浸水150戸。	浜松東署管内で床下浸水120戸。				
昭和	47	1972	9	落雷		浜松市浅田町の工期に落雷し、3棟全壊。死者1人、負傷者3人。				
昭和	49	1974	7	台風(8号)	全壊14戸、半壊10戸、(浸水)床	(人的被害)浜松中央署管内：死	負傷者3人、全壊4戸、半壊15	集中豪雨により延久・横井で太	死者1人、負傷者5人、全壊1戸、	掛川署管内で負傷者1人、半壊1

和暦 年号	西暦 年 月 日	気象概要	被害のあった地域						
			湖西市	浜松市	磐田市	袋井市	森町	掛川市	
		(七夕豪雨)		死者4人、負傷者2人、浜松東署管内：死者1人、(家屋被害)浜松中央署管内：全壊2戸、半壊8戸、流失6戸、(浸水被害)浜松中央署管内：床上147戸、床下1,013戸、浜松東署管内：床上340戸、床下2,415戸、(その他被害)浜松中央署管内：決壊道路1箇所、橋梁1箇所、山崩れ27箇所、浜松東署管内：冠水田畑197ha、橋梁6箇所、堤防11箇所、山崩れ33箇所等。 死者1人、負傷者5人、全壊21戸、半壊31戸、流失5戸、(浸水)床上681戸・床下1,678戸、流失田畑124.87ha、冠水田畑759.15ha、決壊道路506箇所、橋梁50箇所、堤防20箇所、山崩れ915箇所。(旧細江町)	戸、流失8戸、床上浸水312戸、床下浸水529戸、冠水田畑659.1ha、決壊道路8箇所、橋梁3箇所、堤防6箇所、山崩れ2箇所。	田川が決壊し、多くの被害を受けた。全壊6戸、半壊11戸、床上浸水103戸、床下浸水80戸、その他田畑の浸没、河川崩壊等。	半壊2戸、流失9戸、床上浸水217戸、床下浸水494戸、冠水田畑354.7ha、決壊道路49箇所、橋梁9箇所、堤防8箇所、山崩れ86箇所。	戸、床上浸水3戸、床下浸水59戸。	
昭和50	1975	10 5	台風(13号)・竜巻		床上浸水 30戸、床下浸水100戸。				
昭和50	1975	10 7~8	豪雨	半壊1戸、床上浸水114戸、床下浸水806戸、その他、鉄道・道路・通信施設に被害。(旧新居町)	市内全体で床上浸水987戸、床下浸水5,662戸。 姫留川流域で家屋の浸水や田畑の冠水があった。	死者1人、負傷者1人、床上浸水743戸、床下浸水1,517戸。鉄道・道路・通信施設にも被害。		森署管内で床下浸水34戸。	掛川署管内で床上浸水61戸、床下浸水715戸。
昭和50	1975	11 22~23	台風(20号)・高波		浜松市天竜川河口付近で、高波により行方不明2人。				
昭和51	1976	5~7 19~21	台風(9号)・大雨		磐田市・浅羽町・掛川市にて木田川堤防決壊と内水氾濫、全壊流失1戸、床上浸水184戸、床下浸水821戸。				
昭和51	1976	7 10~13	強雨		浜松中央署管内で床下浸水30戸。	磐田署管内で負傷者2人、全壊1戸、半壊1戸、床上浸水29戸、床下浸水430戸。		森署管内で全壊1戸、床下浸水85戸。	掛川署管内で負傷者1人、全壊1戸、半壊1戸、床上浸水17戸、床下浸水102戸。
昭和51	1976	8 9~10	台風(13号)・高波	新居町沿岸で、高波のため行方不明者あり。					
昭和51	1976	8 17~18	強雨	強雨と浜名湖の満潮時がかさなり、川の水位があふれ、湖西市鷺津・浜名郡新居町・磐田市・久保川増水により、床上浸水29戸、床下浸水63戸。					
昭和51	1976	9 8~14	台風(15号)・竜巻		(家屋被害)浜松市：半壊1戸、細江町：半壊1戸(浸水被害)浜松市：床下477戸、浜北市：床下317戸、細江町：床下70戸、雄踏町：床下100戸。				
昭和52	1977	5 15	大雨	新居署管内で床上浸水1戸、床下浸水30戸。	(浸水被害)浜松中央署管内：床上10戸、床下582戸、浜松東署管内：床上1戸、床下270戸。	磐田署管内で床下浸水16戸。			掛川署管内で床上浸水1戸、床下浸水67戸。
昭和52	1977	6 24~25	大雨		浜松中央署管内で床下浸水50戸。				
昭和54	1979	9 4	台風(12号)						逆川の氾濫により床上浸水2戸、床下浸水324戸。

和暦 年号	西暦			気象概要	被害のあった地域					
	年	月	日		湖西市	浜松市	豊田市	袋井市	森町	掛川市
昭和54	1979	10	19	台風(20号)・高潮	(浸水被害)湖西市:床上4戸、床下30戸、新居町:床下6戸。 (人的被害)浜松市:重傷者1人、軽傷者5人、舞阪町:軽傷者1人、(浸水被害)浜松市:床下24戸、舞阪町:床下45戸、細江町:床上3戸、床下16戸、三ヶ日町:床上11戸、床下58戸、雄踏町:床下2戸。	全壊1戸、床下浸水10戸。		軽傷者5人	(人的被害)掛川市:軽傷者1人、大須賀町:重傷者1人、(浸水被害)掛川市:床上1戸、床下4戸、大須賀町:床下1戸。	
昭和55	1980	6	1~8	大雨	袋井市・掛川市・豊田市・森町・豊岡村・豊田町にて太田川堤防越水と内水氾濫。床上浸水2戸、床下浸水628戸。					
昭和55	1980	7	30	大雨	床上浸水14戸、床下浸水78戸。(全県下)					
昭和55	1980	9	7	大雨	床上浸水10戸、床下浸水250戸。(全県下)					
昭和55	1980	10	14	台風(19号)	死者1人。					
昭和56	1981	8	22~23	台風(15号)	死者2人、負傷者1人、半壊1戸、床上浸水80戸、床下浸水899戸、田畑冠水476ha、がけ崩れ51箇所。(全県下)	掛川市と豊田市にて、太田川堤防越水や内水氾濫。床上浸水17戸、床下浸水19戸。			掛川市と豊田市にて太田川流域で堤防越水や内水氾濫。床上浸水17戸、床下浸水19戸。	
昭和56	1981	10	5~9	豪雨	床上浸水78戸、床下浸水1334戸、崖崩れ158箇所。(全県下)					
昭和56	1981	10	8~9	大雨	死者1人、軽傷者1人、道路36箇所、河川42箇所。(全県下)					
昭和57	1982	6	3	大雨	床上浸水13戸、床下浸水231戸。(全県下)					
昭和57	1982	7	17	大雨	床上浸水10戸、床下浸水231戸。(全県下)					
昭和57	1982	7~8	31~3	台風(10号)	(浸水被害)湖西市:床下3戸、新居町:床下3戸。 (浸水被害)浜松市:床下22戸、浜北市:床下28戸、細江町:床上4戸、床下13戸、引佐町:床下4戸、三ヶ日町:床下13戸。	(浸水被害)豊田市:床上6戸、床下15戸、稲田町:床上5戸、床下180戸。 (浸水被害)豊田市:床上14戸、床下21戸、稲田町:床上13戸、床下577戸、竜洋町:床下3戸。	床上浸水3戸、床下浸水15戸。半壊1戸、床下浸水4戸。		半壊1戸、床上浸水46戸、床下浸水102戸。	
昭和57	1982	9	10~12	台風(18号)	(浸水被害)湖西市:床下2戸、新居町:床下1戸。 本州南岸沿いに停滞していた前線が台風の接近にともなって活発化し、12日には台風が御前崎の西方へ上陸した。総雨量、静岡497mm、掛川504mm、庵ヶ島485mm等。	(浸水被害)豊田市:床上130戸、床下4,606戸、可美村:床上1戸、床下104戸。 2つ低気圧による深い気圧の谷が通過、県下各所で大雨となった。浜松では30日6時に測候所開設以来最高の時間雨量97.5mmを記録した。				掛川市下垂木で茶畑が崩れ、2人が死亡した。市の中心部でも、逆川が決壊し、浸水した。市内全域で、死者2人、負傷者11人、全壊5戸、半壊4戸、(浸水)床上994戸・床下1,441戸、大須賀町で(浸水)床上80戸、床下280戸。
昭和57	1982	11	30	豪雨	(浸水被害)浜松市:床上130戸、床下4,606戸、可美村:床上1戸、床下104戸。 2つ低気圧による深い気圧の谷が通過、県下各所で大雨となった。浜松では30日6時に測候所開設以来最高の時間雨量97.5mmを記録した。	床上浸水5戸、床下浸水101戸。床下浸水23戸。				床上浸水6戸、床下浸水61戸。
昭和58	1983	8	12~19	台風(5・6号)	床上浸水32戸、床下浸水183戸、田畑冠水203ha、崖崩れ9箇所。(全県下)	豊田市、浅羽町などの太田川流域で内水氾濫。床上浸水28戸、床下浸水217戸。				
昭和58	1983	8	15~18	台風(5・6号)	(浸水被害)湖西市:床上4戸、床下171戸、新居町:床下21戸。 (浸水被害)浜松市:床下9戸、浜北市:床下2戸、可美村:床下10戸、舞阪町:床下21戸、雄踏町:床上1戸、床下7戸、細江町:床上2戸、床下1戸、引佐町:床下1戸、三ヶ日町:床下19戸。	(浸水被害)豊田市:床上15戸、床下15戸、稲田町:床上86戸。 (浸水被害)豊田市:床上1戸、床下7戸、細江町:床上2戸、床下1戸、引佐町:床下1戸、三ヶ日町:床下19戸。	床上浸水12戸、床下浸水15戸。床下浸水28戸。		(浸水被害)掛川市:床上9戸、床下50戸、大須賀町:床下3戸。	
昭和58	1983	9	8	大雨	床上浸水32戸、床下浸水183戸、田畑冠水203ha、崖崩れ9箇所。(全県下)	床上浸水9戸、床下浸水145戸。				
昭和60	1985	6	20	大雨	床上浸水32戸、床下浸水183戸、田畑冠水203ha、崖崩れ9箇所。(全県下)	床上浸水9戸、床下浸水199戸。(全県下)				
昭和61	1986	8	3~6	台風(10号)	死者1人、全壊1戸、半壊2戸、床上浸水20戸、床下浸水194戸。(全県下)	床上浸水9戸、床下浸水199戸。(全県下)				
昭和62	1987	8	5~6	豪雨	床上浸水17戸	(浸水被害)浜北市:床上1戸、床下31戸、細江町:床下6戸、三ヶ日町:床下11戸。				
平成1	1989	6	28	豪雨	床上浸水9戸、床下浸水199戸。(全県下)					
平成1	1989	8	17	大雨	床上浸水87戸、床下浸水820戸。(全県下)					
平成2	1990	8	8~11	台風(11号)						
平成2	1990	9	30	台風(20号)	床上浸水41戸、床下浸水811戸、道路151箇所、河川17箇所、崖崩	袋井市で太田川内水氾濫。床上浸水3戸、床下浸水304戸。			掛川市柘沢で土砂崩れにより死者1人。	

和暦 年号	西暦			気象概要	被害のあった地域					
	年	月	日		湖西市	浜松市	豊田市	袋井市	森町	掛川市
					丸7箇所。					
平成 3	1991	8	20~21	台風(12号)	床上浸水13戸、床下浸水148戸。(全県下)					
平成 3	1991	9	13~15	台風(17号)	床上浸水36戸、床下浸水326戸。(全県下)					
平成 4	1992	9	29~30	大雨・波浪	床上浸水19戸、床下浸水483戸。(全県下)					
平成 5	1993	2	21~22	大雨・突風	床上浸水23戸、床下浸水159戸。(全県下)					
平成 5	1993	7	5	豪雨	半壊1戸、床上浸水21戸、床下浸水170戸、がけ崩れ37箇所。(全県下)					
平成 6	1994	7	18	大雨	新居町で床下浸水2戸。					
平成 6	1994	9	16~19	大雨	床上浸水10戸	床上浸水1戸、床下浸水12戸。				
平成 6	1994	9	29~30	台風(26号)	(浸水被害)浜松市:床上33戸、床下44戸、浜北市:床上1戸、磯路町:床下2戸、細江町:床下16戸、引佐町:床下3戸。 (人的被害)細江町:死者1人、(家屋被害)浜松市:半壊3戸、(浸水被害)浜北市:床上1戸、床下2戸、細江町:床上1戸、床下6戸、三ヶ日町:床上5戸、床下50戸。					
平成 10	1998	9	15~16	台風(5号)	床上浸水 22戸	床上浸水1戸	床上浸水5戸、床下浸水6戸。			
平成 10	1998	9	18~26	台風(6・7号)		床上浸水1戸、床下浸水12戸。 台風 6・7号で掛川市の逆川が氾濫。豊田市の今ノ浦川扇形内水氾濫。床上浸水69戸、床下浸水152戸。			床上浸水5戸、床下浸水6戸。 台風 6・7号で掛川市の逆川が氾濫。豊田市の今ノ浦川扇形内水氾濫。床上浸水69戸、床下浸水152戸。	
平成 10	1998	9	23~24	豪雨	(家屋被害)浜北市:半壊1戸、浸水被害)浜松市:床上1戸、床下169戸、浜北市:床上4戸、床下93戸、三ヶ日町:床下1戸。 三ヶ日町で軽傷者1人。	(家屋被害)豊岡村:全壊1戸、半壊1戸、(浸水被害)豊田市:床上30戸、床下77戸、豊岡村:床上23戸、床下131戸、稲田町:床上3戸、床下46戸、竜洋町:床下8戸、豊田町で床下1戸。 (浸水被害)袋井市:床上20戸、床下80戸等。浅羽町:床上4戸、床下29戸。 (総降水量211mm、時間最高雨量55mmを観測。)			床上浸水15戸	
平成 16	2004	6	21~22	台風(6号)			床上浸水12戸			
平成 16	2004	9	4~5	豪雨	(浸水被害)浜松市:床上7戸、床下131戸、浜北市:床下1戸、細江町:床下1戸。 (人的被害)浜松市:死者1人、(浸水被害)浜松市:床上8戸、床下241戸、浜北市:床下浸水6戸。	(浸水被害)豊田市:床上36戸、豊田町:床下1戸。 (浸水被害)豊田市:床上52戸、床下124戸、稲田町:床下9戸、豊田町:床下2戸。				
平成 16	2004	11	11~12	豪雨						床上浸水5戸、床下浸水48戸。
平成 17	2005	7	9~10	豪雨	床上浸水1戸、床下浸水48戸。					
平成 23	2011	9	19~21	台風(15号)	重傷者1人、軽傷者33人、床上浸水14戸、床下浸水12戸。	重傷者1人、軽傷者18人。	重傷者1人、軽傷者7人。			軽傷者5人、床上浸水1戸。
平成 24	2012	10	19	台風(21号)・高波		高波 により死者1人。				

◆災害年表作成について

1. 災害年表の作成範囲について

土地履歴調査(災害履歴調査)の対象とした「静岡北部」「静岡」「磐田・掛塚」「浜松」の4図幅について、災害の地域性や都市の一体性を考慮し、隣接する図幅をまとめ「静岡地域」及び「磐田・浜松地域」の2地域を災害年表の作成単位とした。

2. 地震・津波災害

地震・津波災害については、下記資料を参照した。

- ・国立天文台(2012),理科年表.地学部,丸善,p.720-753.
- ・気象庁(2012),気象統計情報.“地震、津波”,気象庁,<http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/index.html>,
(参照 2012.12.21)
- ・静岡県地震防災センター(2011),静岡縣市町村別災害史.静岡県地震防災センター, 2011-3-25.
<http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/shiraberu/higai/saigaishi/index.html>, (参照 2012.10.9)
- ・静岡県産業気象協会,静岡地方気象台(1980),静岡県異常気象災害誌.静岡県産業気象協会, 559p.
- ・静岡県(1979),昭和 54 年における災害の状況. 静岡県,11p.
- ・静岡県(1980),昭和 55 年における災害の状況. 静岡県,19p.
- ・静岡県(1981),昭和 56 年における災害の状況. 静岡県,18p.
- ・静岡県(1982),昭和 57 年における災害の状況. 静岡県,40p.
- ・静岡県(1983),昭和 58 年における災害の状況. 静岡県,37p.
- ・静岡県(1984),昭和 59 年における災害の状況. 静岡県,10p.
- ・静岡県(1985),昭和 60 年における災害の状況. 静岡県,19p.
- ・静岡県(1986),昭和 61 年における災害の状況. 静岡県,9p.
- ・静岡県(1987),昭和 62 年における災害の状況. 静岡県,15p.
- ・静岡県(1988),昭和 63 年における災害の状況. 静岡県,10p.
- ・静岡県(1989),平成元年における災害の状況. 静岡県,13p.
- ・静岡県(1990),平成 2 年における災害の状況. 静岡県,27p.
- ・静岡県(1991),平成 3 年における災害の状況. 静岡県,24p.
- ・静岡県(1992),平成 4 年における災害の状況. 静岡県,15p.
- ・静岡県(1993),平成 5 年における災害の状況. 静岡県,18p.
- ・静岡県(1994),平成 6 年における災害の状況. 静岡県,18p.
- ・静岡県(1995),平成 7 年における災害の状況. 静岡県,20p.
- ・静岡県(1996),平成 8 年における災害の状況. 静岡県,18p.
- ・静岡県(1997),平成 9 年における災害の状況. 静岡県,24p.
- ・静岡県(1998),平成 10 年における災害の状況. 静岡県,24p.
- ・静岡県(1999),平成 11 年における災害の状況. 静岡県,19p.
- ・静岡県(2000),平成 12 年における災害の状況. 静岡県,22p.
- ・静岡県(2001),平成 13 年における災害の状況. 静岡県,27p.
- ・静岡県(2002),平成 14 年における災害の状況. 静岡県,24p.
- ・静岡県(2003),平成 15 年における災害の状況. 静岡県,32p.
- ・静岡県(2004),平成 16 年における災害の状況. 静岡県,38p.
- ・静岡県(2005),平成 17 年における災害の状況. 静岡県,27p.

- ・静岡県(2001),太田川水系河川整備計画. 静岡県,p.10.
- ・岩橋徹,木宮一邦(1972),静岡市石部大崩海岸道路の大崩壊の実態・要因および防災上の問題. 静岡大学地学研究報告, 3(1), p.13-29
- ・静岡地方気象台(2011),平成 23 年台風第 15 号に関する静岡県気象速報. 静岡地方気象台,p.19.
- ・静岡地方気象台(2012),2011 年の気象・地震概況年報. 静岡地方気象台,p.57.
- ・静岡地方気象台(2013),2012 年の気象・地震概況年報. 静岡地方気象台,p.46.
- ・静岡地方気象台(2013),平成 25 年 1 月気象・地震概況. 静岡地方気象台,p.20.

収録期間の全体の柱を、明治から昭和 50 年代までは気象災害についての情報量が他の資料と比較して多い「静岡県異常気象災害誌」及び静岡縣市町村別災害史、昭和 54 年以降平成 22 年までは静岡県災害年報とし、その他の資料で原則補完するかたちを取った。

本年表に記載する条件としては、原則として死者 1 人以上・負傷者 100 人以上・全壊 10 戸以上・半壊 100 戸以上・床上浸水 10 戸以上・床下浸水 100 戸以上の規模の災害であることとした。事象によって郡や警察署の管轄区域等、複数の市町にわたる場合には、記載欄を統合して記載した。

なお、明治 5 年までの事象で資料が和暦のみの記載のものについては、西暦へ補う作業を行なった。

- ・静岡県(2006),平成18年における災害の状況. 静岡県,30p.
- ・静岡県(2007),平成19年における災害の状況. 静岡県,41p.
- ・静岡県(2008),平成20年における災害の状況. 静岡県,42p.
- ・静岡県(2009),平成21年における災害の状況. 静岡県,51p.
- ・静岡県(2010),平成22年における災害の状況. 静岡県,49p.
- ・宇佐美龍夫(2003),最新版日本被害地震総覧[416]—2001.東京大学出版会,605p.
- ・渡辺偉夫(1998),日本被害津波総覧[第2版].東京大学出版会,236p.
- ・大庭正八(1957),1944年12月7日東南海地震に見られた遠江地方の家屋被害分布と地盤の関係.東京大学地震研究所彙報,35(1),p.201-295.
- ・静岡地方気象台(2012),2011年の気象・地震概況年報.静岡地方気象台,p.57
- ・静岡地方気象台(2013),2012年の気象・地震概況年報.静岡地方気象台,p.46
- ・静岡地方気象台(2013),平成25年1月気象・地震概況.静岡地方気象台,p.20
- ・静岡地方気象台(2012),静岡県の地震概況2011年.静岡地方気象台,p.15
- ・静岡地方気象台(2013),静岡県の地震概況2012年.静岡地方気象台,p.12
- ・静岡県(2011),緊急・危機管理情報“3月15日静岡県東部の地震に関する被害状況”.静岡県,2p.
- ・静岡県(2011),緊急・危機管理情報“8月1日駿河湾を震源とする地震に関する被害状況”.静岡県,1p.

収録期間全体の柱を、他の資料と比較して地域の詳細な記述の多い静岡縣市町村別災害史とし、原則他の資料で補完するかたちを取った。

西暦年・震央位置・マグニチュード・地域(地震名称)については、理科年表、気象庁ホームページの気象統計情報「地震・津波」震度データベース検索、静岡県災害年報、静岡地方気象台「地震概況」に準じた。

なお広域に影響を与えていると思われる地震は、被害の有無に関わらず両地域に記載した。

3. 風水害・土砂災害

風水害・土砂災害については、下記資料を参照した。

- ・気象庁(2012),“地震、津波”気象統計情報.(参照2012.12.21)
- ・静岡県地震防災センター(2011),静岡縣市町村別災害史.静岡県地震防災センター,2011-3-25.
<http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/shiraberu/higai/saigaishi/index.html>.(参照2012.10.9)
- ・静岡県産業気象協会,静岡地方気象台(1980),静岡県異常気象災害誌.静岡県産業気象協会,559p.
- ・静岡県(1996),静岡県史.別編2.自然災害誌.静岡県,808p
- ・静岡県(1996),静岡県史.別編2.自然災害誌.付録.自然災害年表.静岡県,131p
- ・静岡県(1979),昭和54年における災害の状況.静岡県,11p.
- ・静岡県(1980),昭和55年における災害の状況.静岡県,19p.
- ・静岡県(1981),昭和56年における災害の状況.静岡県,18p.
- ・静岡県(1982),昭和57年における災害の状況.静岡県,40p.
- ・静岡県(1983),昭和58年における災害の状況.静岡県,37p.
- ・静岡県(1984),昭和59年における災害の状況.静岡県,10p.
- ・静岡県(1985),昭和60年における災害の状況.静岡県,19p.
- ・静岡県(1986),昭和61年における災害の状況.静岡県,9p.
- ・静岡県(1987),昭和62年における災害の状況.静岡県,15p.
- ・静岡県(1988),昭和63年における災害の状況.静岡県,10p.
- ・静岡県(1989),平成元年における災害の状況.静岡県,13p.

- ・静岡県(1990),平成2年における災害の状況.静岡県,27p.
- ・静岡県(1991),平成3年における災害の状況.静岡県,24p.
- ・静岡県(1992),平成4年における災害の状況.静岡県,15p.
- ・静岡県(1993),平成5年における災害の状況.静岡県,18p.
- ・静岡県(1994),平成6年における災害の状況.静岡県,18p.
- ・静岡県(1995),平成7年における災害の状況.静岡県,20p.
- ・静岡県(1996),平成8年における災害の状況.静岡県,18p.
- ・静岡県(1997),平成9年における災害の状況.静岡県,24p.
- ・静岡県(1998),平成10年における災害の状況.静岡県,24p.
- ・静岡県(1999),平成11年における災害の状況.静岡県,19p.
- ・静岡県(2000),平成12年における災害の状況.静岡県,22p.
- ・静岡県(2001),平成13年における災害の状況.静岡県,27p.
- ・静岡県(2002),平成14年における災害の状況.静岡県,24p.
- ・静岡県(2003),平成15年における災害の状況.静岡県,32p.
- ・静岡県(2004),平成16年における災害の状況.静岡県,38p.
- ・静岡県(2005),平成17年における災害の状況.静岡県,27p.
- ・静岡県(2006),平成18年における災害の状況.静岡県,30p.
- ・静岡県(2007),平成19年における災害の状況.静岡県,41p.
- ・静岡県(2008),平成20年における災害の状況.静岡県,42p.
- ・静岡県(2009),平成21年における災害の状況.静岡県,51p.
- ・静岡県(2010),平成22年における災害の状況.静岡県,49p.
- ・袋井市防災会議(2011),袋井市地域防災計画「一般対策編」.袋井市,p.7-11.
- ・藤枝市防災会議(2010),藤枝市地域防災計画「資料編」.藤枝市,p.287-290.
- ・湖西市防災会議(2012),湖西市地域防災計画「資料編」.湖西市,p.6-8.
- ・中部建設協会浜松支所(1990),天竜川治水と利水.建設省中部地方建設局浜松工事事務所,p.369-389.
- ・静岡県(2001),太田川水系河川整備計画.静岡県,p.10.
- ・岩橋徹,木宮一邦(1972),静岡市石部大崩海岸道路の大崩壊の実態・要因および防災上の問題.静岡大学地学研究報告,3(1),p.13-29
- ・静岡地方気象台(2011),平成23年台風第15号に関する静岡県気象速報.静岡地方気象台,p.19.
- ・静岡地方気象台(2012),2011年の気象・地震概況年報.静岡地方気象台,p.57.
- ・静岡地方気象台(2013),2012年の気象・地震概況年報.静岡地方気象台,p.46.
- ・静岡地方気象台(2013),平成25年1月気象・地震概況.静岡地方気象台,p.20.

収録期間の全体の柱を、明治から昭和50年代までは気象災害についての情報量が他の資料と比較して多い「静岡県異常気象災害誌」及び静岡縣市町村別災害史、昭和54年以降平成22年までは静岡県災害年報とし、その他の資料で原則補完するかたちを取った。

本年表に記載する条件としては、原則として死者1人以上・負傷者100人以上・全壊10戸以上・半壊100戸以上・床上浸水10戸以上・床下浸水100戸以上の規模の災害であることとした。事象によって郡や警察署の管轄区域等、複数の市町にわたる場合には、記載欄を統合して記載した。

なお、明治5年までの事象で資料が和暦のみの記載のものについては、西暦へ補う作業を行なった。

土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

浜松

5万分の1

平成25年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省
ホームページからご利用いただけます。

